
食われた俺のゼロ魔戦記

ろんろま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

食われた俺のゼロ魔戦記

【Nコード】

N4663Y

【作者名】

ろんろま

【あらすじ】

聖剣世界に転生して、地道に生活していた俺はある日竜帝に（食事的意味で）食べられた。その竜帝も倒され、ああこれから滅ぶんだなと思っていたら目の前に光の帯が！これはいくっきゃないだろう！

これは竜帝に食われた主人公が、竜帝を相棒として異世界でいろいろやっていくお話です。捏造、原作ブレイク、最強上等！（竜帝が）。主人公は中ボスぐらい。

プロローグ（前書き）

気づいたらやっていた。ドラまたのネタが思いつくまで気分的に更新予定。

これはアナログプロットがあるので更新早いかも。
ドラまたエ…。

プロローグ

…ああ、終わってしまうのか。

デュランの奴が竜帝の喉を貫いたとき『中』でそう思った。

この聖剣世界にハーフエルフとして転生して早三十年。

一年前にこの竜帝に食べられて、ずっと止まっていた時がようやく流れるみたいだ。

転生した最初は呆然としたなあ。なんせトラックに弾かれて気づいたらミラージュパレス。

普通こういうのって転生特典とかあるだろうに何もないし、強いて言えばハーフエルフなだけだった。

まあ、折角なので原作ブレイクしてみたいじゃん？

って感じで主教様に魔法を教えてもらったり、ロジェたちと平和に過ごしてたけど、何も出来なくてさ。

悔しかったな。

でも所詮現実なんてそんなもんだ。

原作通り世界大戦が起きて、壊れていく主教達を年齢よりもずっと幼い体で悲しく見てた。

やがて反乱軍となったロジェたちと合流したけど、テケリよりもちっこい俺は何も出来ず、カオスオーシャンに消えていく家族を見ていた。

：最後にちゃんとお別れできたのが救いだった。

その後、俺はベルガーさんに引き取られ、神官修行に明け暮れた。あ、ヒースとも仲良くなったよ？

優しい聖都生活の中、すさんだ心は少しずつ癒された。

：リロイを救うことは出来なかったがな。でも、数年寿命を延ばすことは出来た。

あの時は久々に泣いた。中身はとっくに成人してるのに子供みたいにな。

それから色々あって、修行を続けた俺は竜帝退治の回復役として無理矢理くっついていった。

丁度この時期ロキさんが死んでしまうのを思い出したからだ。

ベルガーさんはこの時不治の病にかかっていた少女を看っていたから、そのかわりにな。

結果的にロキさんは救えた。ただ、フェアリーは竜帝の隙を作るために…。

攻撃魔法をそんなに使えなかった俺はこの日を機に攻撃魔法も学んだよ。

聖都に戻ると、ベルガーさんが泣いていた。
禁呪を使っても少女を助けようとしていたけど、他でもない少女に断られたらしい。

彼女は人間のまま死ぬことを選び、一月後亡くなった。

：後で思い出したんだがこれでベルガーさんの反乱フラグが消えたんだ。

俺は少女に出来る限りの感謝をしたよ。

養父の凶行を止めてくれてありがとうって。

彼女は笑いながら――逝った。

当然、手厚く葬ったさ。

俺達は彼女の分まで人を救おうと決意新たにし、そこから11年経った。

たまたまアルテナにきていた俺は、魔法練習している男女に出会ったんだ。

あまりにも必死な姿に、つつい声をかけてそれがアンジェラ王女と後の紅蓮の魔導師だと知った。

まあその時はそこまで思い出してなかったが。

何とか魔法を使わせてあげたいな、と思った俺は二人を連れてウンディーネを訪ねてみた。

俺のお願いにウンディーネは快く頷いてくれて、二人は何とか水を

出すことに成功。

紅蓮さんは魔力が少なかったからちよびっとしかでなかったが、アンジェラ王女は滝のように出た。

…死ぬかと思っただぜ。

まあ魔法使えるようになってよかったな、と祝って俺はアルテナを出る…筈だった。

紅蓮さんがクオン大陸へ行ってしまったのだ。

あそこは倒したとはいえ竜帝の眠る場所。

アンジェラ王女に頼まれた俺はすぐさま連れ戻しにいき…既に復活していた竜帝に喰われた。

そこからの記憶は非常に曖昧だ。

なんとなーくナバルとローラントへ行った覚えはあるんだが…何をしたかなんて覚えてない。

でも良いことをした気がするのは何でだ？

はっきり覚えてるのは仮面かぶって各地のマナストーン解放してたぐらいかね。

多分どころか絶対洗脳されてたんだな、俺。

自我取り戻したのはどっからだっけ…。

敵対組織をぶっ潰し、ドラゴンズホールで勇者たちと対面したとき

かな？

流石にかわいい妹シャルロットを見ればイヤでも起きる。

…シスコン言うな自覚してらあ。

その時の俺の台詞、こうだもん。

「来たな。マナの剣を寄越…シャルう!？」

「「!？」」

いやー、あれは面白かった。

敵味方関係なく驚いて俺見たからね。

まあそんな感じで洗脳解けた俺ですが、あっさり竜帝に連れ戻されちまって。

役に立たん!と罵倒されて再び洗脳…されかけたけどじっくりお話して、きちんと手を抜かず戦うと確約した。

それまで自由にしておけると言われたのでウエンデルへ戻り、ベルガーさんとヒースにお別れを言いに行った。

勝手に死んでごめん、さよならって。

…今思うと竜帝の一欠片の情けだったかもしれん。ちょこつとだけ感謝してやる。

で、ドラゴンズホールに戻った俺は約束通り本気で勇者たちと殺し合って…負けた。

いやー、あいつらもう相当の化け物だぜ。

だが、シャルロットには悪いことした。

俺はもうアンデッドだから、もう聖都には帰れないって。

…大泣きされて打たれるわ蹴られるわ、ま、俺が悪いんだけどな？

男二人も辛そうだった。

おいこら、野郎がそんな情けない顔するんじゃない。

そう叱って、シャルの頭をなでて俺は滅んだ。

そして今、俺は竜帝の中にいる。

真っ黒な空間で、竜帝が恨めしそうに俺を見ていた。

『貴様が奴らを殺していれば、こんなことには』

いやいや無理だって。

見ただろ、あいつらのチカラ。

今おまえが滅んでるのが何よりの証拠さ。

『…くっ、いつの時代も邪竜は滅ぼされるのみか』

まあ、そういうことなだろう。

でもお前はよくやった方じゃないか？ そりゃあ神様殺すなんて許せないが、出来ることでもない。

『貴様に言われても空しいだけだ…』

はいはい。

ほら、とつと滅ぶぞ。そこで次行くんだ次。

『次だと？』

転生って知ってるか？

実際に体験した俺が言うんだから、次に転生して一緒にバカやろうぜ。

『貴様、どこまでアホなのだ…我らはこのまま滅ぶ運命、女神にも覆せぬ』

まあ普通はそうだろうな。

でも、何となくそうならない気がする。

『――これは！？』

光の帯が俺たちの目の前を横切った。

とてつもないエネルギーだ。ひよっとしたら滅びかけた俺達を呼び込めるかもしれないぐらいに。

『行こうぜ竜帝！ あっちで新たに人生始めよう！』

『…いいだろう、ここまでくれば未練もない。貴様につきあってやる、ハーフエルフ！』

そこは名前で呼ぶところだろう！

何、忘れた？

しょうがない…。

「俺の名前はイオ！　ハーフエルフのイオだ！　しっかり覚えろよ相棒！」

『誰が相棒だ！　元配下の分際で！』

そう言って、俺達は光の帯の中に飛び込んだ。
だが、その後を追うかのように八つの光が飛び込むのには、気づけなかった。

こんにちは異世界

光の帯を抜けた先に、女の子がいました。

俺達の目的である肉体再生がうまくいったと思ったら、これどういう状況？

落ち着け、俺達の状況を確認しよう。

肉体の再生は出来てる、理屈は知らん。

俺は竜帝に食われた時の服装のままで、ゆったりとした雪国の服だ。

対して竜帝。こちらは打って変わって王様が着るような豪華な服だ。

：っ！か何故人間の姿になってる？

まあ本来の姿はでかすぎるにも程があるから良いんだけど。

それにもう一つ。

何か俺異常に怯えられてませんか？

「ゼロのルイズがエルフを召喚した…」

「エルフだけじゃないぞ、どこぞの貴族と平民まで…」

ん？ 平民？

きょろっと辺りを見回して見ると、ぽかんとしている黒髪の少年がいた。

どういう状況か判ってないなこりゃ。そこは俺達も同じだが。

「コルベール先生！ 納得がいきません、儀式のやり直しを！」

俺たちを呼び出したっぽいピンク髪の美少女がちょっと禿気味の男性に言う。

ふむ、儀式と言っていたし結構大事な事なのかね？

「すみませーん、状況の説明を求めます」

「さもなくば貴様等塵も残さず消すぞ」

おいこら！

何物騒なこと言ってるんだよ！

「は、何を言う。我は竜帝ぞ、何故下等な者共を氣遣わねばならん」

…そういうばおまえはそういう奴だったな。

まあいざとなったら俺が抑えればいいし。抑えられるかなんて聞くなよ！

男性は少々冷や汗をかきながら、しかし油断なく言った。

「判りました、説明しましょう」

曰く、これは使い魔召喚の儀式だそうで、ここにいる彼女の進級がかかっているらしい。

ここ学校だったんだな。聖都にも似たようなのがあった、ここまで豪華じゃないけど。

話は戻すが、同時に複数の使い魔が召喚されたことなど未だかつてない上、俺がエルフというのが問題らしい。

契約してくれるのか否か。

契約の方法はキスらしい。

「俺は良いよ。そもそもお嬢さんに呼ばれなきゃ死んでた身だし」

「…私も特別に許可してやろう。そこな小僧はどうする？」

「お、俺？ …うーん、その子が困ってるなら別に良いけど」

少年、キスすること前提に考えてるか？

…多分考えてないだろうな、何というか能天気っぽい。

しかし竜帝が許可を出したのは意外だ。使い魔なんて絶対にやらなさそう――

「……（じゅるり）」

――食う気だ。あの目は捕食者の目だ。

これはいかん、竜帝から絶対に目が離せなくなった。

そんな俺の心配を知ってか知らずか、美少女はふるふると震えながら俺たちを見た。

「…か、感謝なんかしてないんだからね！　へへへ、平民が貴族とこんなことできるのに寧ろ感謝しなさいよ！」

そう言って、美少女は呪文を唱えつつ俺たちとキスする。

…えーと、何かごめん？　でもちよっぴりときどきする。どーせフアーストキスだよ！

ズキッ！

「あいたっ！」

右手が焼けるように熱い！

…だが、まあそれだけだ。実際に致命傷負って死んだ身としては我慢できなくもない。

「ふむう…珍しいルーンですね。少しスケッチさせて下さい」

ああ、どうぞどうぞ。

あんまり興味ないんで。

少年は左手、竜帝は俺と同じく右手に刻まれたみたいだ。

…俺たちの言葉と少し似ているな。少年のはガンダーヴル？

俺たちのは…しん、く、ろ。シンクロ？

まあ読み方があってる保証なんてないが。

「ではこれで春の召喚の儀を終わります。ミス・ヴァリエールは彼らとじっくり話し合って下さい」

「え！ コルベール先生！？」

「大丈夫、契約は済んだのだから。それに、エルフと言っても彼は無害だと思えます」

…この世界のエルフは鬼か悪魔か？

流石に俺は自分より弱いもんをいぢめる趣味はない。

「まあ、改めてよろしくお嬢さん、少年。俺はハーフエルフのイオ」

「我が名は竜帝。他を知りたければ対価を寄越せよ？」

「えっと、俺は平賀才人。あのさ、これ何のドッキリ？ 早く家に帰りたいんだけど…」

ん？

サイトよ、召喚の意味分かってない？

こういうのって呼び出されるかは本人の意思で、しかも一方通行だろう？

「ええっそうなのか！？」

「呆れた…あんたちゃんとゲートを見て私の呼びかけに応えたの？」

「いやだってさ、あんな面白そうなの見たら…入りたくなると言うか」

まあ同意はするさ。

似たような理由でやってきたからな俺達。

しかしそうなる、サイトを元の世界へ戻してやる術が必要になるな。

服装からして、この世界の人間じゃないし。

ファ・ディールでもあんな服ないぞ。

「サイトのことは追々考えるとして…ルイズ嬢、ここではエルフは恐怖の対象なのか？」

「何言ってるのよ！ 私たち人間から聖地を奪ったエルフは敵よ敵！ あんたもエルフなら…：：：そういえばあんたハーフなの！？」

そんな驚いた目で見んでも。

何々、詰まるところ俺はルイズ嬢たちの宗教じゃ異端なんですか。ほお…。

「一度、その宗教の開祖にお話してやりたい気分だ…」

「ふん、女神の教えは全ての愛を平等にだったか？ まあ元神官な貴様には許せん内容かもな」

そーだよ俺は元々クレリック！

詰まるところは聖職者。まあ他教にうだうだ言うつもりはないが、人間以外全て敵ってどんなだよ。

人も亜人も仲良くなれるっつの！

これで聖職者にマトモなのがいなきや弾圧しにいくかもしれない…。まともな奴いますように！

「元神官…もしかしてイオってすごいのか？」

「ん？ 回復魔法なら得意分野だよ。たとえ瀕死の重傷になろうとも一瞬で回復してやるぜ？」

ごくり、と二人が息を飲むのが判った。
この世界の魔法じゃ無理なのかね？

「回復に関しては貴様とその妹が規格外すぎるだけだろう」

なんだあの超回復、どれだけ魔法撃とうと死なないなんてどんなホラーだ、と竜帝はつぶやいた。

…気持ちは分かる、次でトドメと思ったら傷一つなかったなんてザラだからな。

しかしシャルロットが竜帝のトラウマになってると思わなかった。

「あ、そうだ。

一応使い魔の仕事言っとくわよ？

ひとつは感覚の共有。でもこれ何も起きてないわね？」

感覚というと視覚や聴覚とか？ ぜんぜん共有されてないな。

「二つ目は宝石や薬草の収集。でもこれもあんまり期待してないわ。
三つ目、主人を護ること。あんたたちって戦えるの？」

「我をなんだと思っている、竜を統べる帝ぞ。世界を滅ぼせる程度の力は持っている」

俺除く全員が盛大に吹き出した。
比喩なくそれだから困る。

「えっと俺は…喧嘩ぐらいならいけると思う」

「ラスボス以外なら大体イケる」

特に広範囲殲滅戦が得意だよ！とは口に出さない。まあその気になればこの学校壊すぐらいのチカラあるし…。

あ、ルイズ嬢呆れてる。

「はいはい、あんまり期待しないわよ。

あ、そうだ。流石に人間が、それも三人も召喚されると思わなかったから、寝床の準備がなくて。

その、外で寝てもらえないかしら？」

ん、野宿かぁ。うん、俺はかまわんよ。

…何さ竜帝。その不満そうな顔。

「いやにあっさり頷いたわね」

「でもさ、テントとかはどうするんだ？」

良い質問だサイト。

だが問題はない！俺には倉庫があるからな！

ファ・ディールいちの便利魔法『倉庫』から、テント用具を引っ張り出す。

中身が無事で何よりである。

ルイズ嬢があり得ないものでも見ている目を向けてきた。いつとくが旅人なら使えて当然なんだからな！？

こうして、俺と竜帝の異世界一日目は終わった。

…ただ、流石にテントに男三人は失敗だったと記しておく。おえ。

こんにちは異世界（後書き）

第一話。

規格外なのは当然です、一応は黒曜の騎士の代わりなので。近接戦闘も割といけます。

堕ちた聖者の戦い方に近いかも。召喚は出来ませんがね。代わりに狂ったようにエインシャントを使うのがイオです。使用魔法は割と手広いんですが出番あるのかな……。しかしこの小説、空気が多そうである。

異世界2日目（前書き）

予定では決闘編まで行くつもりだったのに…あれ？

異世界2日目

「うわぁ…ひどい目にあった」

テントの外にでると、まだ夜が明けた頃じゃないか。
神官の時の癖でそんな時間に起きてしまった。

サイトと竜帝はまだ寝てる。

しかし…夢じゃなかったんだなあ。

そうだ、軽くお祈りして散策しよう。

学校内はともかく、近くの森ぐらいいならいいだろう。
では女神様、今日も一日が良い日でありますように！
この世界には女神様いないだろうけどね。

散策終了っ！

ん？ 森の生態系とか植物とか調べてただけだぞ。
似てるようで似てないのが多かった。…魔法の植木鉢作って育成で
もするか？

種も倉庫に放り込んでいたし。

そんなことを悩んでたらいつの間にか陽が高いな。
さすがに起こそう。

「おーい、朝だぞ」

「あと五分…」

「……」

：お前ら起きる気ないだろう。竜帝なんか防音結界張ってるし。ちなみに竜帝は浮いて寝てる。雑魚寝が嫌だったらしい。

相当シユールだ：テントがそれなりの大きさはなけりやどうする気だったんだ？

まあ起こすけど。

「アンティマジック」

べちっ！ 魔法効果が解けて竜帝が落ちた。

頭から落ちた気がするが大丈夫だろう。

「サイトゥ」

「：ふひひ」

うわぁ、いらっとくる。

優しく起こそうと思ったけどやめた。

「必殺！ はりせんちよおっぷ！」

「ぶふお！？」

ズパーン！！と良い音が鳴った。

うん、あの時シャルにやられたんだがよく効くな！

「貴様…元配下の分際で…」

あ。

＊

楽しいお勉強の時間だー。

え、やけに棒読み？ あの後どうしたって？ 聞かないで下さい。

強いて言うなら朝ご飯食い損ねたな。

で、現在ルイズ嬢の授業に同席中。全員そろってな。

「おや、ずいぶん珍しい召喚をしましたね、ミス・ヴァリエール」

俺達割り込みましたから。

するとふとっちょの少年が立ち上がった。

「どうせその辺の平民を連れてきたんだろ！ ご丁寧に飾り耳までつけて！」

「何ですって!？」

飾り耳じゃねえぞ!と、言いたいところだが黙っという方が良いな。ふとっちょよ、是非とも広めてくれ!

「大体サモン・サーヴァントで三人も呼び出すのが可笑しいんだよ、ゼロのルイズ!」

「ミス・シュウルーズ！ 侮辱されましたわ、風邪っぴきのマリコルヌに！」

「か、風邪っぴき…僕は風上のマリコルヌだ！」

これは…二つ名かなんかか？

しかし風上と言うことは風の魔法が得意なのか。でもルイズのゼロってなんだ？

あ、先生が粘土を飛ばして黙らせた。

うんうん、先生は怒らせちゃいかんよな。

昔、魔法の師匠だったベルガーさんを怒らせたときなんか…やめよう。ダークリッチの幻影が見える。

つと、ちよつと意識飛んでたな。

危うく魔法講義を聞き逃すところだった。ランク分け理解！

しかし面倒な魔法だ。杖がなきゃ使えないなんてな。

「なあなあ、ルイズの系統って何なんだ？」

「わ、私は…その…何でも良いじゃない！」

おーい、五月蠅いと先生に叱られるぞって遅かった。
眼鏡が光ってる…。

「ではミス・ヴァリエールに錬金を実践してもらいましょう」

ビクッとクラスが凍りついた。
：何だ？ 怯えてるぞ。

青い顔をした赤毛の美女が立ち上がった。

「先生、やめてください！ ルイズは！」

「何です、ミス・ツエルプストー。よもや貴女まで彼女を侮辱するわけではありませんね？」

「違います！ ルイズの魔法は危険なんです！」

「？」

妙だな。クラスの様子からしてもただ事じゃない。だが、観察しているうちにルイズ嬢は行ってしまった。

「竜帝」

「面倒だが…心得た」

生徒はみんな机に隠れてしまったので、俺達だけ防御魔法を展開する。

ちゅぽおん！

「げっ！」

思わず声にでてしまった！

ルイズの魔法はとんでもないな！ 竜帝の防壁を揺るがすとは。

「ちょっと、失敗してしまったみたいね」

無事なようで何よりだけど、煤けてるよ。

結果、ルイズ嬢はぼろぼろになってしまった教室の片づけを命じられた。

俺達も手伝いを申し出たが…気まずい。

ルイズ嬢は泣いていた。

「…魔法成功率0。だからゼロのルイズ…笑っちゃうでしょ。

学院では、いいえメイジなら使えて当然のコモンマジックすら失敗しちゃうんだもの、お似合いよね」

そう言って、自嘲したように笑う。

既視感におそわれる。俺はかつて、似たような人に出会った。

『魔法を使えるようになって、みんなに認めてもらいたいの！』

「アンジェラ王女…」

眩きが風に消えた。

目の前の少女は、同じ苦しみを背負っている。

サイトが言った。

「似合ってねえよ。そんなの、全然似合わない！」
「サイト？」

「爆発するからなんだよ、それだって立派な魔法だろ！
他の誰にもできない、ルイズだけの魔法だ！」

「そう、その通りだ。…ルイズ嬢、聞いてくれる？」

「…何よ」

「魔法が使えなかったお姫様のお話」

ルイズ嬢が目を見開いた。

それを肯定と受け取って昔話のように話し始める。

「とある魔法王国に、一人のお姫様がいました。

お姫様のお母様は、魔法王国最高の魔法使いでしたが、お姫様は魔法を使えませんでした」

ずっと竜帝が目を向けてくる。かまわず続けた。

「お姫様は魔法王国の姫、魔法が使えなくてはなりませんでしたが、
ですがどんなに頑張っても魔法が使えることはありませんでした」

「そのお姫様は、どうなったの？」

震える声でルイズ嬢は言った。

「見かねた神官が、精霊を頼りチカラの振り方を教えてくれました。

その結果、お姫様は魔法が使えるようになったのです」

「精霊…？ そのお姫様が使ったのは系統魔法じゃないの？」

いやこれ違う世界の話だしね、とは言わない。

「彼女は、生まれ持った魔力が大きすぎたんだ。人の身では扱えないほどに。」

だから神官は強い力を持つ精霊に頼んで、チカラの振り方を教えてあげたんだ」

ルイズ嬢も同じじゃないかな、と竜帝に目を向ける。

「そうだな。小娘は我が見ても目を見張る魔力…こちらでは精神力だったか、を持っている。」

思わず食らいたいぐらいのな」

一瞬、朧気なドラゴンの姿が見えた気がした。
何度か見た、竜帝の本性。

「…嘘、私がそんなチカラ、持ってるわけ」

「疑うなら疑え。安心しろ、貴様は魔法が使える。チカラの振り方さえ覚えれば、特別飛び切りのな」

ん？

特別飛び切り？

「最後まで教える義理はない、後は自分で考えろ。それより腹が空いた」

「…そうだな、早く片づけて飯行こうぜルイズ！」

「…もうっ気安く名前で呼ばないでよ！ 使い魔のくせに！」

どうやら調子を取り戻せたみたいだ。よかったよかった。

ところで竜帝、さっきの言葉って…もしかして？

「何も言うな」

「…ん、そうだな」

まだ誰も気づいてないだろう。
ならばその方が良い。

さて、ちゃっちゃんと片づけてご飯に行きますか！ 竜帝も手伝えよ
な！

異世界2日目（後書き）

魔法紹介！

アンティマジック…

敵一体の全魔法効果解除、初期化。

ここでは解呪の基本魔法として扱う予定。割とよくでる？

はりせんちよっぷ…

聖剣伝説3主人公の一人シャルロットのクラス3プリーストの必殺技。

例の戦いでやられる以前から持っていたハリセンを使用。何故持ってたかは謎。

別れの戦いの時には容赦なくシャルロットに使われた。

余談だがそのカウンターでエインシャント浴びせたが倍返しが来た模様。要するに袋叩きである。

一応ただのハリセン。

決闘？ いやいぢめだろこれ（前書き）

決闘編。

正直ここはあまり覚えてなかったり…。

タイトルは、お察し下さい。

決闘？ いやいぢめだろこれ

決闘だ！

金髪の少年が高らかに声を上げた。ただしそれはサイトの方。

俺はというと、同じく金髪なんだけどどこか陰険そうな少年に睨みつけられていた。

身に覚えが無さすぎるんですが！

少年が言った。

「ここは、貴族専用の食堂だ。そしてそこは僕の席でもある…意味分かるな、平民？」

俺が座っているここは竜帝が座っている席の隣である。

厨房行くぞって言うっても聞かなかったんだよ…。

面倒事の予感。

「その付け耳といい、そっちの偉そうな態度といい、躰がなってないようだな。

さすがあのゼロの使い魔だ、品がない！」

「…食事中に騒ぐことの方がマナー違反、品がないと思うんだが」

それにルイズ嬢は関係ないだろうに。

あ、本音がぼろっと。

「貴様、貴族を侮辱するか！」

「侮辱も何も貴様の方が品がないだろう」

そう言って優雅に食事を続ける竜帝。

おい、火に油注ぐな。

あーあ、陰険少年の顔が真っ赤だ。

「決闘だ！ 平民は平民らしくすることを教えてやる！」

「だが断る。食事の邪魔だ、失せろ」

同感だがもうちょいオブラートに包めよ竜帝。

すると、陰険少年は悪戯を思いついたかのようにニヤリと口角を上げた。

「そうか、怖いんだな？ そんな風に貴族の真似事をしようとも所詮は平民。」

僕達貴族に比べれば下等な存在だ」

ピクリと竜帝の指がふるえた。

やばい、本気で怒ってるかもしれん。そうなったら世界終わるぞ。

…はあ。

「陰険少年。相棒の悪口はそこまでにしてもらおう」

「陰険少年…だと？」

「性根の腐ってる悪ガキには陰険少年でも上等な呼び名だ、有り難く思おうか。」

それにルイズ嬢も馬鹿にされたのじゃ黙ってられなくてね、決闘は俺が受ける」

思い切り貶すようだが少年のためだ！

さすがに聖職者としては自殺志願者を見捨てるわけには行かないし。

少年は乗るかな？

「いいだろう、その付け耳切り落としてやる！」

うお、物騒な。

って竜帝笑ってやがる…ハメられた！

そんな訳で何とかの広場。

どうせなら2対2でということになったんだけど…うーん。

「サイトかばうのは面倒くさいから…気障男くん丸投げして良い？」

「ちょ！」

だってサイトの売った喧嘩だろうに。

俺、基本は護身術しか使えないんだよ。

フレイルあればまとめて相手できるけど、使うのハリセンだし。

この方が屈辱的だからな！

「そんな紙切れで僕たちを相手するのか？」

呆れた目を向けてくる陰険少年もといヴィリエ。

いやいやこれで十分すぎるぐらいだし。

「サイト、イオ、やめなさい！ 今なら二人とも許してくれるわ！」

「ごめん、ルイズ。でも下げたくない頭は下げたくないんだ！」

「似たような感じ。大丈夫、負けないよ」

「——っ！ 怪我するんじゃないわよ！」

それだとサイト無理じゃね？

気障男くん——ギーシュが杖を掲げる。

「では、始めよう！ 僕は青銅のギーシュ、土のドッドメイジだ！」

「風の名家ド・ロレーヌのラインメイジ、ヴィリエだ！」

「俺は平賀才人！ おまえらのいう平民だ！」

「名乗るのかこれ？ ……ただのイオだ」

「行くぞ！」

ギーシュの一声で戦いが始まった。

ギーシュは人形を生み出し、ヴィリエは風を放つ。

順番バラバラか。おい、連携プレーしろよ。

放たれた風を軽くかわすと、周囲が息を飲んだのが判った。

「それが本気か？」

「っ、なめるな！」

杖に収束する風が増えたが…まだまだそよ風だな。軽くかわせる。それよりサイトの方は、早くもやばいか？ 人形に翻弄されてる。怪我するなって言われてるし、さっさと終わらせますか。

「この、なんで当たらないんだ！」

「答えは単純、陰険少年のレベルが足りないだけだ！」

ズパパン！

手に持つハリセンが、ヴィリエの頭と手をとらえた！

単純なダメージよりも、耳元で鳴った強烈な音に、ヴィリエは杖を落とした。

ヴィリエの杖を拾ってにっこり笑う。

「お前の負けだ」

「…！ 嘘だ、この僕が平民なんかに！」

ヴィリエが吠えているが無視。

「サイト、手伝うぞ」

「手を出さないでくれ！」

はい？

いやいや、そんなぼろぼろな体で何言ってるのさ、やられるぞ？

「判ってる…でも、これは俺の喧嘩なんだ。俺がけりを付けなきゃ意味がないんだ！」

それに、俺はこいつにルイズをバカにされたのが何より許せねえ
！」

「……」

…はあ。

ここまで言われちゃ手を出す気も起きんよ。

「判ったよ、手当はしてやるから碎けてこい」

そう言うのと、サイトはにっと笑って再び人形に突っ込んだ。

そして数分後、見事にボコボコにされたサイトが出来上がった。

…流石にもう限界だな。

「サイト、もういいでしょ！ ギーシュ、やめてちょうだい！」

「ま…だだ、まだ俺はやれる…！」

「…本当に忠実な使い魔を持ったね、ルイズ。
僕としても動けない相手をいじめる趣味はないし、いいよ、やめにしよう」

「まだだっ…！」

力強い叫びが、広場に響き渡った。
誰も彼もが動きを止める。

サイト、お前…。

ギーシュは一瞬目を伏せて杖を振るった。
花びらが一振りの剣となってサイトの前に突き刺さる。

「まだやる気なら、取りたまえ。これは君への贈り物だ」

「とっちゃだめ！ それを握ったら、今度こそギーシュは手加減しないわ！」

ルイズ嬢、止めても無駄だろうよ。

ほら、サイトは荒い息を繰り返しながらも…剣をとった。

ぼう。

ん？ サイトの左手が光ったような…。

「! ……なんだか判らないけど、力が沸いてきた。いける!」

「!?!」

そんな!

あんなに弱ってたのに剣を構えた!?

剣を握ったサイトは、別人のようなスピードで人形を叩き壊し、ギーシュに剣を突きつけた。

ギーシュ、ヴィリエの負けが宣言される中、違和感が拭えない。

何なんだ?

「サイト!」

っと、思考にふけってる間にサイトが倒れた!

無茶しすぎだ全く!

鞆からはちみつドリンクを取り出す。高価な回復薬だが仕方ない!

「ルイズ嬢、薬だ! これを飲ませてやってくれ!」

「え、ええ!」

見る見るうちにサイトの傷が癒えていく。

ふう、これで一安心か。

「す、すっごい回復力……これとんでもなく高価な薬なんじゃ……」

「高いは高いが人命優先、気にするな」

ホントはヒールライトのほうが緊急には向いてるんだけどな。

でも大っぴらに魔法使ったら目立つし、仕方ない。

…でも何か別の意味で目立った気がするのは何だろうか？

決闘？ いやいぢめだろこれ（後書き）

はちみつドリンク…

聖剣伝説3最高の回復薬。単体で999回復する。

ヒールライト…

回復魔法。効果は使用者の精神によって変動する。

イオはシャルロットと同じぐらい効果がある。

ハリセンで戦う元中ボス。

完全に遊んでます。

因みに竜帝は怒ったわけではなく、イオに発破をかけただけです。

盗賊騒ぎ（前書き）

追い回した生徒は主にモンモンとタバサ。

盗賊騒ぎ

決闘から五日経った。

あの後あの秘薬はどこで手に入れたのか聞かれたけど、作ったと言った。

異世界産だなんて言っても信じてもらえないからな。

実際作れないこともないし。

そうしたらしつこく聞いてくる生徒が出てきたり、お前ら最初の怯えぶりはどうしたんだ、と言いたくなる。

因みに基本は誤魔化して逃げてる。

ここ五日ずっと追いかけてっこだ。疲れた。

「どうせ貴様は目立たないわけがないのだ。いっそ医者だと名乗り、目立てばよいだろう」

「確かに医者と言えるけど」

聖都ウエンドルは別に寄付だけで成り立ってる訳じゃない。

そこで高度な医療技術を学び、外で医者として出稼ぎするのも神官修行に入ってるのだ。

…あくどいことやってる奴もいたにはいたけど、そういうのはたいてい自滅してたなあ。俺も潰したけど。

脱線したけど、俺はある程度以上の医療技術を備えてるから一応医者とはいえる。

「でも微妙なんだよなー…」

「まあ、どっちにしろすでに目立っているのだ。もっと派手な印象を植え付けてしまうのも良いだろう」

学院の先生叩きのめしておいてよく言う。

ギトー先生だっけ？ プライドズタズタにされてたなく、片っ端から風魔法弾かれてたし。

風のスクウェアなだけに自信があっただろうけど、相手が悪すぎた。

竜帝は嫌らしくも風魔法ばかりで攻撃し、とどめにエアスラッシュ使った時には、流石竜帝だと諦観しちゃった。

…中庭の地形がちよびつと変わっただけで済んだのは幸いだろう。

当然だが、その後竜帝の行動に文句言う人間は俺たち除いていなくなった。

噂では東方最強のメイジとか、実は人間の姿をしたエルフだとか言われてるし。

そんな訳で、竜帝は人のことをいえないと思う。

「あんた達、ここにいたの？」

「探したぜ」

ルイズ嬢にサイトじゃないか。

仲良くなって良かったけど、何か用かい？

「べ、別に仲良くなってないわよ！ それより、出掛けるから準備

しなさい」

「？」

竜帝と二人、顔を見合わせた。

「リュウテイはいらないだろうけど、あんた達の武器とか買いにいくのよ。あと、私の用事」

曰く、近々舞踏会があるから小物を買いにいくらしい。

：女の子の買い物って長いんだよねあ。シャルロットなんかすごく長かったし。

武器を買ってくれるみたいだけど、正直求めるレベルの武器があるとは思えない。

まずフレイルあるか怪しいし。それに…。

「残念だけど遠慮しておくよ。二人でデートしておいで」

「ででデートですって!？」

うわ、わかりやすい。

サイトの方もほんのり顔を赤くしているし。

「デートだろ。お兄さんはほっというて行ってきな」

「お兄さんって…イオ何歳なんだ？」

「29歳」

「「嘘!？」」

ハーフエルフは成長が遅いんだよ。
肉体的には15、6歳だが。

「エレオノールお姉様よりも上だなんて…エルフってみんなそうなの？」

俺は成長早い方だよ？

まあエルフが人間とは比べものにならない寿命を持っているのは否定しないけど。

「それはともかく、呆けてないで出掛けといで。お兄さんは忙しいから」

「お兄さんっていうよりおじさんだろ」

うっさい。

そんなこというとハリセンで頭たたくぞ。

「もう、いいわよ! 行きましょうサイト」

そういつて二人は去っていった。

いや、決して女の子の買い物面倒だとかそういう理由で遠慮した訳じゃないからな？

……空しい。

*

時は過ぎて夕刻。

それまで何してたって？ 魔法の植木鉢を作ってた。

倉庫整理してたら、倉庫に武器防具の種とか魔法の種が大量に出てきたんだ…。

少しは入れてたけど、こんな大量は全く身に覚えがないんだが。

偉大なる元主様、おしえてー？

「ん？ …ああ、まだ我に忠実だった頃に、ガラスの砂漠で狩りまくってたぞ」

「何で？」

「知るか」

命令されてたわけではなかったらしい。

まあ俺だし、多分モンスターがうごくってエインシャントあたりを連発していたのだろう。

…なぜ素直にテレポートしなかったんだ？

何にせよ種が大量にあるのは良いことなので、本気で植木鉢を作ってみたのだ。

この世界はマナが多いから楽だわー。
さてさて、早速何か植えてみよう！

ちゅぽどおおん！！

「な、何だぁ！？」

慌てて辺りを見回すと、学院の塔の一つにひびが入っていた！

…あれやったの、ルイズ嬢じゃないよな？

「む、あんな所に小娘の姿が」

「流石、悉く俺の期待を裏切ってくれるな竜帝」

なんてこったい、流石に怒られるだけじゃ済まんだろうに。

声をかけるか否か…でも面倒事な予感。

すると。

どーん！という効果音がまさしく似合う巨大なゴーレムが出現した！
…え、どういうこと！？

「泥棒だろう。確かあそこは宝物庫だといっていた」

ちよ、それまズくね？

しかもサイト達何か戦う気だし！

ああもう！

「イビルゲート！」

全てを飲み込む闇の渦がゴーレムを中心に生まれる…が詠唱破棄だ

と流石に全部消すとまで行かないか！

ゴーレムを半分飲み込んだところで効果が切れる。

しかし、それが嘘かのように瞬く間にゴーレムは再生した！

「どうやら土とつながる限り再生できるらしいな」

「面倒な！」

イビルゲートの上位呪文、ダークフォースの詠唱を始めるが、完成する前にゴーレムは何かを持ち去った！
なんつう逃げ足！

はあ。ダークフォースの詠唱を中断してため息をつく。

「絶対面倒事だ…」

我ながら運がないなあ。

竜帝は面白そうに笑ってるけど。

「いや何、思いの外貴様の慌てる顔が面白くてな」

こんなことなら操り人形にせずに最初から素で協力させればよかった、と一人ごちた。

…畜生、あの時下克上しとけばよかった！

盗賊騒ぎ（後書き）

魔法の植木鉢…

種を植えると一瞬でアイテムが手に入る植木鉢。

宿屋に普通に置いてあるので知識があれば作れると捏造。

エインシャント…

無属性魔法。空から隕石を降らせるが、ここでは本物降らせるわけではなく、魔力で生み出した岩を降らせるものとする。

一応本物を降らせることは出来なくもない。

凄まじい破壊力を誇るがその分消費も大きい。何気なくイオの得意魔法である。

イビルゲート…

闇の初級魔法。対象を起点に闇が全てを飲み込む。

ダークフォース…

イビルゲートの上位呪文。対象を闇に引き込み、全方位から攻撃する。

全体攻撃をするとエフェクトが派手になる。

エアスラッシュャー…

風の神獣の必殺技。

凶悪な風は沈黙（詠唱不可）状態へ陥らせる。

本来の威力なら中庭が余裕で全壊するが、手加減された模様。

テレポート…

敵の幹部さんだけが使える転移魔法。

因みに、アンジェラも呪文を覚えればできただろう魔法である。転移距離に比例して消費が大きい。

魔法に関しては基本ゲームですが、記憶が曖昧なところがあるので間違ってたらず指摘して下さい。

イオの年齢が明かされましたが、実は一歳サバ読んでます。死んでる間はカウントにはいるのか微妙ですが。

ちなみにギトー先生はその長い鼻を叩き折ったら面白そうという理由で喧嘩ふっかけられました。
ここの竜帝フリーダムすぎる。

ギトー先生に祝福あれ。

※少し訂正しました。

破壊の杖を取り返せ！（前書き）

フーケ捕縛編。捕縛…編？

破壊の杖を取り返せ！

おっすおらイオ！ …電波を受信したみたいだ、忘れてくれ。

予想通り面倒事になった。

学院の宝が盗まれたことで、急遽盗賊フーケ討伐隊が編成されたのだ。

その討伐隊のメンバーの中には、ルイズ嬢も入ってる。

我らがご主人、ルイズ嬢が行くんだから当然使い魔も駆り出される訳で、今馬車に揺られる状況となった。

知らんぷりしようかと思ってたけど、イビルゲートをばっちり見られてたもんで行くしかないし。

「…畜生、俺は回復しかやらないからなー」

「何でそんなに嫌がってるんだよ？」

ただの理不尽な反抗心だ。要するに言っただけ。

そりゃあまあ盗みは悪いことだ。

悪いことだけど…教師が討伐隊に参加せず、生徒だけってのに納得がいかない。

見たところタバサとロングビルさんは中々やるようだけど、あとは実戦経験なし。

歴戦の盗賊にこれは酷い。やる気もなくすってもんだ。

「それよりサイト、何で剣を二振り持つてるんだ？」

「あたし達のプレゼントよ！」

ほうほう、モテ男の自慢かこの野郎。

でも…。

「こっちの綺麗な剣、こりゃ飾り用の剣だな。実戦には耐えられないぞ」

「ええ、そんなことないわよ！ 千エキューもしたし、店主だって一杯褒めてたのよ？」

「千エキューがどれだけの価値かは知らないけど、事実だ。少なくとも素人に持たせるようなもんじゃない」

勝手に拝見しといて酷い言い草かもしれないが、事実である。これが使うのがデュランだったらマシだけど…いや、本人の性格上使わないな。つかキレるな。

これでもう一つも酷いようだったら、サイトは戦力外通告だが、さて。

「やるじゃねえかエルフの兄ちゃん、あっさり剣の質を見抜くなんてよ」

「…喋った!？」

鞘から抜いた瞬間、もう一つの剣が喋り出したのだ！

勝手に動き回る剣なら幾度も見たことあるが、流石に喋る剣なんて初めて見た。

じっと剣を見つめると、何やら魔法が掛かっているのが判る。これが喋る正体か？

しかし。

「これ凄いな…所々錆びててボロいけど、手入れすれば十分使えるレベルだ」

「おうよ、このデルフリンガー様は守るための剣だからな！
その辺の剣と比べられちゃ困るってもんよ！」

へえ、守りの剣か。

「その心、気に入った！」

と言うわけでサイト、これが終わったらデルフとこっちの剣の手入れな」

人から貰った物は何であれ大切に。

しかし竜帝退治の時叩き込まれた知識が役に立つとは思わなんだ。

竜帝といえバ。

「よくついてきたなー」

ふよふよと浮いている竜帝に問う。

つか、素直に乗れよ。

「…暇つぶしだ」

ん？ 何か間があったような。

「竜帝、何か隠してないか？」

「…言うほどのことではない」

気のせいだ。そう言って竜帝はそっぽを向いてしまった。

「もうすぐフーケを目撃した廃屋です。気を引き締めて下さい」

ロングビルさんが窘めるように言った。

すいませーん…。

馬車を降り、鬱蒼とした森を歩く。

暫く歩くと開けた場所にでた。廃屋がある、あれか。

だが人の気配がない。居るのか、本当に？

「作戦会議」

ちよこん、とタバサが地面に正座した。そして枝を使って絵を描く。

ようやくするところだ。

囃兼偵察役が先行、フーケがいれば挑発して外にでたところを集中砲火。

いなければ合図、といった具合だ。

で、その囃だが…。

「どうして俺を見てるのかなみんな？」

「だって…なあ？」

「紙切れだけでメイジを圧倒した。動きも早い」

「すごい魔法使うし」

「それにエルフなんだからどうにでもなるでしょう？」

まさに集中砲火。ひでえ！

「俺は回復が専門なんだよ！」

「つべこべ言わずに行ってこい」

げしっ！と竜帝に蹴られた。

…覚えてろ、種から良いもの出てもやらないからな！

「つか…やっぱいないじゃん」

小屋を覗いて誰もいないことを確認し、合図する。

みんな恐る恐ると言った具合でやってきた。

タバサは畏がないことを確認し、中へはいる。キュルケ達も続いたが、ルイズ嬢は見張りをするといって残った。

ロングビルさんは見回り。

俺も見張り組だが…ルイズ嬢落ち込んでないか？

「どうしたのさ？」

「…何」

「落ち込んでるように見える」

ルイズ嬢はハッと目を見開くと、すぐに俯いた。

「別に落ち込んでないわ。だってフーケを捕まえればお手柄なもの」

「そうか？」

気のせいかな？と、思い直すと、急に影が懸かった。

…ん？

振り向くと、拳を振り上げているゴーレムが目に入った…ってええええええ！

「ルイズ嬢！」

「きゃああああっ！」

間一髪、ルイズ嬢を抱きかかえて離脱。

しかしゴーレムは廃屋の屋根を破壊した模様。竜巻と炎が起こり、直後三人が離脱してきた。

「おおおお、降ろして！」

「あ、忘れてた」

はい、とルイズ嬢を降ろす。軽くてよかったよ。

そうこうしてる間にゴーレムが距離を詰めてきた。すると、ぼんっ！と一部が砕け散った。

背後から聞こえる声で、ルイズ嬢の爆発だと判断する。

「何してんのさ！」

「あいつを捕まえるの！」

そう言っただけでも何度も爆発を繰り返す。けれど少し削れるだけですぐ再生してしまう。

「ルイズ嬢、退くんだ！　ここは俺が何とかするから！」

「それじゃ、あんたに頼りっぱなしじゃない！　私は貴族よ。」

魔法を使える者を貴族と呼ぶんじゃない、敵に後ろを見せない者を貴族と呼ぶの！」

そう言って詠唱した呪文を解き放つ——また爆発。ゴーレムとの距離はもうない！

「ああもうっ！」

再び抱き抱えて回避！

殴られた地面が陥没してる、間一髪だ。

「君、本当に心臓に悪すぎ…」

思いつきり脱力してしまう。

竜帝はげらげら笑ってるし…手伝えよ。

「う…ごめんなさい」

「何にせよ、怪我なくて良かったよ」

タバサの風竜がきたし、あとは任せよう。

しかし、ゴーレムどうやってやつつけようか？

すると、竜帝が目の前に降りてきた。

「小娘の言葉と貴様の脱力ぶりが気に入った。特別に我が木偶の坊をやってやろう」

脱力に着目すんな。つか、聞き違いじゃないよな？

「…貴様も対象に入れてやろうか」

「イエ、結構デス」

そのマナの集まりようはあれだろ、神獣の一撃クラスだろ。
そんなもん生身で食らいたくねえよ！

竜帝の周囲に集まった膨大なマナが凝縮される。

「コールドブレイズ」

ゴーレムが、凍りつき砕け散った。
破片から漏れる冷気が肌を突き刺す。

その場の全員が息を飲んでいた。

…が、これも本来のものより威力が低い…いや、範囲を凝縮したのか？

少なくとも雪だるまにはなっていないし。

「皆さんご無事ですか！？」

「ミス・ロングビル！ フーケはどうでしたか？」

「申し訳ありませんわ。流石名高い盗賊、逃げられてしまいました」

「そう…ですか」

あ、ルイズ嬢また落ち込んだる。

元気づけようとしてか、サイトが明るく告げた。

「破壊の杖は取り戻したんだ！ 大手柄じゃないか！ …こんなもんがこんなところにあるのが謎だけど」

何かぼそっと聞こえたぞ。

かくして、盗賊事件の幕は下りたのだった。

破壊の杖を取り返せ！（後書き）

竜帝はきまぐれ。

まさかのフーケ未捕獲。まあ彼女もエルフが近くにいた時点で微妙に諦めてただろうけど。

精霊魔法＞＞越えられない壁＞＞系統魔法なのかな。

原作読んだの数ヶ月前だから忘れてしまった…。

コールドブレイズ…

水の神獣の必殺技。食らった相手を雪だるまにする。

雪だるまかわいいよ雪だるま。

すぐ直るのでついつい放置が多かった記憶が…。

不穏の陰（前書き）

武器防具の種、いいですね。

ただ、ムーンフラワーが六回連続で出たときは泣いた。そんなにいらん！

不穩の陰

破壊の杖を取り戻した翌朝。

昨日はパーティーということでおいしいご飯を食べれたし、気分は最高だ。

そして今、植木鉢の前にいる。年甲斐もなく、ワクワクが止まらない。

倉庫から武器防具の種を取り出し、そつと植えた。

むくむくっ！

そして数秒後、あつというまに花を付け、中心から一つの武器を吐き出した！

「おっしゃあああ！」

大成功！

知識はあってもきちんと作れなきゃ意味ないもんなー。

早速創られた武器を手取る。

「おお、流石に軽い」

武器防具の種で創られた武具は、使い勝手がいいんだよな。肝心の種は凶悪なモンスターが持つてゐるから普通は滅多に手に入らないけど。

「何を騒いでいるかと思えば…それはベルティナモールか。武器防具の種を使ったな？」

「だって武器必要じゃん。ハリセンは武器じゃないし」

俺の主武装はフレイルなのだ。

剣なんて素人に毛が生えたぐらいしか使えないし。

それにささやかに楽しんで良いじゃん！

「思い出すな…貴様の妹はジャツジメンテスで我の鼻面を殴ってきたことを。」

む、腹が立ってきた。おいイオ、殴らせろ」

「理不尽だ!？」

ごふぁ！

割と本気で殴りやがったな…頭痛ー…。

「ヒールライト」

優しい光が傷を癒す。

ん、流石俺、もう大丈夫だ。

頭殴るなよ全く。

「…うるさいなあ、何の騒ぎだよ」

テントからもぞもぞとサイトが出てきた。

「おはようサイト、今日も遅いな」

「お前らが早いだけだろ…ふぁ」

まあ、生活習慣だからな。

それより昨日は良かったな、ルイズ嬢と踊れて。

「でも、最初に誘われたのはイオだろ？ 良かったのか断って」

「サイト、良いことを教えよう。：俺はダンスすると、怒られるんだ」

「はあ？」

「いや：きちんとステップ踏んでるはずなのに足を踏んじったりなんてザラで。

妹と弟に特訓して貰ったけど直る見込み一切なし。

妹になんかもう踊るな！と叱られたな：」

酷いゼシャル：兄ちゃんはちゃんと特訓してたのに。

ヒースも苦笑してたし。

「：苦労してたんだな。つか、兄弟いたんだ」

「可愛い弟妹だ」

ヒースに身長抜かれたときは号泣したが。

ちなみに、俺はサイトよりちょこつと背が低いぐらいだ。ちょこつとだからな。

「…ぷっ」

「…笑うなつか心読むな」

＊

あれから数日後。

今日も今日とて暇だ。

基本、使い魔は主人と一緒に行動するのが常だが、その辺はサイトに任せっ放しな俺らである。

竜帝はふらりとどっかへ行くし、俺も探検と称して空の旅を楽しむことがある。

主教に教わった飛行術がここで役に立つとは思わなんだ。

主教は使いすぎだけど。

ん、主教の名前？ ノーコメントで。言ったらどんな呪いがくるかわかったもんじゃない。

ふわふわ浮いていたら、何か派手な馬車が遠くに見えた。

結構な上空で見てるから距離感が掴めないけど、数時間後に学院にやってくるっぽい？

…あれ、俺やばくね？

学院では付け耳だとかエルフラしくないエルフだとか散々言われているけど、一応なじんでる。

だが外となると…最悪、その場で戦争になりかねないかも？

大慌てで学院へ戻る。

そしたら、なんか変な風にめかし込んでるコルベール先生に出会った。

「やあやあイオ君！」

「コルベール先生、おめかししてるけどどうしたんですか？」

「ああ、急にとある尊き方々がやってくることになってね。

ああそうだ、君は出来れば隠れてもらえないかい？ 学院ではもうそれほどではないけど、エルフはあまり印象よくないからね」

尊き方…。王族かなんかか？

どちらにせよ見つければ面倒事は避けられない。

コルベール先生にしっかり頷く。

さて、どこに隠れよう？

「と言うわけで助けてシルフィ！」

「きゅい！？」

結局、戻ってタバサの風竜、シルフィードのところへ隠れることにした。

…驚かせちゃったかな？

「きゅいきゅい！」

「いだっ！？ ごめん、悪かった、怒らんで！」

べしべししっぱで叩かれた。

出ていけってことっぽいが…きゅいきゅいじゃわからん。
それにしても…。

「シルフィって可愛いな」

いやはや、ドラゴンなのにすごい可愛い。

元の世界のドラゴンには良い思い出があんまりないが、この世界のドラゴン…つかシルフィは好きだ。

つぶらな瞳！ 青い鱗！ 立派な翼！

どこぞの竜帝とは比べものにならん位可愛い。

まああれはどちらかというと格好良い、恐ろしいが先に来るし。…
そういうえば最近本性見てないな？

シルフィの背にもたれて、空を見上げる。諦めたのか、もう抵抗はない。

「……真っ正面から可愛いなんて、照れるのね」

ん？ 誰か喋った？

きよろきよろと見回すが、気のせいかな。

それにしても…眠くなってきた。

「きゅい？」

「ごめん、ちょっと寝かせてー」

かくんと、意識が沈んでいくのを感じて、俺は眠りについた。
何故か懐かしさを感じて。

：目が覚めた後、再び面倒事になるとは思わずに。

不穏の陰（後書き）

シルフィ好きすぎる。

さて、どうしてイオは懐かしさを感じたのでしょうか。

ベルティナモール

武器防具の種で手に入るフレイル…と言っているのか不明なぐらい攻撃力の高いフレイル。

一応手に入る中では最弱なのだが、普通の武器とは比べ物にならないほど性能がいい。

ジャツジメンテス…

プリーストが装備できるフレイル。一応メルティナモールよりは威力が高い。

※これらの装備はあくまでモンスター対応で、人に向ける装備ではない。

イオのクラスが謎すぎる…。

設定しといてあれですが、元クレリックレベルじゃないぞ貴様。

拉致られて白の国（前書き）

まさかすぎる人物が登場。

拉致られて白の国

突然ですが、拉致られました。竜帝に。

シルフィの体が思ったより寝やすくてついつい爆睡してたら、叩き起こされ行くぞの一言。どう思う？

置き手紙するまもなく、あっと言う間にテレポート。

そしてついたのはどこかの城とおぼしき場所。

…どういう状況だ？

「リュウテイ殿、お待ちしております！ 皇子達がお待ちです」

やってきた文官らしき人にさらに混乱。

えっとつまりな。

「状況を説明しろおお!!」

かくかくじかじかで文官さんが話してくれた事によると、ここはアルビオンらしい。

空に浮かぶ白の国で、さらに言うの大絶賛戦争中の国だ。

で、何故俺が呼ばれたのかは知らないらしい、と玉座へ向かうまでに教えて貰った。

今いるのは玉座への扉の前だ。

白く美しく、荘厳な扉を竜帝は遠慮なく開いた。

「連れてきてやったぞウェールズ」

「ああ、ありがとうリュウテイ殿。しかし彼は…本当にエルフじゃないか？」

そう言って現れたのは金髪の整った顔立ちの、いかにも王子様といった風貌の青年だった。

当然だが警戒されている。

「…どうも、昼寝してたら拉致られましたハーフエルフのイオです」

「ハーフっ!？」

何か水をふっかけたような騒ぎになった。

ルイズ嬢の反応もこんな感じだったな、懐かしい。

「静粛に! 王の前ぞ!」

宰相らしき人の一声で玉座の間は静まり返った。

ただ、睨みつけるような視線じゃないが、何か粘っこい視線がくるのはちよつと…。

居たたまれなくなって竜帝に視線を向ける。

「竜帝、いきなり拉致って何の用だよ本当に」

「すみません、イオ先生。俺が無理を言ったんだ」

っ！？ この声！

慌てて声のしたほうへ振り返ると、真っ赤なマントが目に入った。
紅蓮の炎のような赤色。

それを身に付けてるのは――。

「紅蓮の魔導師！？」

「久しぶりですイオ先生」

かつてアルテナ最強と謳われた紅蓮の魔導師その人だった。

だが彼はデュランとの決着をつけて自爆して死亡した筈だ。どうしてこんなところに……まさか！

「紅蓮さんも光の帯を通ってきたのか？」

「いえ、何もない空間を漂っていたら引っ張られて……ここにいるウエルズ皇太子達に救われました」

そういつて紅蓮さんはぼつが悪そうに俯いた。

「……あの日は本当にすみませんでした」

「あの日？ ……ああ」

食われた日か。とは口に出さなかった。

「そりゃあ何で俺が、とは思ったけど気にしてないよ。気にする暇もなかったし」

主に隣にいるドラゴンのせいで。

まあ結果的に生き返れたし、何より紅蓮さんが元に戻っていて嬉しいな。

最後に見たのは人形みたいな無表情だったし。

「それで、ここに呼んだ理由は何？ 確かこの国は戦争中だったと思うんだが」

「そうだ、戦争だ」

心底楽しそうに竜帝が言った。

…まさか。

「戦争に参加させる気か？」

「いや、紅蓮の魔導師を見つけたので会わせてやろうと思ったただだ」

「竜帝様が城に乗り込んできたときは何事かと思いましたが…」

がくっ！

いや、戦争に参加しろじゃなくて良かったけど！

つーか何してるんだ竜帝ええ！

「じゃあ何で俺を呼ぶのにこんなに仰々しいんだよ…」

「紅蓮の魔導師殿には世話になりっぱなしでね。私も王も魔導師殿

の師となるとご無礼できないんだよ」

「…紅蓮さんこの国で何したのさ。つか俺は師匠じゃない」

「取り合えずマシンゴーレムを試作したり、反乱軍を蹴散らしたりなどを」

そう言えば紅蓮さんフォルセナ城陥落寸前にしたんだっけ…。

どこか遠い目をして紅蓮さんの話を聞く。

周囲の方々も口々に言う。

「あのゴーレムはすごい！ たかがゴーレムと侮っていた反乱軍をあつと言う間に蹴散らしましてな！」

「魔導師殿も我々が見たこともない魔法で反乱軍を一掃したり、大活躍でした！」

べた褒めである。

…紅蓮さん、ちょっと戦争終わったらじっくり話し合おうか。

「もうひと頑張りすれば反乱軍を鎮圧出来る、と言ったところで竜帝様に再会しまして。」

イオ先生も一緒にいるということで、つい竜帝様に頼んでしまいました」

「…もう何も言わんよ」

頭が痛い…。紅蓮さんってこんな性格だったか？

テレポート使って帰ろうかと思うと、にっこり良い笑顔の皇太子が

そこにいた。

「是非ともおもてなしをしたいんだ。泊まっていくと良い」

「…あの、俺ハーフエルフなんですよ？ 半分は貴方達の嫌いなエルフ」

「紅蓮の魔導師殿の師匠なんだ。悪い人であるわけがないよ」

だから師匠じゃないんです。

ちよっと精霊を訪ねて力の使い方を教えてあげただけなんですけど！

「それに、貴公の話はかねがね聞いている。ああ、勿論魔導師殿からね。それに」

異世界の者だと言うこともばっちりね、と囁かれた。…紅蓮さんどこまで話してるのさ。

結局異世界の王族に対する拒否権はなく、なし崩しに王城に泊まることになってしまった。

帰ったら怒られるよな…はあ。

翌朝。

いつも通りほぼ日の出に起きた俺はいつも通りお祈りをする。

女神様、今日こそは帰れますように。

ルイズ嬢達のお怒りが怖い。

やること特にないし散歩でもするか？

と、考えていたらいきなり竜帝がやってきた。テレポートすんな心

臓に悪い！

「ふっふっふ。散歩と称して外へ行く気だろうか？」

バレてーら…。しかし、早起き珍しいな。

「ん？ 少々熱が入ってな、敵の飛行船を落としていたら朝になってただけだ。」

戦争満喫してやがる。

敵さんご愁傷様ー…冥福を祈るところ。

って、おかしくないか？

「時間掛かりすぎじゃん。本来の姿ならそれこそ一瞬で終わるんじゃない」

「…言ってなかったな。何故か戻れんのだ」

え？

「嘘だろ。竜帝サマがドラゴンに戻れないなんて」

「笑えない冗談だが、事実だ。…今は力が制限されている」

このルーンのせいかな？と竜帝はつぶやいていたが俺にはそんな兆候全くない。

マナだって最高に満ちてるし、むしろ死ぬ前よりも調子がいいぐらいだ。

けれど竜帝の体には制限が掛かってる…謎だ。

朝食に呼ばれるまで竜帝の体を診たが特に異常はなかった。
どうということなんだろう？

拉致られて白の国（後書き）

というわけで紅蓮さん（本名不詳）登場。これでパーティ組めますね！

紅蓮さんも性格捏造。敬意を払うのは恩人と上司と師匠のみで、基本はゲームの高慢ちきではありますが。

紅蓮さんのステータスもほぼボス戦と同じ。

よく考えたら：こいつら近接担当いねええええ！

マシンゴーレム…

アルテナが誇る魔導兵器。紅蓮さんは知識だけ持ってて自分では作れないという設定。

土メイジが部品を組み上げ何とか旧スペック（HOMぐらい）レベルまで汲み上げた。

操縦者いらず、単体でかなりの広範囲を攻撃できる上頑丈。

因みに紅蓮さんは単体で攻城戦ができる（主人公がデュランの場合参照）

紅蓮さんは大砲、竜帝はただのラスボス、イオはバランス兼回復役というパーティ。あれ一名おかしい。

紅蓮さんがあそこまで信頼されている経緯はまた次回。

追記しました。

紅蓮の道程（前書き）

今回は紅蓮さんの昔話。タイトル変えました。

紅蓮の道程

私は夢を見ているのだろうか。

かつて圧倒したはずの傭兵は、私が師と仰ぐ人を打倒してきた。そして、今私さえも圧倒している。

その事実になかならず動揺している私がいた。

どうして負ける！？

師を生け贄にした日に私は絶対の力を手に入れたのだ！
女王にも、王女にも負けない圧倒的な力を！

（――これで私達、もう馬鹿にされないわね！）

王女の声が脳裏に甦る。

…いつした話だったかな。もう一年は前の話か。

ずっと懂れていた魔法の力を、精霊の補助で発現できた日だったか。

王女の身に宿る力は莫大で、私はちっぽけな存在だったのを思い知らされたな。

竜帝様の誘いに迷わず乗ったのはそのせいだったと思う。

…ああ、もう記憶はこんなにも曖昧か。

蘇った師と違い生身の私は回復手段さえ持たない。

回復はできない。だがあの傭兵はとどめを刺そうともしない。

いっそ恐ろしいほどのまっすぐな目で私を見つめていただけた。

勝者の情けか。だがそんなものはいらない。

戦えないのなら、私にもう価値はない。

小さく、小さく呪文を唱える。あの傭兵が気づいた瞬間、呪文が発動し私の体は爆炎に包まれる。

——ざまあみろ。貴様などに情は貰わん。

そう思ったのが最後、私の意識は完全に途切れた。

それから幾時が過ぎたのだろう。

何も感じなかった意識が突然戻ってきた。

どこを見ても何もない空間で、ただひたすら漂っていたらしい。

らしいというのは、戻ってきたとはいえ未だに意識があやふやだからだ。

主とあの傭兵達はどうなったのだろう。

ただ判っているのはこの空間に終わりが無いことぐらいだ。

私はこのままここを漂い続けるのだろうか。

師匠もここに居るのだろうか。

ぼんやりと考えていると、急に何かに引っ張られた。

何だ、と考える暇もなく引きずりこまれ、地面にたたきつけられる！

「ぐあっ！」

相当の高さから叩きつけられたようだ。

痛い——と考えて違和感を覚えた。

私は死んだはずだ。肉体の感覚があるはずがない。

だが現実として叩きつけられた身体は痛みを訴えている。

回復魔法を、と考えたが自分には使えなかったのを思い出した。身内で使えるのは師ぐらいだか、都合よく居るはずもなく。

（こんな訳の分からない状況でまた死ぬのか！？）

死んでたまるか、と歯を食いしばったとき。

「——大丈夫か？」

救いの手は、現れた。

アルビオン王国皇太子、ウェールズ殿下とその配下だった。

彼らは親切にも傷つき倒れていた私を手当すると、王城へ連れて行った。

そこで交わした会話で、私は異世界に来たことを認識させられた。

レコン・キスタとやらの兵だと思われていたことも判ったのだが――それは割愛しておく。

異世界など来たことがないからどうすればいいのか判らなかったが、幸いこの世界も魔法があった。

とにかく身分の保障を求め、魔法の実力を認めさせ、さらにマシンゴーレムの設計図も起こした。

内乱中だというこの国で、信頼を得るため一兵卒として戦争にも加わった。

竜帝様に賜ったこの力は異世界に來ても衰えはなく、ただの人間なご塵のように吹き飛ばした。

：神官だった師匠が見れば怒られるだろうが、生きるためだ、後悔などない。

最初は疑念しか向けられなかった目も、少しずつ信頼と畏怖を交えるようになった。

毎日が充実していたと自信を持っていえる。

気がつけばウェールズ皇太子とは、異世界出身であるということをも明かす仲にまでなっていた。

最初は王家に身分を保障して貰うだけのつもりだったのにな。

そして内乱はほとんど鎮圧し、あとは仕上げばかりになった。

そんな折だった。

「――む、紅蓮の魔導師か？」

「竜帝様!？」

ニューカッスル城へ現れた不遜の輩。

それを退治するために赴いたとき、そこにいたのは我が主竜帝様だった。

主は退屈しのぎにやってきたと言った。

遙か遠いトリステインには師匠もいるらしい。

なんという巡り合わせか。

初めて女神に感謝したかもしれない。

主は本当に退屈しのぎでやってきたらしく、私がこの城を守っていることを伝えると、つまらなそうに攻撃をやめてくれた。

代わりに内乱中であり、アルビオンの周りには敵しかいないことを伝えると、主は愉しげに協力してくれると仰られた。

そして国王達に主の紹介を済ませ、数日が過ぎた頃。

主は急に師匠を連れてきた。

私が以前こぼしたことを覚えていて下さったらしい。

数ヶ月ぶりに出会った師匠は生前のままだった。彼も甦ったらしい。

「お久しぶりです、先生」

師匠は『師匠』と呼ばれるのを非常にいやがっていたのを覚えてい

たので、妥協する。

師を怒らせれば怪しげな薬の実験台にされかねないからな。

久しぶりに会った師匠は、あの一年間のことを微妙にしか覚えてないらしかった。

師匠が主に甦らされた直後の苦い記憶を掘り返されずに済みそうだな良かった。

：今だから思うが、あのとときの自分は本当に調子に乗っていたしな。師匠に徹底的に叩きのめされていなければ、あの忌々しい勇者共に瞬殺されていたぐらいに傲慢だった。本当に良い師匠を持った。

ただ、幾ら自分が力を得るためとはいえ、師匠を生け贄にしたことは後悔していた。

以前、そのことを謝る機会は全くなく（師が自我を取り戻した直後ウエンデルへ行ってしまったこともあって）それだけが棘のように突き刺さっていた。

だが、それも今日で晴れた。

師匠たちは王子の勧めで泊まることになったし、話をたくさんしたい。

：どこことなくいやな予感もするが、ささやかながら宴の準備もしてもらおう。

そう言えば師匠は下戸だったような。

ジュースもあればいいが。

紅蓮の道程（後書き）

紅蓮さんがここに來た経緯を大ざっぱに綴ってみました。
相変わらずの性格捏造。

紅蓮さんのやったこと..

- ・マシンゴーレムの設計図を描く
- ・戦場でレコン・キスタを叩きのめす
- ・ウエールズ皇太子の恋の悩みを聞くe t c.

因みに、紅蓮さんとイオががちでやり合うとイオが圧勝します。
回復・補助魔法というアドバンテージは偉大。

本領発揮！（前書き）

今回さらっと残酷かも。

本領発揮！

イオだ！

朝食を食べた後も竜帝の身体を診たけど、原因不明すぎる。一応あらゆる呪術修めてるんだけど、どうしようもない。

紅蓮さんはすでに知ってたらしい。

この手の専門家の俺に何故聞かなかったと突っ込みを入れたいが、紅蓮さんは竜帝至上主義なのでどうせ聞いてくれないだろう。昨日の説教だけじゃ足らなかったか…。

紅蓮さんにどうやって説教をしようかと考えてると、ウェールズ皇太子に声をかけられた。

「イオ殿、少し頼みがある。貴公は優秀な治癒術士ときいてる。此度の戦争で傷ついた者を手当てしてやってくれないか？」

「ん？ ああ、いいですよ」

忘れるところだったが戦時中だったな。

しかし王族が使い走りってどうなんだろう？

皇太子に案内され、救護室っぽい部屋へ辿り着く。予想していたより怪我人が少ない。

「これだけですか？」

「ああ、紅蓮さんのおかげで随分楽になってね。彼には感謝しても

しきれない」

下手すると王国軍は敗北していたからね、と皇太子は呟いた。
よほど苦しい戦況だったのだろう。

応急手当の上にしっかりした処置をしつつ、皇太子の話を聞く。

今日の戦いで決着が付くかもしれないらしい。

昼頃出陣で、皇太子は緊張を解すために俺をここに案内したらしかった。

ヒールライトと薬を併用する手当を、皇太子は興味深そうに見ていた。

「私達の魔法で言えば、治癒は水メイジが専門なのだが、そちらは光なのかい？」

「昔はヒールウォーターってのもあったらしいですよ。ただ、今は回復と言えば光が主流ですかね」

「ほう。紅蓮さんは攻撃的な魔法しか使えないようだったけど、他にもあるのかい？」

ありますよー。

俺たちの魔法は八属性あって、素質があれば個人の波長にあう属性が使える。

例えば俺は、地水火風とはあまり相性がよくない。

使えるのは精々セイバー魔法ぐらいだが、光と闇に関してはその逆に吸収してしまうぐらい相性がいい。

月と木もまあ相性は良い方だ。この二つは補助的な面が多いけど。

簡単な説明をすると、皇太子はさらに目を輝かせた。

「素質があれば誰でも使えるのか。では私にも使えないかな？」

「どうでしょうね？ 精霊達がいれば教えてくれるんですが…」

八精霊はもういない。マナが消えると同時に消えてしまった。

だから精霊魔法が使えるかなんて——あれ？ おかしくないか？

精霊がないなら何で魔法が使えるんだ？

確かに最終決戦でデュラン達は魔法を使った。だがあれとは状況が違いすぎる。

：恐ろしい考えが過ぎった。『マナ』とは何だ？

身近にあって当然だと思っていたのに、今は酷く得体が知れなく、恐ろしい。

「イオ殿？」

「…っ！ 少し考え事をしていました」

今は深く考えないどころ。

柄にもないが、怖い。

何も考えないように、治療に集中しよう。

その甲斐あったか、負傷者は幾分か戦線に復帰出来るようになったが…心は晴れなかった。

はあ。

こう、頭使うの苦手なんだよな。

なんかこう、すかつとしたいんだけど…そうだ！

「皇太子殿下、お願いがあります」

というわけで、紅蓮さんの護衛をすることになった！

え？ 何がというわけでって…暴れるためだ！ 殺しはしないつもりだけど。

フードを被って意気込んでいると、紅蓮さんが心配そうに見ている。

「大丈夫ですか？」

「大丈夫さ！ それより怪我するなよ、治すの面倒なんだからな」

軽い調子で言っていると、紅蓮さんは誰に言ってるんですか、と毒づいた。

今回の作戦は単純だ。レコン・キスタの頭領が籠城しているどっかの町だったかを、地域住民の安全を確保しつつ取り押さえる。

だが住民は基本退避済みだ。故に暴れることに関しては余り問題が

ない。

突入部隊としてマシンゴーレムを使い、メイジが追い打ちをかけて一気に落とす。これが作戦の全貌だ。

航空戦力は竜帝が根こそぎ刈り取ってるからな、連中は逃げれない。

紅蓮さんはマシンゴーレムの全体指揮だ。

で、俺は万一接近されたときの護衛扱いして貰ってる。万が一もないと思うが。

「マシンゴーレム、突入！」

紅蓮さんのかけ声とともに、今までゆっくりだったマシンゴーレム達が城へ突入する。

それからは一方的な展開だ。

ロケットパンチやら電撃やらが飛び交って、あっと言う間にメイジ達を蹂躪していく。

思わず眉をひそめたが、戦争だ仕方ない。冥福を祈ろう。

ゴーレム達によって軍はあっと言う間に進軍し、実にあっけなく城を包囲した。

…あれ、俺出番なくね？

「行くぞ！ 今こそ我々の手で反逆者どもを討ち取るのだ！」

「「おおーッ!!!!」」

ウェールズ皇太子のかけ声で一氣に突入。本気で俺いらないな!？そのまま制圧かと思われたが、そこで齒車が狂った。

「なっ、マシンゴーレムが!？」

城に突入したマシンゴーレム達が予先を変えたのだ!その凶弾は最前線にいた俺たちに集中する!

「イビルゲートっ!」

とっさに闇を生み出し、攻撃を吸収する。

「どうなってる? まるで魅了でも掛かったみたいだ!」

「その可能性が高いです! マシンゴーレムは設計上、味方に攻撃するのはあり得ません!」

そう言っって紅蓮さんは敵となったマシンゴーレムを焼き払う。後ろの軍はシールドを張って堪えてるが、いつまで持つか怪しい。しょうがない!

紅蓮さんも同じことを考えたようだった。

「エインシャントで一掃するか」

「ですね。ゴーレムは作り直せばいい!」

ちよいと気が引けるが、エインシャントを同時詠唱する。

一重二重と重なる詠唱を止めようとマシンゴーレム達がやってくるが、残ったゴーレム達で時間稼ぎをする。

だが俺たちの高速詠唱を邪魔するには程遠いっ！
呪文が完成する！

「『星よ来たりて敵を討て！ エインシャント！！』」

古代語呪文のエインシャントは、相乗効果を持ってして、凶悪と言っている威力でゴーレム達を葬り去る！

…対象をゴーレム達に絞ってなきゃこの辺一帯が更地になってたな。

とにかく、ゴーレムの脅威は去った！

けど、マシンゴーレムに黙祷。オーバーキルすぎたな、跡形もないし。

城内制圧はスリープフラワーにしよう、うん。

しかし、さっきのゴーレムの反乱は一体どういうことなんだろう？

数刻後。

皇太子に進言して、制圧作戦はスリープフラワーを使うことになった。

こっちにもスリープクラウドというのがあったらしいが、使い手が余りいないらしい。

俺の使ったスリープフラワーは風メイジの力を借り、城内へ眠りの

花粉を撒き散らした。

最初から使えって？

アルビオンは風が強いから対象を定めてても味方に被害がくるんだよ！

進軍途中で一人でも寝こけて見ろ、ドミノ倒しだ。王国軍っていうのは妙に綺麗に隊列つくるからなあ。

とりあえず、寝こけてる兵士達を縛りながら進んでいく。

卑怯？ 気にするな！

頭領さんはどこかねえ？

きよろきよると適当な部屋を覗いてみる、

「っ！」

とっさに首を傾げると、風の刃が真横を通った。
寝ていない奴が居たのか！

持っていたベルティナモールをとっさに振るう。

がごんっ！

ちょっと人体の奏でる音じゃないぞ！？

しかしベルティナモールにぶちあたったメイジは一瞬で床に崩れ落ち――立ち上がった！

「なっ！」

ゾンビか何かか!?

しかし今は真っ昼間な上、闇の力など微塵も感じない。ゾンビな訳がない!

しかしゾンビもときはベルティナモールをがつしり掴む。

仕方ないので肘鉄を食らわし、ぶっ飛ばす。

だが活動を止められるほどではないか…。一応試すか。

「ターンアンデッド」

手の平を向け聖なる波動を解き放つ。

アンデッドなら一撃で昇天可能な魔法だが…どうだ?

ゾンビもときはまるで糸が切れたかのように倒れた。一応効くらしい。

体を調べたがやはり死体だった。くそ、冒涇だ。頭領は頭いかれてんのか!

あんなのが他にいたら面倒だ。さっさと頭領見つけてふん縛ろう。

「紅蓮さん! ここ任せたぞ!」

言い逃げして無人の廊下を突き進む!

悲鳴や怒号が聞こえる。他の所もずいぶん苦戦しているらしい。まあ紅蓮さんがいるし、よっぽど大丈夫だろうが。

取りあえずもどきを見かけてはターンアンデッドを繰り返し、昇天させる。

何というか…作業だ。後でちゃんと弔おう。

随分高い階までやってきたと思うが、頭領っぽいのがいないな。逃げたか？

ガシャーン！！

近くでガラスの割れる音がした。

そこか！？

フードを押さえつけながらも必死で走り、扉を蹴り破る！

だがそこには血塗れの男性が一人、倒れていただけだった。

慌て脈を確かめたが――死んでる。酷いな、首を一掻きか。

大方同士討ちか？ 何にせよ胸くそ悪い。

やがてウェールズ皇太子による勝利が宣言され、レコン・キスタは壊滅した。

だが何だろう、この不安は？ いやな予感がするな…。

本領発揮！（後書き）

いろいろと酷いレコン・キスタ打倒編。中ボスの力の片鱗がここに！

対象云々について…

ゲームでよくあるあれです。基本的に狙いはつくけど、周囲の影響が余りに強いと狙いがそれるという設定。

特にスリープフラワーはマップ全体に眠りの花粉によく似た魔力をばらまく魔法と考えており、耐性があるうとなかろうと眠ってしまう設定。

一応対象設定はできますが、三人パーティのような少人数はともかく、軍のような大勢で攻める時の魔法としては不適切かと。

気心のしれた三人パーティの連携ぐらいなければ完全に回避することは不可能。

さらに範囲広げすぎると威力も落ちるので、城みたいな密閉された空間じゃないと効果のほどは期待できない設定もしています。

逆にエインシャントみたいな降下魔法は、あくまで降らせる魔法なので対象設定がしやすい設定です。威力は範囲によって変動、しかし魔力消費を大きくすれば威力そのままに範囲をある程度広げられると捏造。

今回捏造多いな！

スリープフラワー…

木属性の眠りの魔法。眠りの花に非常によく似た魔力を流し、相手を眠らせる。人形だろうと何だろうと関係なく、意志ある者に眠気を誘う。

魔法耐性の強いものなら拒むことができる。

原作ではマシンゴーレムさえ眠らせる魔法ですね。ほんと、お世話になりましたorz

ターンアンデッド..

名の通りアンデッド殲滅魔法。魂を冥界へ送り返す。

高位の神官なら習得できる。

今回さらっと残酷描写がありました、大丈夫でしたか？

しかしアントバリの指輪の効果（死者を蘇らせる）に対してはターンアンデッドよりアンティマジックの方が良かったかな...。
曖昧な判断ですいません。

戦争終了と結婚式!?(前書き)

アルビオンから帰還。

今ならセットで紅蓮さんもついてきます。

戦争終了と結婚式!?

護衛という名目で参加した戦争は、非常に少ない被害で終結した。途中から護衛放棄したけど!

そういえば、血塗れで倒れていた男、どうやらアレが頭領だったらしい。

元ブリミル教の司祭だったという。皇太子は色々愚痴愚痴言ってたが、とりあえず器が小さい男だったのは判った。

でも何で殺されたんだろ?

そんなことをボーっと考えていると、突然耳を掴まれた。そして引っ張られる! って待て! ?

「あだだだ! ?」

「何やら随分悩んでるではないか、イオ」

痛い痛い! 耳とれる!

どうにかして竜帝の手をはがそうとしても、びくともしない。畜生。

「いい加減にしろっ!」

「む」

ベルティナモールを振るうと、流石に竜帝も逃げた。ふう、助かった。

でも痛かったから睨んでやる。

「何してるんですかお二方…」

紅蓮さんも呆れ顔だ。

俺は悪くないぞ、竜帝が悪いんだからな！

じっと睨んでやったが大した効果はなく、竜帝は欠伸しだす始末。
おい、反省しろ。

そこまで考えると、不意に竜帝の手に目がいった。手というか、正確には指先の指輪。あんなのしてたっけ？

「竜帝、その指輪どうしたんだ？」

「その辺の人形から拾った。なかなかの力を秘めていたのにな」

そう言って面白そうに指輪に目を向けた。

…碌な事にならんといいが。

あ、そうだ。

「紅蓮さん、そろそろ俺達帰るよ。向こうに心配かけてるだろうし…」

濃い数日だったなあ。もう何ヶ月か経ったかと思ったよ。

「なら私も行きます」

…ん？

耳が遠くなったかな…。

「本気ですよ？ 重要な案件の時には戻ってきてくれと言う殿下の了承も得てます」

「脅したろ」

「よくお分かりで」

ダメだこいつ、すでに手遅れだ…。

大体どうやって連絡取るきなんだ、テレポートか？

世話になった人々に挨拶をして、エントランスまで見送られる。

「テレポートなんで見送らなくてもいいのに…」

「何、形だけでもという奴さ。また遊びに来てくれ、歓迎する」

そう言って皇太子は爽やかに微笑んだ。

そうですね、いつかかならず。

ペコッと礼をして、テレポートを発動した。

景色が変わった。白い城壁から緑溢れる森の中だ。

近くにはテントがあるし、間違いなくトリステイン魔法学院だ。

懐かしいなあ、そんなに離れてた訳じゃないんだが。

「……イオ？」

お、この声は。

振り向くと予想通り、黒髪の少年——サイトがいた。
でもなんか様子がおかしい。

「…ただいま？」

「イオだああああ!!」

勢いよくぎゅうっと抱きつかれた!

ちょ!?! 俺にそんな趣味はないぞサイト!

ってあああ! 紅蓮さん呪文詠唱始めるな!

エクスプロードって生身の人間に向けるもんじゃないから!

とっさに倉庫から適当に何かを投げつける。

ずごん! とはちみつドリンクのビンが命中して、紅蓮さんは昏倒した。

…死んでないよな?

ぴくぴく動いてるから大丈夫でしょう。…流石に後で治療するか。

「で、どうしたよサイト」

「ルイズが髭といちゃこらしててえ…髭はバカにした目で見てくるし、ひっく、俺なんて俺なんてえ…!」

おっけ、判った。酔ってんなこの野郎。
でも髭ってなんだ?

酔っぱらいほど面倒な者はない。相変わらず抱きつかれたままで鬱陶しいので、スリープフラワーを使う。

当然ながらサイトはあっさりと意識を失った。
しかし…。

「髭ってなんだろうな？」

「知るか」

サイトを地面において、紅蓮さんの治療に取り掛かる。
でっかいたんこぶになってた。：後で謝ろう。

さて、サイトと紅蓮さんをテントに置いて散策しよう。

え、サイト危険？ 紅蓮さんを「沈黙」させたから問題ない！
簡単に言くと、俺達が戻るまで詠唱どころか魔法の発動さえ出来ない呪いをかけてやった。置き手紙はおいといたので大丈夫だろ。

まずはルイズ嬢探さないとな。

「シエスター、ちょっといい？」

「あれ、イオさんじゃないですか。お久しぶりですね、今までどこへ？」

「ちょっとアルビオンへ。それよりさ、サイトが落ち込んでるんだけど何かあった？」

尋ねると、シエスタはちょっと困った感じで周囲を見回した。

「――実は、先日王女殿下が学院を訪れまして」

コルベール先生がめかし込んでた日か。

シエスタの話を聞く限り、別に王女殿下が話の焦点ではないらしい。

魔法衛士隊隊長、ワルド。ルイズの婚約者だとか。

曰く金の髭が眩しい美丈夫だそうだ。髭ってそれか。

「つまりサイトは失恋か？」

「多分…」

シエスタ複雑そうだなあ。

何せこの黒髪の少女はサイトに惚れているのだ。

当の本人はルイズ嬢に自覚なしの恋してるっぽいし…やれやれ。

「人間は面倒だな」

「半分エルフとしては同意するけど、そう言ってやんな。人間ってのは面倒くさい生き物なんだよ」

俺みたいな半端者が何を言うかって話だけど、人間はそんなもんだ。

「大体判った。じゃあルイズ嬢知らない？」

「ミス・ヴァリエールなら多分応接室です。ミスタ・ワルドとお話があるようでしたから」

へ？

つまり、ワルドさんまだいるの？

「何でも、婚約について話があるって暇を貰ったらいいですけど」

あの人嫌いです、とシエスタは小さく呟いた。

シエスタが嫌うってことはよっぽどなんだろうな…一応警戒しとくか。

「仕事中に悪かったな」

「いえいえ、私も少しすっきりしました」

じゃ、とシエスタと別れる。

しかし弱ったなあ。ルイズ嬢とはまだ話せないだろうし、サイトとうしよう？

「つくづく人間は謎だな。欲しい物があれば力尽くで奪い取ればいいものを」

「力尽くで手に入れないものだってあるんだよ」

そう言うのと竜帝は度し難い、と眉を顰めた。

「いつか理解出来るんじゃないか？ 今のお前なら」

クオン大陸の大邪竜ではなくただの竜帝なら。

…ただの竜帝ってなんかおかしいな。今度真名あるか聞いてみよう。

「理解できる日など来なくても困らん」

「素直じゃないな！」

そう言って笑ったらぽかっと殴られた。
ホントに素直じゃない。

笑いをこらえながらテントへ戻ると、すごく不機嫌な紅蓮さんと、
突っ伏してるサイトがいた。
…どういう状況？

取り合えず紅蓮さんの呪いを解いて話を聞く。

「何があった？」

「…ピンク髪の少女が来て、自分が結婚する事を伝えられたらしい
なり崩れ落ちただけです」

…とどめ刺されたか。

って結婚!？

戦争終了と結婚式！？（後書き）

まさかの結婚フラグが残っていた。

ここのルイズ達はアルビオンへ行ってません。何故ならアルビオンの勝利はほぼ確実で、わざわざ手紙を取りに行く方が危険なので。ですがサイトはワルドにぼこられたあとだったり。

因みに、このあと紅蓮さんは上司達のテント暮らしを知り、呆然とします。

流石に男四人でテント暮らしは如何なものかと考えたイオが予備のテントを出したりもします。でも結局テント。

テント暮らしなんてしたことないだろう紅蓮さんは大丈夫だろうか。

ラグドリアン湖の精霊（前書き）

タイトルの通りです。

ラグドリアン湖の精霊

落ち着け俺。こういう時は素数を数えるんだ…って現実逃避してる場合じゃねえええ！

数日アルビオンにいったらご主人様が結婚。こういう展開だホントに！

「…先生、大丈夫ですか？」

「無理」

サイトじゃないけど凹みたいよ…。

あれだ、妹が嫁に行く気分？ 笑えねえ。

シャルが嫁行くときもこんな感じなのかもな…。……。

認めるかああああ！！

「…竜帝様、また洗脳か何かを？」

「しとらんぞ紅蓮の魔導師。あれは素だ」

外野が何か言ってるけどスルー！
未だ嘗てなく腸が煮えくり返る…！ ヒースが相手だろうと認めないからなシャルー！

…って落ち着け。今の問題はシャルじゃなくてルイズ嬢だ。

まずは問題の把握だ。話はそれからだ。

「というわけで教えてデルフ！」

「おう？ 帰ってたのかエルフの兄ちゃん」

凹みまくってるサイトからデルフリンガーを拝借。
本人まだ凹んでるしいいよな。

「ああ、あの娘っ子の事かあ。意地だよ意地」

「意地い？」

「そ。婚約者にプロポーズされて、相棒が嫉妬してたのにも関わらず突っぱねちゃってなあ。

あの気の強さだろ？ 謝れずにまた突っぱねてプロポーズを受け
ちまったんだ」

「…成る程」

結婚って人生の一大事だろ、そう簡単に決めちゃっていいんかねえ？
しかし呆れた。

ルイズ嬢もだが、そこなヘタレもどうして想い合ってることに気づかないかな。

「ん、ありがとうデルフ。あとで磨いてやるよ」

「ありがてえ。相棒は手入れド下手どころか、やってくれすらしね

えからな」

デルフを丁寧な鞆へ戻して背負う。サイト丸まってるし。さて、当面の問題はサイトか。

だって人様の結婚式なんてそう簡単にぶち壊せるもんじゃないし。いや、普通は壊さないもんだけど。

「何だ、壊さんのか」

「だから心読むなよ、つか残念そうにしてるんじゃない」

「…あの、話が見えないんですが」

あー、紅蓮さんは知らないもんな。
竜帝説明よろしく。俺はサイトにお説教してくるから。
面倒な訳じゃないぞ！

「む、待てイオ！」

「待たない！」

サイトの襟首掴んで適当にテレポート！

一瞬で景色が森から湖へ切り替わる…っておい！？

「適当にしすぎた！？」

やっちゃったああああ！

浮遊術を使う前に湖にどぼん！と落ちる俺たち。

「な、なんだあ!？」

サイトも正氣に戻ったみたいだけどそれどころじゃない!

俺泳げないんだよ!

情けないとか言うな!

ウエンデルは内陸、ミラージュパレスは論外、どこで練習しろと!

つか…やばい、デルフ背負ってるせいかもしれんが、だんだん沈んでく…。

「イオ、しっかりしろ!」

サイトの声が遠い。

苦しい…!

もうだめか…短い蘇りの日々だったな…。

『イオはん!』

ぐいっと身体が引っ張られた。

不思議なことに先ほどまでの苦しさが無い。

『しっかりしてえな!』

「イオ！」

「…サイト？ それに、もう一人…」

『うちやうち！』

ぱしゃん、と水が弾け、チカラが集まる。

チカラは青い泡をなし、小さな人魚の姿を形作った。

「ウンディーネ…！？」

「正解や！ 今はうちのチカラで二人を押しとるさかいな、陸までもう少しやで！」

何で、どうして。

あまりに唐突な展開についていけない。

水の流れに乘せられて、無事に陸にたどり着くと、ウンディーネは人好きのする笑顔で笑った。

「助かってよかったわ」

「ありがとう、助かったぜ。…でもお前何なんだ？」

「うちは水の精霊や！」

そう言ってウンディーネはふふん、と小さな胸を張った。

…あー、悪かった、悪かったからその三叉の槍引っ込めてください。

「でも何でウンディーネがここにいるんだ？ …まさか八精霊全員

いるんじゃ」

「うちにも判らん。気がついたらここにいたんよ。他のみんなの居場所もわからへんし…」

「…あー、知り合い？」

「「うん」」

サイトの問いに迷うことなく頷く。

「けど、なんでラグドリアン湖のど真ん中に落ちてきたん？」

「あはは、適当にテレポートしたら失敗しちゃって…」

いやあ懐かしいこの感じ。つかここラグドリアン湖っていうのか。

…って和んでる場合じゃない！ ルイズ嬢の結婚問題、どうしょ…。

表情に出てしまったのだろう。ウンディーネが心配そうにのぞき込んできた。

「お困りかいな？」

「…まあ、困り事っちゃあ困り事なんだけど」

そうだ、ウンディーネに相談してみよう。

かくかくしかじかでこういうことなんだけど…。

「…取り合えずそっちのあんさんがヘタレなのは理解したわ」

「ぐふお!？」

ウンディーネの鋭い突っ込み!

サイトの急所にあたった! 効果は抜群だ!

…む、また電波が。

とにかく硝子のハートを再び粉碎されたサイトはうずくまった。

「大体な、決闘に負けていじけるっちゅうのがすでにあかん!

男だったらもつとしゃつきりせんかい! そこは浚ってでも引き止めるところやろお!

女の子はな、繊細なんや!」

サラマンダーと一緒に戦争ごっこした彼女は繊細といえるのだろうか。

「イオはんすぐく失礼なこと考えてへん?」

「考えてへん考えてへん」

あ、移っちゃった。

ともかく、ウンディーネの説教はまだまだ続いた。

…つか、途中からサラマンダーとの惚気な件について。幸せそうだからいいけど。

サイトなんか魂抜けかけてるし。

まあ、慣れてなきゃ辛いよな。

説教は一時間に及び、サイトはすっかり屍と化していた。

「結論！　好きな人へは？」

「本気で体当たりすること…です…」

「はいよろしい！」

説教は終了したようだ。

あんまり暇だったからデルフの手入れしてたよ。

「水に落としておいてよく言うぜ」

「不可抗力だから許して？」

「いんや、許さねー。きちんと錆びとりまでしてもらわにゃな？」

こ、こいつ…！　錆びとりは大変なんだぞ！

頭に來たので湿気た鞆に押し込んでやる。流石に日向にはおいとくが。

「へくしっ！」

寒っ！　倉庫に入れた服に着替えたはいいけど、頭が濡れっぱなしは寒すぎる。

サイトも同様みたいだ。…ちよっぴりつんつるてんだしよけいに寒そうだ。

「まあ、何はともあれありがたいがとうなウンディーネ。これでやることは決まった」

「ええよ、うちも昔みたいに話せて嬉しかったし。また遊びに来てや！」

うん、今度は紅蓮さんと一緒に来るよ。

あいつも何だかんだいつてウンディーネには感謝してると思うし。

…あれ、何か大事なことを忘れてるような？

そんな疑問を抱きつつ、戻るためにテレポートを発動した。

ラグドリアン湖の精霊（後書き）

ウンディーネ登場。またすぐにでる予定。

浮遊術…

聖剣HOMの幻夢の主教が使ってるあれ。

どうでもいいんですが、カリスマで飛行ユニットの上範囲攻撃持ちって一体…。

ロジェ（弟兼主人公）は聖剣装備でも跳躍ユニットなのに。

本家の水の精霊様は基本は不干渉の模様なので出てきてません。ただ、ウンディーネが呼べば出てくるかも？

素人 i n 火竜山脈（前書き）

というわけで特訓編。

何でかというとは本編参照。

素人 i n 火竜山脈

というわけで戻ってきたよ！

しかしもう少し遅く戻ればよかった…とても眩しい笑顔があるんですが。

「よく帰ったなイオ。少し話さんか？ 殺し合いで」

訳…よくも面倒事を押しつけてくれたな。

あーあー、死ぬかも？

だが対策は練っている！

「竜帝、それより楽しいことしようぜ」

「ほう？ 貴様をいたぶる意外に何かあるのか？」

耳貸せ耳。

かくかくしかじかでこういうことだけど…。

俺の提案を聞いて、竜帝は楽しそうに口元をつり上げた。

「成る程、貴様にしては面白い考えだ」

「だろう？ ほら、紅蓮さんもおいでおいで」

「…すっごく悪い笑みですよ先生」

紅蓮さんも人のこと言えない笑顔じゃないか。察しがよくて先生嬉

しいぜ。

サイトが訳判らんって顔してるけど、そんな顔できるのは今のうちだからな？

覚悟しろよ？

（悪寒がっ！？）

む、殺気でも漏れたか？
いや、勘がいいのか。サイトがガタガタ震えてる。

「なあサイト」

「っ、何だよイオ？」

「お前ルイズ嬢に結婚して欲しくないんだよなあ？」

にんまり神父スマイルで笑うと、サイトは面白いぐらい慌てだした。

「違っ！？ ……うー…あー…違わ、ない」

素直でよろしい。

ウンディーネに会えて本当によかった。

「それに、ワールドに勝ちたい？」

「勝ちたい！」

今度はすごい勢いで頷いた。

そんなに悔しかったのか。まあ都合がいいんだが。

「じゃあ特訓しようか」

「…え？」

＊

暖かな地熱、広大な密林に、どっしりとした存在感を出す山々。

火竜山脈へやって参りました！

うん、辺りから色々とヤバそうな気配がするな！

「ちょっと待て！？　ここRPGでいえば上級者がくるような所だろ
雰囲気てきに！」

「心配するな、別に戦えって訳じゃない。

生き残れ！」

「変わんねえ！」

変わるぞ？

今のサイトには基礎能力が足りていない。魔法衛士隊の隊長という
ワルドには全く歯が立たないだろう。

そこで、一步間違えば危険しかないこの火竜山脈でサバイバル！
生きて帰れば危険察知能力と身体能力が上がるぞ！

つまりさっきの提案は、サイトに手っ取り早く度胸をつけさせよう
ってことなのだ。

：そーいやこーって外国だよな？ 不法侵入：って今更か。

まあ、テレポートで真っ直ぐきたから不法侵入で捕まることはない
だろう。ここどう見ても人外魔境だし。

あ、今回はちゃんとルイズ嬢に言ってきたよ、二週間ほどサイト借り
るって。

その後爆破されかけたけど。

：想い合ってるよなああの反応は。

気合いを入れねば申し訳がない。一応代わり置いといたけど。
横っちょで竜帝が懐かしそうに目を細めた。

「ドラゴンズホールを思い出すな」

「そうですね：あ、ドラゴン飛んできますよ」

「帰らせてくれ!？」

「バカたれ、帰ったら来た意味がないだろ。

えー、では今日から二週間、サイトいぢ：サイト強化週間にしたい
と思います」

うっかり本音が。

サイトが思いつきり青ざめたけどまあスルー。

「サイトにはここで、1日素振り千回、食料調達などをしつつ、できればドラゴンからも逃げきれ体力をつけて貰いたい」

「無茶言うなよ！ そんな短時間で体力が付く訳ないだろ？ きつと筋肉痛だって酷いぞ」

実は無理じゃないんだな。

ヒールライトってさ、筋肉痛にも効いたりするんだよね。限度はあるが。

それを教えるとサイトは小さく悲鳴を上げた。

「あ、命の保証はあるからな？ とにかく荒っぽくても基礎をつけないといけないからな」

サイトがこれからやることには体力と度胸が必要だからな。

技術を教えるのはその後。教えるのは俺ではないけど。

因みに俺は救護係。

紅蓮さんと竜帝にはサイトの命の保証はして貰って、あとは好き勝手にしていいといっただけ。

流石にエインシャントと神獣の技は自重して貰うけどな！

あと、狩りすぎるなよと注意しといた。訓練所にさせて貰うわけだし、できるだけ命は奪わないようにしないと。

救護係も楽じゃない。

まだ震えているサイトを安心させようと、ぼんと肩を叩いた。

「大丈夫。ラスボスと中ボスが守ってるんだから死ぬわけがないよ」

「…ラスボス？」

「知りたそうだな？ …訓練が終わったら、ちょっと話すよ」

そーいや、サイト達にはあんまり過去のことを話してなかったな。

…俺が覚えてないのもあるが。

どうしようか考えていると、サイトの震えが止まった。いや、堪えてる？

しかしまっすぐな瞳でサイトは俺を見た。

「…死なないんだよね？」

「俺の矜持にかけても絶対死なさないよ。死ぬほど怖い思いをするだけだ。」

話を聞く限りお前の状況は絶望的に悪いし、ルイズ嬢を諦められるなら戻るよ？」

「やる」

短くはっきり、サイトは頷いた。

その目にははっきりとやる気の炎が点ってる。

ずっとデルフを差し出す。

「素振り千本、忘れるなよ？」

「へっ！ 1日五千だって振ってやるぜ！」

上等！

さあて、サバイバル生活の始まりだ！

素人 i n 火竜山脈（後書き）

恐らくサイトを初心者状態で火竜山脈に放り込んだのはイオぐらいでしょう。

まあ、パーティメンバーが中ボス×2とラスボスだし、これくらいやってもいいかなと！

：反省してます。けど後悔は（ry

しかしテレポート万能説。

まあ地図を完全に把握している紅蓮さんがいなければ、前話のイオみたいな事になりかねるんですが。

テレポート（改）…

地理を把握してれば魔力の限りどこへもいける。

適当にしすぎると『いしのなかにいる』状態になるので注意が必要。

因みにサイトの代わりに、コピーを作る魔法の応用をしてミニサイズな分身を置きました。

コロボックルサイズですが危険が迫ると教えてくれるように設定してあります。

コピー魔法はベルガーさん直伝。

←おまけ

「：くすん、サイトのバカ、イオのおせっかい」

『なくなよるいずう』

「くすん。あんた、イオの作ったサイトの分身の割に馴れ馴れしいわね…」

『だってるいずのことすきだからな』

「ななななにってんのよ分身のくせに！」

『おりじなるもそーいうとこがかわいいとおもってるぜ』

「……分身サイト、こっち来なさい。とと特別にベッドで寝かせて上げるわ」

『さんきゅうー！』

成長記録（前書き）

まとめ的なもの。

決して修行風景が思いつかなかったとかそういうのじゃ（ry

成長記録

一日目…

素振りをしたサイトが颯爽とへたばっていたので軽く回復してやった。

素振り程度で疲れてるんじゃない、と言うわけで紅蓮さんと食料を探しに行って貰った。

すると直後に凄まじい火柱があがった。

早くも後悔して現場の生き物達を治療した。九割方火傷だ。原因はファイアボールかな？

新たに火気厳禁と付け加えると、紅蓮さんはめっちゃくちゃ不機嫌になった。お前は放火魔か。

そう言ってやったら、

「炎が使えずして何が紅蓮の魔導師ですか」

と言われた。

…つい納得してしまった俺が恨めしい。

因みに、治療した生き物達は襲いかかってきたけど丁寧にお帰り頂いた。

一番でかかったドラゴンを、ベルティナモールでちょっと脅かしたら逃げられた。

サイトに本当に神官なのか疑われたけど…。

腹が立ったので実戦訓練をしてやった。
つい熱が入りすぎてボッコボコにしたけど、まん丸ドロップあげたから問題ないだろう。

内容？

簡単な組み手だよ。ちょっと投げすぎたけど。

ちなみにその日は持っていた保存食でしのいだ。

倉庫の中身は腐らないが貯蔵が気になる。どれぐらいはいつてたっけ…。

明日から食料は俺が調達しよう。

二日目…

早くもサイトが筋肉痛を訴えた。

軽く押さえる程度で回復してやったが、予想外に早かったな。

素振りをさせてから散歩へ行かせる。今度は竜帝が同伴だ。

渋ってたけど、ドラゴンが見えた瞬間にやっと笑っていた。サイト
ご愁傷様。

その間に俺は食料調達だ。メインは山菜。

幸い食えそうなのは沢山生えていた。万一毒があっても、ティンクルレインで浄化できるから心配ないだろう。

籠一杯に山菜を積むと、道中で火蜥蜴に遭遇した。けど教われはしなかった。

お腹空いてるのかとおもって山菜を上げたら懐かれた。可愛い。キ
ュルケの気持ちがあった瞬間だった。

火蜥蜴とは途中で分かれて昼食の準備をする。

倉庫に入ってる調理器具を総動員…というほどでもないが、鍋の準備だ。昼だけど。

ちょうどいい具合にできた頃、散歩から帰ってきたサイトは魂が抜けたような顔をしていた。

ドラゴンが…と呻いてるところから察するに、巣にでも突っ込んだのだろうか。

鍋は上手かった。ちょっとピリッと来たけど、まさかな？

その後純人間の二人が腹をこわした。

すぐにティンクルレインで解毒したが、気をつけよう。

昼食後、少々の休憩の後でサイトをジャングルに放り込んだ。

勿論中空で様子見してるので死ぬことはないが、様々な生物から全速力で安全圏まで逃げるサイトを見て、ちょっと可哀想なことしたかな、と反省はした。

夕食は保存食使って美味しくしよう。

そーいや気づいたんだけど、俺と竜帝は何故か襲われなくなっていた。

竜帝は本能で強大な存在だと見破られてるのだろうか、何で俺も？ サイトと紅蓮さんは容赦なく襲われてるんだけど。

無事に戻ったサイトには、ご褒美としてドロップをあげといた。流石に一発殴られた。

夕食は宣言通り保存食を使った。
干し肉と山菜のスープだが、スープは二人とも飲まなかった。：これは安全なのに。

三日目…

恒例の素振り千本と回復から始まる。

しかし火竜山脈での生活が妙に楽しいのは何でだ？

日記を付けてると、紅蓮さんがむすつとした顔のまま稽古を申し出た。

火の魔法が使えないことがそんなに不満かよと突っ込んだら、違うと言われた。

まあ稽古は嫌いじゃないし、サイトは竜帝に任せて散歩に行かせて紅蓮さんと稽古だ。

因みに稽古といってもほぼ模擬戦。

ただ、カウンタマジック使ったら盛大に怒られた。

手加減したらしたで怒る癖に、我が儘め。

取り合えず紅蓮さんをこってり絞ってサイト達の帰りを待った。

そうしたら竜帝が何かの肉を持ち帰ってきた。

竜帝は上機嫌だったが：サイトはがたがた震えていた。何かあったんだ。

竜帝と同伴させるのはしばらくやめておこう。

因みに何かの肉は味付けしっかりして炙ったら大変美味だった。

残りは保存容器に入れて倉庫に放り込んでいた。サイトが食べれるようになったら焼き肉でもしよう。

今日の昼は紅蓮さんと一緒に訓練させといた。

具体的に言うとは紅蓮さんが攻撃魔法（弱め）を使ってサイトがそれをよけるという内容。

被弾率が半端なかった。紅蓮さんホーミングつけるとか鬼畜。

最初はホーミングすんなどと注意したけど、聞かなかったのでベルテインモールで沈めておいた。

年上の言うことはきこうか！

紅蓮さんを沈めてしまったので、代わりに筋トレさせといた。腹筋背筋鍛えろよ。

そういえばサイトに魔法教えるべきかな？

それ以前に使えるか判らんけど：帰ったらウンディーネに相談しよう。

教えるにしてもある程度剣の腕を磨いてからだな。

成長記録（後書き）

セイントビーム..

光属性の攻撃魔法。ホーリーボールの上位。

全体攻撃にすると空から光の柱が降ってくる。普段は手から照射される細いビーム。

紅蓮さんが食らったのは柱の方。

こんな感じで修行風景をお送りしたいと思います。

成長記録？（前書き）

イオが料理できる理由..シャルロットのため。

成長記録？

四日目…

今日もまた素振りから始まる。

ちょっと振りが早くなってきたかな？　良い傾向だ。

回復して朝食。今日はご飯を炊いてみた。

サイトは何故か感動していた。米好きだったのか？

聞けば故郷の食物らしい。忘れてたけど異世界人だったな、今度から琴線に触れないよう気をつけよう。

今日は俺がサイトと散歩だ。

途中で仲良くなった火蜥蜴に出会って、じゃれ合いついでにサイトの相手をして貰った。

まああつと言う間に火傷だらけにされたけど。

傷を治して食べ物を探すと、火蜥蜴が果物の生る木を教えてくれた。ナバールで手に入るような南国フルーツがあったので、今日の昼はデザート確定だ。

数個貰って倉庫に放り込み、火蜥蜴とサイトと散歩を続けた。

すると途中、火蜥蜴の仲間に出会った。

一匹二匹なら良かったんだが十匹を越えたところで冷や汗を掻いた。

いやな予感がして全力でダッシュ。

一瞬反応が遅れたサイトが逃げ出した頃に、大量の炎が襲いかかっ

た！

当然全力で逃げる俺たちである。

「蒸し焼きか！ あ、昼何が良い！？」

「余裕あるな！？ 何でも良いよ！ スープ以外なら！」

余裕そうに見えるが実際かなりギリギリだった。

あと、走って判ったけど俺も体力落ちてた。特訓せねば。

炎に追いかけられ、迂回しながら何とかキャンプしている場所へ戻ってきた。

…あそこ、巢だったんだな。

昼ご飯のデザートは旨かった。でも火蜥蜴に感謝したくない。ちなみに昼は宣言通り香草を使った肉の蒸し焼き作ってみた。サイトにはすげえ渋い顔されたけど、他二人には好評だった。

午後。

サイトの体力をしっかりと回復させ、ジャングルに放り込む。

前と同じだが、安全地帯に戻るまでの時間は確実に短くなっている。

末恐ろしい奴である。

どうも慣れたっぽいので明日は別の地域に放り込んでみよう。

晩飯は山菜の肉巻きとご飯にしてみた。スープも作れば良かったんだが、嫌がるし。

もう見分けはついてるっつーに…酷い奴らである。

五日目…

今日も素振りから始まる。ただしその回数は初日の比ではなくなつた。

多分二千回は振ってるんじゃないか？ 凄まじい進歩だ。

ここ五日で俺たちはすっかり火竜山脈に慣れきり、今や友達すらできた。火蜥蜴とか、火竜の雛とか癒される。

いや火蜥蜴はちよつと苦手になったけど。

最初はサバイバル生活についていけてなかったサイトだけど、今や肉を捌けるようになってるし。

流石に生物は狩れてないが。狩らなくて良いけど。

そーいや悲鳴も上げてないな。

ちよつとつまら…いや寂しいが、成長した証だ、祝ってやろう。

だがその前に恒例としてジャングルに放り込んでくる。今日はちよつと別ルートだ。

「と言うわけでドラゴンの巣の近くに来ていまーす」

「おいちよつといやな予感しかないんだが」

「大丈夫、逝ってこい！」

「いくの字ちがあああっ!?!」

こんな感じで放り込んでみた。

：流石に今回は食われかけていたので、ベルティナモールでドラゴン殴ったよ。

んでスリープフラワー使って眠らせて、ヒールライトで治しといた。暴れられると傷が増えるし…。

そういや、サイトが数瞬とはいえドラゴンを上回る速さで走ったのには驚いた。

やはり人間、危機意識によって能力が呼び覚まされるものらしい。

気絶したサイトを背負ってジャングルを歩いて帰る。

途中で亜人みたいなのに襲われたけど、何だったんだろなあれ？
強くはなかったけど。

帰るとお昼時はすっかり逃していたが、紅蓮さんと竜帝がちょこんと待ってて吹いた。

心なしか早く作れのオーラが出ていたので、スープと乾パンを出しておいた。

あー、紅蓮さん？　好き嫌いは許さないよ、ちょっとお話しようか。

午後は竜帝に任せ、紅蓮さんへ説教タイム。

ちょっと遠くで絶叫が聞こえるけど気にはしない。

気がついたら夕方になっていた。

何か久しぶりに神官らしいことした気がする。

晩御飯は紅蓮さんが文句が多かったので作らしてみた。

味は…お察しください。

一応宮廷育ちの紅蓮さんに料理を期待した俺がバカだった。

六日目…

腹痛が酷い。薬を飲んだのにまだ気持ち悪い。

今日は全然やる気が起きないので、基礎訓練させといた。腹筋背筋鍛えろよ！

今日のご飯は保存食。味気ないが楽だ。

そうしたら竜帝が不満そうにどっかいった。…また何か狩ってくる気だな。

そして午後。

ようやく体調が回復したのでサイトと紅蓮さんと組み手する。

紅蓮さんはまあ、接近戦が弱すぎるのはわかっていたが…サイト強くなったなあ。いくら魔法強化なしとはいえ、紅蓮さんを投げ飛ばすとは。

とはいえ紅蓮さんは基礎ができてるだけの素人なので、調子づかなくうちにサイトを投げとこう。

でも何かあまりにも上達が早いし、これはひよつとするとサイトはデュランと同系なのかもしれない。

ちよつと気が早いけど、剣の稽古の計画を早めようかな？

夕方。

竜帝が帰ってきた、大量の山菜を浮かばせて。

…こんなにどうしろと。

ただ、人参とかもあったので、チキンライスを作ってみようと思う。
ケチャップ？ 自作だ！

夕食はチキンライスとサラダ、そしてスープ。意地でもスープは飲ませたい。

結果、今日は二人とも飲んでくれた。

よっしゃ！

余った山菜は少々を倉庫に放り込んで、あとは空からドラゴンの巣に放り込んでおいた。食べるかな？

成長記録？（後書き）

成長記録はあと一話続く予定。
そのあと、いろいろ急展開します。

前回の解説し損ね
ティンクルレイン..

光属性の状態異常回復魔法。猛毒だろうと浄化するが腹痛には効果
ない模様。

成長記録？（前書き）

サバイバル編終了。

基礎はついたと思います。

成長記録？

七日目…

今日は明日のために少しばかりの休憩だ。素振りはやらせるけど。

休憩というわけで、今日はジャングルには放り込まないけど頭を使
って貰うことにした。

一緒に食べられる草を探したり、テレポートで行ってる水場まで歩
いたりなど、比較的平和な修行である。

しっかりと念を押して覚えろよ、と言った時、サイトは悪寒がした
そうだ。

勘が良くなったようで結構。

昼食を食べてからは復習がてら違うルートを巡ったりなどした。

サイトの不安そうな顔が愉快だったが、こんなことする理由は黙秘
した。

明日のお楽しみだからな。

夕食はちよつと手を込めてみた。

流石に設備がないから豪華なのは無理だが、それでも寿司もどきと
か作ってみた！

お酢は何故かフォルセナにあったんだ。休みの度に何とか買いに行
ったあの頃が懐かしい…。

サイトは感動して泣いてた。

紅蓮さんも竜帝も、心なしか味わって食べていたな。お粗末様でした。

「なあ、今日はどうしてこんなに優しいんだ？」

寝る直前、食後の勉強とばかりに薬草を見せていたらそんなことを聞かれた。

今日は休憩って言わなかったっけ？

「言われたけどさ…なーんか引かかるんだよな」

…本当に、勘が良くなったなあ。

何でもない、とだけ答えて寝るよう促した。サイトはまだ怪しがってたけど、こっそりスリープフラワーで寝かしてやった。

八日目…

今日からサイトを完全放置してみる。

多分起きたらテントもないし誰もいないわでパニックだろうから、メッセンジャーとしてミニサイズな俺のコピーを置いてきた。

コピーはこう説明してくれるはずだ。

「おはようサイト！ 今日から本格的サバイバル生活だ。

昨日までの七日間で基礎訓練はしたから、後七日は自分で生き延びろ！

尚、本体達は火竜山脈の主の所へ喧嘩売りに行っています。死にたくないなら近寄るなよ？」

「イオー！？」

とまあこういう状況だろうから、最初だけ防音結界張つといた。
ちなみにコピーは話し相手以外何もできない仕様である。ヒントも
何もない、本当に雑談だけする仕様。

無駄に凝ったことは認める。

因みに本体の俺達は本当に火竜山脈の主に喧嘩売るつもり。いやや
るのは竜帝だけけど！
今日の所は搜索。結果は見つからなかった。

コピーの方も異常なし。ただ、笑いダケらしきものを食いかけたっ
ぽい。大丈夫だろうか。

九日目…

火竜山脈の主はまだ見つからない。そもそもどんな奴なんだ？
でも竜帝は強いドラゴンの力を感じるとは言っていたから、やっぱ
りドラゴンなのかね？

竜帝が負けるとは微塵も思っていないが、この世界のドラゴンの本気
も気になる。

ちょっと紅蓮さんと語り合おう。

サイトの方も異常なし。

しかし謎だ。何でコピーは本体と性格違うんだ？ 俺は常にげらげ
ら笑うような奴じゃないと思うんだが。

その事を紅蓮さんに言ったらそっくりだと言われた。

心外だ。

十四日目..

…えらく日付飛んだな。忘れてた訳じゃないぞ！

十日目に主を見つけたんだよ。

驚いたことにそいつは喋れる上、本性の竜帝とタメ張れるぐらいの巨大なドラゴンだったんだ。
一言二言話して即戦闘。

二人の戦いはとにかく滅茶苦茶だった。

本性に戻れない竜帝は神獣の技とかすべて解禁、自重？何それおいしいの状態だったし、
ドラゴンは圧倒的な質量と、強力なブレスを持って竜帝と対峙していた。

つまり自重なしの全力全壊勝負な訳で、周囲にいた俺達まで被害がきた！

しかもあいつらドラゴンじゃん？

体力とか人間の比じゃないし、それが三日三晩。場所を変えても変えても襲いかかってくる神獣の攻撃とかトラウマもんだろあれ…。

そんなわけで、コピーからの報告と自分達の身の安全の確保、怪我した生き物たちの治療に追われてたら日記なんか書けなかった。あ、怪我を治したら色々な奴らに懷かれたよ。いつかの火蜥蜴混じっててちよつと引きつったが。

紅蓮さんは何か羨ましそうに見てた。

しかし、いかに人間の姿をしていても竜帝は竜帝だった。

莫大な魔力と臂力で辛くも勝利をもぎ取り、何か主と友情築いてた。

いやあの主さんよ、今度は本性で勝負しろとか勘弁してください。部下達顔面蒼白だから。俺たちもだけど！

そんなことをコピーに伝えたら、げらげら笑われた。決定、見つけ次第消そう。

しかし長い二週間だった。

サイトの特訓だろ、紅蓮さんも特訓だろ、竜帝の暴走だろ…あれ最後悲しくなってきた。

火竜山脈で仲良くなったみんなが癒しだよ…。

コピーの気配をたどってサイトと合流した。

一週間振りにあったサイトは随分ずたぼろだったが、まあ健康そうだった。

成果は出たみたいだな。

ルイズ嬢、この二週間でサイトはすっかり逞しくなったよ！

ひよろひよろと生っちょろかった体はすっかり引き締まり。

確認がてら紅蓮さんが攻撃すればしっかり回避。

ジャングルへ放り込んでもドラゴンにも臆せず、挑発して逃げるぐらいには素早く余裕を持つようになった。

と言うわけで。

「おめでとう！ サイトは素人から見習いへとクラスチェンジした！」

「見習い…こんだけやってもか…。つかよくも置いてったな!？」

技術がないんだから当然だ。

放置に関しては…まあ、頑張ったな！

「…」

無言で殴られた。えーと…うん、ごめん。

「ぎゃはは、本体ざまあ！」

無言でコピーを握り潰す。

ぐえっと言った後に魔法解除したのでグロテスクな事にはなっていないよ！

さてこれで基礎段階は終わった。

ただ、学院に戻ってこれから技術を学べば、サイトはあつと言う間に二流ぐらいにはなれるだろう。

いや、教えるのがあの人だとするともっと上達するかも？

まあ頑張ったし、凹んでるサイトには学院へ戻ったらデザート作ってやろう。

：マルトーのおっさんの許可降りるかなあ？

「よし、じゃあ帰るか！」

「うむ、なかなか楽しかったぞ」

そりゃ良かった。

ありがとう、火竜山脈のみんな。
迷惑かけちゃったけど、元気だな！

心の中でぺこりと礼をして、テレポートを発動。
だが俺は気づかなかった。

テレポートする瞬間、三つの輝きが鞆の中へ潜り込んだ事へ。

また一波乱ありそうだが、この時の俺の頭にはマルトーのおっさんにどう頼むかしが入ってなかった。

成長記録？（後書き）

まさかの火竜山脈の主との決闘。

いや、原作でもいるか判らないのに出しちゃいました。お察しの通り火韻竜です。

竜帝は人間の姿こそしてるけど、力や能力は基本は竜のそれです。いつか火韻竜と本性ヒュージドラゴンな竜帝の戦いを載せてみたいです。

しかし最近のイオは暴走気味な気がする…。そういや、何気に容姿が不明ですね。

いつか説明するかも。

冒険と一歩前進？（前書き）

キュルケはお姉さんって感じがします。

冒険と一歩前進？

「学院だ…ジャングルもなければドラゴンの巢もない学院だ！

トリスティン魔法学院よ、俺は帰ってきたぞー！！」

おお、すげえテンションだなサイト。

まあ、一般人がサバイバルから帰ってきたときの当然の反応か。火竜山脈はマジで人外魔境だった。

しかし懐かしいな。まだ二週間…いや、アルビオンから帰った後一日しかいなかったから、ほぼ半月ぶりか。
懐かしくなるわけだ！

よし、早速ルイズ嬢に報告行って、そのあとマルトーのおっさんとこ行って南国デザートでも…。

「っ！？」

ちゅぽどおおん！！！！

思いを馳せていると、いきなり爆殺されかけた。

もしかしくなくても彼女だろうな…かわさなきや死んでたぞマジで。

というか何で俺だけ…。

「おかえりなさい。ご主人様を除け者にした旅行は楽しかったかしら？」

黒い！ 黒いよルイズ嬢！

何でそんなに不機嫌なのさ！？

ルイズ嬢は鳶色の瞳をきつとつり上げた。

「ちびサイトが消えたのよ！ どこへ隠したの？」

「え…それだけ？」

思わす声に出したら手前が爆発した。目がやる気だ！

「あの分身は元々、二週間で消えるよう設定していたんです！」

「じゃあもう一度出して！」

はい！？

そりゃあ出せないことはないけどもう臨時はいらんだろ…ってああ、もしかして。

「気に入ったの？」

「…べ、ベベべ別に気に入った訳じゃないわよ！ あんな、五月蠅いのなんて、その…そう！

勝手にいなくなったんだから見つけて貰てやろうと思っただけよ
！」

…若いっていいねえ。いや俺もまだ若いつもりだけど。

この酷くねじ曲がった愛情表現に、サイトなんかトマトだよトマト。

竜帝と紅蓮さんはちよつとだるそうだけど。
そういえば…。

「ルイズ嬢、結婚式いつなのさ？ 二週間前にはこの時期は忙しいって言ってたのに」

俺の記憶が確かなら、結婚するとなると式典に相応の準備が必要なのは。

それも王族貴族なら、並々ならぬ時間が必要な上、当人も招待状を書いたりとかするんじゃないの？

俺の問いにルイズ嬢は憮然とした様子で答えた。

「今は姫様が興入れだから」

「ああ、アンリエッタ王女がゲルマニアに嫁ぐんだったか」

紅蓮さんそんなのいつ知ったんだ？ 二週間火竜山脈にいたくせに。

まあともかく納得は行った。

王族が結婚するって時に、一介の貴族が結婚なんて…なあ？ 貢ぎ物とかで忙しい時期だろうに。

いくらルイズ嬢が公爵家の息女といっても、王女様に頭が上がるわけがないと。

良かったなサイト、時間の猶予はまだあるみたいだぞ？

「ニヤニヤすんな！」

照れるな照れるな。

ルイズ嬢によると姫様の結婚から最低でも一月は後らしいし、たっぷり修行できるな、うん。

「って、話を逸らそうとしたって無駄よ！ 早くちびサイトを出しなさい！」

本当に気に入っただんだな…。本物サイトも気にしてあげてください。

「俺より分身の方がいいのかよ…」

あー、また落ち込んでるし。ここはサバイバルじゃ矯正されなかったか…。

すっごい面倒くさいなあ。だれか救いの手を！

「ダーリン！ 帰ってきてたのねえ！」

救いの手は割とすぐに現れた。

キュルケとその使い魔のフレイムだ。

キュルケはサイトとその豊満な胸を押しつけるように抱きついていく。くそ、羨ましい！

よく見ると後ろの方にタバサとシルフィードもいた。一人と一匹は俺たちを確認するにつかつかとやってくる。

いや、つかつかというより…突進？

って待って！？

「きゅいきゅい！」

「げほっ！？　ようシルフィ、半月ぶり…」

シルフィの体当たりやべえ…内蔵出るところだった。
腹を押さえつつ何とか立ち上がる。

「大丈夫かい？」

ひょっこり金髪を揺らしながら覗いてきたのはギーシュだ。彼の相棒らしい巨大モグラもつぶらな瞳でこっちを見ている。

まんまるドロップを口に放り込み、会釈する。

「平気平気。シルフィも手加減してくれたみたいだし」

そう言ってシルフィの頭を優しく撫でる。鱗が気持ちいい。
シルフィも気持ちいいらしく、ベロベロと顔をなめてきた。あはは、くすぐってえ！

そんな使い魔を涼しげな青い瞳で見て、タバサが口を開く。

「どこへ行ってたの？」

「修行だよ」

「火竜山脈へ？」

タバサの言葉に目を見開く。

どうしてそれを…ってルイズ嬢ならぼろっと言いかねんな、うん。

しかし何でタバサがそんなこと気にするんだ？

「…ガリアへの不法侵入で捕まえないきゃいけない」

「え！」

「嘘。その反応からして真実だと判断する」

…年上にそう言う冗談はいかんよ？

いや、不法侵入は悪いと思ったけどさ。

「えー、本当に火竜山脈へ行ってきたの！？ イオとリュウティは規格外だからいいけど、ダーリンとそっちの貴方、よく無事だったわねえ」

「あー、キュルケ。こっちの紅蓮さんも色々と規格外だから」

さらりと規格外扱いしないで…っていつでももう否定できないな。
悲しくなってきた。

シャル…兄ちゃんはどうとう人外の仲間入りを自覚しました。

——心なしか「昔から人外じゃないでちか」と聞こえた気がする。

「でも、そんなに強いなら安心して行けるわね」

ちょっと思考をとばしてたらなんか話が進んでいた。

えっと何々？ 宝探し？

「そうよ！ 折角ダーリン達と一緒にに行こうと思ってたらいないん

ですもの！

でも帰ってきたんだからやっと一緒に行けるわね、ダーリンっ」

「ちょっとツエルプストー！ サイトは私の使い魔なんだからね！
？」

あー、この言い合い久し振り。

しかし宝探しなあ…面白そうだな。

でもこの世界じゃハーフエルフの俺は無理だろうなあ…。

「俺も行きかったなあ…」

「え、一緒に行かないの？」

きよとん、とキュルケが心底不思議そうな目を向けてきた。

へ？

「うっそ、イオ行かねえのか？」

サイトまで何言ってるの？

俺ハーフエルフだよ？ 学院ならともかく、外に行ったら大騒ぎじやん。

「そっか…そういえばハーフエルフだったね君は」

「忘れてた」

ざっくう！

な、何気に一番酷いなタバサとギーシュ…。

「あなたはエルフラしくない」

「…それって褒められてんの？」

「訂正。あなたはとても人間らしい」

だから問題ない、と彼女は言った。
えっと…それはつまり。

「一緒に行っているのか？」

「当然でしょ！」

あんたもリュウテイもサイトと同じ私の使い魔なんだから。…なのにあんたとリュウテイは私に内緒ですぐどっか行っちゃうし、…サイトも連れてっちゃうし。

けど、…まだ数えるほどしか一緒に過ごしてないけど、あんた達が優しいのは判ってるわよ」

最後の方は声が小さくてよく聞き取れなかったけど…やべ、嬉しい。何か竜帝と紅蓮さんがにやにやしてるけど、気にならないぐらい嬉しい。

「あたしが言うのも何だけど、イオとリュウテイはルイズとダーリンと変に距離を取りすぎよ！」

どうせ貴方達、お互いのことをあまり知らないんじゃないかって？」

キュルケの指摘にぐうの音も出ない。

確かに俺達は異世界の者だから、といってあまりルイズ嬢達と関わ

ってなかった気がする。

火竜山脈でのサイトとの約束もあるし、この際だから話すべきか？

竜帝にそつと目を向ける。

竜帝は口元をつり上げ、微笑んだ。

「イオ、お前の好きにしろ。我は今機嫌がいいからな、許す」

ずっと黙っていた竜帝が言った。紅蓮さんもこくりと頷いている。

「悩むなんて、先生らしくないですよ」

そうだな…。

悩むなんて、俺らしくない！

俺はサイトに向き直った。

「宝探しの間に、話しよう。その、お互いのこととか今まで何したとか…とにかく色々！」

…：うわああ、恥ずかしい！ 何言っちゃってるんだ俺！？

絶対耳の端まで顔真っ赤だ。ううう…いい歳こいてほんとに何言っちゃってんの。

恐る恐るサイト達の方へ顔を向けると、若者達はにかつと笑っていた。…タバサは雰囲気だけだったけど。

サイトが一番の良い笑顔で言った。

「おう！」

冒険と一歩前進？（後書き）

本編でも語られたようにイオと竜帝は使い魔としては異例なほど関わりが少ないです。

これを機にゼロ魔組ともっと仲良くさせたい。

因みに精神は肉体に引っ張られるという言葉の通り、イオの精神はどちらかというと子供寄りです。

本人は大人だと思ってますが、実際は見かけの年齢より少し上程度の精神年齢です。

でも中身の年齢相応の面もあるような…とにかく子供っぽい大人なんです奴は。

私は何がいたいんだろう？

前途多難な出発（前書き）

ギトー先生がよくわからなくなってきた。

前途多難な出発

「おにーちゃんは、いつもずるいでち」

大粒の涙をこぼしながら、シャルロットはいった。

「いつもいつもシャルを除け者にして、挙げ句の果てには殺し合いなんて、ほんと最低でち」

「あはは、それは否定できないな」

何事もなかったかのように笑ってみせると、シャルロットはべちつと俺の頬を殴った。

ポロポロと涙が頬を濡らす。

…悪かったって。だから泣かないでくれ、兄ちゃんまで泣きたくなるじゃないか。

「勝手に泣けばいいんでちよ！ …ひっく、うええ……」

「シャルロット…」

隣に腰掛けたデュランがそっとシャルロットの頭を撫でた。

ホークアイも辛そうに俺を見ている。

「おいこら、野郎が情けない顔してるんじゃない。おまえ等にはこれからも妹を守って貰わんと」

「…殺しに掛かってきたのによく言うぜ」

だって俺ぐらいを倒せなきゃ、この先の紅蓮さんや竜帝には絶対適
いっこないからな。

…あー、紅蓮さんは別かな。ホークアイはカウンタマジック出来る
っぽいし、何とかなるか。

竜帝は…こいつら三人なら何とかしそうな、そんな予感がする。

っと、そんなことを考えてる間に力抜けてきた…もう時間がないな。

「シャル」

「ひっく…なんっ…でちか…」

泣いてるシャルの頬に手を当てて、笑みを作る。

こんな泣き虫、ほっとくのは心配だけど…ま、頼りにしてるからな
男二人。

「ずっと大好きだからな」

それきり、力が抜けていく。

よく見ると体が塵になってるみたいだ。…アンデッドの末路か。

最期に言いたいことが言えて、良かった。

＊

…懐かしい夢を見た。

いや、今見ると懐かしいと言うより恥ずかしいな。

何で今更…昨日あんな恥ずかしいこと言ったからか？

習慣通りに夜明けに起きて、お祈りを済ませる。

今日から宝探しだ。

昨日のあの恥ずかしい発言の後、紅蓮さんの紹介を済ませてキュルケ達とどこへ行くのか決めといた。

と言っても俺は半分上の空だったから覚えてないが…割と遠出だったと思う。テレポートあるから問題ないけど。

ちなみに俺はフードを絶対に外さないことを念入りに言われた。まあ当然か。

そう言えばシエスタも行くことになったよ。

いや、俺じゃなくてサイトが声掛けてた。その後ルイズ嬢にお仕置きされてたけど。

通りがかったロングビルさんがすご引いてたけど、まあ一種の愛情表現だし！

「…おはよー、イオはやっぱ起きるの早いな」

「お、珍しく早いなサイト」

まだ竜帝も紅蓮さんも起きてないのに。

それを言うとかサイトは遠い目をして「ジャングルの生活に慣れちゃって…」と呟いた。

まあ、ジャングルでおちおち爆睡してられないしな。修行の成果が出て何より。

「じゃあ素振りしとけよー」

「言われなくても判ってるって」

そう言ってサイトはデルフを持ち、素振りを始める。

さて、その間に暇だし、久しぶりにアイテム整理でもするか。

倉庫から適当にウィスプの像やら大地のコインやらを取り出す。

……？

「…何で減ってるの？」

超買い溜めしておいた精霊の像が綺麗さっぱり消え失せている。泥棒な訳ないし、使ってないし…え、ほんとにどゆことこれ。

考えたくないが、異世界にくる途中で倉庫から一部が弾き出されたんじゃないか。

……ぐっばい、俺の数万ルク分の像。

「しくしくしく…」

「ちょ、どうしたんだ？」

何でもないさ：研究に使おうと思ってたのに。

悔やんでも仕方ない、魔法の種あったし、地道に狙おう。完全に運
ゲだけど。

そんなことを考えていると、朝食の時間になった。

学院のご飯も久しぶりだなと思ってたら、ギトー先生にばったり出
会って何か同伴することになった。

因みにコルベール先生の隣でもある。

「やあやあ、久しぶりですねイオ君にリュウテイ殿」

「あの、これは一体…」

俺の問いにコルベール先生はにっこりと笑うと、ちょいちょいとギ
トー先生を指差した。

「ミスタ・ギトーの計らいだね。ここ最近居なかっただろう？ 心
配して下さっていたんだよ」

「え！？」

マジか！？

え、でも俺達そんなにギトー先生と親しい訳じゃないのになんで！？

竜帝も同じようで、驚いた表情でギトー先生を見つめている。

「違いますぞミスタ・コルベール！ 私はそのですね、その奴ら
があまりに顔を見せないなので食事ぐらい恵んでやろうかと思っただ
けで」

ギトー先生は何かぶつぶつ言っていたけど、俺たち全員ぽかんとし
てしまった。

「…良い人だ」

「うむ、善玉だ」

「うわー意外…」

だってそれだけなら竜帝にだけ席あげればいいのに、俺とサイトと
紅蓮さんにまで用意してるなんて…。

この世界の人間をちょっとナメてた。反省します！

「何を勘違いしている!？」

俺たちの生温い視線に顔を真っ赤にしたギトー先生は、生徒達の視
線に気づいて、ごほんと咳払いして乱暴に着席した。

久しぶりの食堂のご飯は相変わらずこってりしていたけど、非常に
美味しかった。

だけど前々から思ってたんだけど…ささやかな糧じゃないだろこれ。

朝食を終えて、俺達は裏手の森に集合していた。

タバサのシルフィードで冒険に行くらしいからな。

…どーでもいいんだが、倉庫のことを喋ると何でみんなして俺に荷

物渡すかな？

判ってるけどさ！

ポイポイと倉庫に荷物を放り込んでやると、慣れてるルイズ嬢とサイト達以外は呆然とした表情をした。

懐かしいなこの反応…。

む、いち早く正気に戻ったのはタバサみたいだ。

「それも、魔法？」

「そうだな、マジックアイテムみたいな魔法だ」

「教えて」

…流石にそれは予想できなかった。

んー、この世界の人間でも俺たちの魔法が使えるか試してみたいし、いいかな？

「じゃあ、旅の途中にでも試してみる？」

こくり、とタバサは頷いた。

何か小動物みたいな仕草だなあ、シャルを思い出すよ。

「それ、便利そうね。あたしも教えて貰って宜しいかしら？」

「イオ、私を差し置いてツェルプストーになんか教えたらどうなるか判ってるんでしょうね？」

…さーて出発しようか。

でも流石に九人はシルフィに乗れないよな？
そこんとこどうだろうタバサ。

「荷物が無いなら、多分大丈夫」

「きゅい！？」

無理そうだなあシルフィ。

…あ、良いこと思いついた！
考え込むふりをして小声で呪文を詠唱する。

「む、この魔力は…おいイオ！？」

「悪いな竜帝、ボディチェンジ！！」

「ちよ、その呪文！？」

「「？」」

竜帝と紅蓮さんが焦る中、呪文は完全に発動した。
ぼむっ！とサイト、ギーシュ、竜帝、紅蓮さんが煙に包まれる。

「ちよ！？ 何してるのよイオ！」

「まあまあ見てなって」

煙を追い払うと、そこには極小化した四人が呆然と突っ立っていた。

：いや、若干一名怒りでブルブル震えてるけど。

「：いい、いきなりボディチェンジの魔法を使う人がいますか！」

「だってシルフィに九人も乗せるなんて無理だろうし」

小さくなれば問題ないよな！

紅蓮さんにぐっと親指を立てると、頭を押さえ込んでしまった。

次の瞬間。

ぼむっ！という音とともに俺の体が煙に包まれた！

げほっ！？　　ちょ、もしかなくてもこれ！

「そうだ、ボディチェンジだ」

ひどく低い声と共に、目の前に、同サイズの竜帝の顔が。

「生憎と解呪はできんが、同じ目に遭わせることはできるぞ」

「あ、ははー」

やべ、悪寒が止まらない。つか解呪できないとか絶対嘘だ。

：冒険行く前に俺死んだな。

ひんやりとした冷気が体を包み、それがコールドブレイズだとわかった瞬間意識が暗転した。

ちびっ子の上に雪だるまか畜生！

前途多難な出発（後書き）

ボディチェンジ…

月属性の魔法でその名の通り変化の魔法。

これ使えば人間になれるんじゃないの？とは思っててもゲーム仕様なのでちびっ子（もしくはモーグリ等）にしかありません。

いやイオなら改造してきそうなんですけどね。

因みに何で竜帝が使えるかというと、月の神獣の力ということ。

竜帝はその気になったら元に戻るけど、あえて戻らないだけです。サイトとギーシュはポカーン。

紅蓮さんは…まあ紅蓮さんですし。

ラスボスにボディチェンジが通じるのはひとえにイオが中ボスだからだと言うことにしておいてください。

まったり宝探し（前書き）

ぐだってる。しかしラスボスは自重しない。

まったり宝探し

出発してから数日後。

俺達は廃村にいた。

かつて村人がそれなりにいただろうその廃村は、所々の家は壊れ、草は生え放題等嘗ての面影を微塵もなくしていた。

何よりも廃村と言いたらしめるのは、そこに異形の魔物が徘徊していることだろう。

「…醜いな」

オーク鬼だっけ？ 俺もそう思う。

空から悠々と廃村の様子を眺めながら、竜帝に同意する。

俺と竜帝はそう、空から様子を見ていた。

基本戦うのはキュルケ達だからな。一回戦ったらついやりすぎちゃって怒られたんだよ！

因みに悪いのは竜帝だ。

よりもよって木の神獣の技キルスティングー使ったんだからな！

あれは迫り来る敵より茨をよける方が大変だった…。

そのせいで俺は竜帝のブレーキ役兼回復役である。怪我人でないけどな、良いことだ。

しかしなかなかどうして、全員結構な実力者だ。

キュルケは炎の使い手らしく、ここぞという火力があるし、ギーシュは意外に作戦担当など頭脳戦に強い。

タバサなんか戦闘と頭脳戦どちらも対応できるし、ルイズ嬢も二人に操作されて爆発の威力を生かしてる。

サイトも言わずもがな。火竜山脈で鍛えた体は無駄じゃなかった。

そういやルーンの効果、封印しっぱなしだけどいいのかな？

因みに紅蓮さんは自発的にシエスタのお手伝いに行っている。珍しいこともあるもんだ。

…え、出発の後どうなったかって？

一言で言えば地獄。

他の連中はシエスタの鞆に入ってたのに、俺だけ空中遊泳だからな！

竜帝が魔力で無駄に強化した紐を俺にくくりつけ、ちびサイズのまま鞆の中から吊すってやつ。

本気で死ぬかと思ったよ！

「沈黙」させられてて飛行術使えないし悲鳴も上げれないし、哀れんだルイズ嬢が助けてくれようとしたけど地味に結界張られてたし！

生きててよかった！！

「む、動くみたいだぞ」

竜帝がそう言って指差した遙か下では、青い髪の少女が杖を振るっていた。

氷の槍がオーク鬼の足を止めるように襲いかかっている。

「成る程、確かに一人じゃ分が悪いな」

タバサは一人、対してオーク鬼は数体。賢明な判断だ。

足を打ち抜かれたらしいオーク鬼達は、この上空までも聞こえる叫びを上げ、一気に炎に包まれた！

キュルケの魔法だな。

「いや、あの土小僧の魔法もある。恐らく油でもぶっかけたのだろう」

「あ、成る程」

通りで燃え盛るのが早いわけだ。

しかしオーク鬼達はしぶとい。炎に包まれながらも最期の悪足掻きにタバサへ拳を向けている。

だが、タバサは慌てることなく佇んでいた。

何故なら、突如現れた青銅の人形が横槍からオーク鬼達を吹き飛ばしたからだ。

ギーシュのワルキューレだな。

しかもオーク鬼達が吹っ飛んだ方向には、ギーシュの使い魔ヴェルダンデが掘った落とし穴があったらしく、オーク鬼達は数体落ちた。

しかし数体はしつこく生き残っている。本当にしつこいな！
その直後。

轟音と共に爆発で一体の頭が吹き飛んだ！

「つか、何でこの上空まで聞こえるのさ！」

「単に我らの耳が他より良いだけだろう」

そういう竜帝も耳を押さえて顔をしかめている。

あー…俺より耳良いんだな。

かく言う俺も耳を押さえてはいないが顔しかめてるだろうし。

お、そんなことしてる間に残り四体に。

いつの間にやら飛び出したサイトとキュルケの使い魔フレイムが、残ったオーク鬼を打ち倒す！

ふむ、やっぱり剣術は必要だな。今のサイトはデルフのサポートで剣振ってるだけだし。

早めにあのマジックアイテムを手に入れなきゃなあ。

「お疲れさん！」

オーク鬼退治が終わったので、地上に降りる。
廃屋の陰から出てきたキュルケ達も揃って、食料調達組以外は全員
集合したな。

「じゃあ、早速お宝を探しましょうか！」

自信満々にキュルケが言う。

「けどキュルケ、そう言ってお宝がないことは何回目だい？」

呆れたようにギーシュがいう。

キュルケはむっとした表情でギーシュに詰め寄った。

「中には本物もあるかもしれないじゃない！」

「けど、廃村や洞窟に潜っては化け物との戦いばかりじゃないか！
割に合わないよ」

あー……。確かに今までの地図はスカだったしな。
どうみてもガラクタな元剣みたいな錆びた棒切れとか、鎧っぽい鉄
塊とか。

しかも行く所々に魔物がいるし、確かに割に合わないだろう。

「まあまあ、次こそ当たるかも知れないだろ？」

「お宝の地図なんて今も昔もそんなもんだろー」

デルフの汚れを払いながらサイトとデルフが言う。お前ら能天気だ

なあ…。

「とにかく！ この村の廃寺院に行くわよ！ ここにはブリージンガメルっていう黄金の首飾りがあるんだから！」

「また偽物なんじゃないの？」

「い、い、か、ら、行くわよ！」

渋るメイジ組を引き連れてキュルケは意気揚々と歩いていった。
轟沈しなきゃいいけど。

くいくい。

む、袖を引っ張るのは誰だ？

下を見るとタバサが相変わらぬ無表情で袖を引っ張っていた。

「…この前の続き」

「タバサは行かないのか？」

「ここもハズレ」

ズバッと言いつ切るタバサは容赦がない。譲る気はないらしい。
んじゃ、今日も倉庫を試しますか！

そう言うと、タバサは首を横に振った。

「今日は別の」

「別のと言われても…倉庫もう開けるのか？」

尋ねると、タバサは何もない空間に手をつ込み、棒きれを取り出した。

…マジか。

「マジックアイテムを使う感覚で出来た。これは魔法というよりアイテムに近い」

まさかマスターするとは。

紅蓮さんでさえ二週間はかかったのに！

タバサは天才なのかも知れない。簡単な理論と術式を教えたただけであっさりできるとは…。

相変わらず無表情だが、どこか得意げに見える。

「次」

「判ったよ。でも精霊魔法は適正がないと難しいしな…」

「それは、エルフの先住魔法とどう違うの？」

「…んーとね」

困った。

先住魔法ってよく知らないんだよな…どうしたもんか。

その時。

「また外れたー!!」

予想通り、ハズレに打ちのめされるキュルケの叫びが聞こえた。何というか…。

「元氣だよなあ君の親友」

「…否定はしない」

後でいい?と聞くと、タバサは渋々ながら頷いてくれた。しかし実を言おうと助かった。

こっちの先住魔法って詳しくないんだよな…。
系統魔法が理をねじ曲げて現象を起こすなら、先住魔法は理に沿って現象を起こす、ぐらいしか知らないし。

つまり、何かするのに複雑な工程がいるのが系統魔法で、一本道なのが先住魔法らしい。

しかしこれだけ聞くと、先住魔法って俺達の魔法に似てるなあ。
案外、先住魔法っていうのは俗称で正式名称は精霊魔法だったりして。

その夜。

俺達は廃墟となった寺院でシエスタ作のシチューを囲って食べていた。

しかしシエスタ料理上手いなー。美味しい。

「これはなんていうシチューなの？ ハーブの使い方が独特ね。あと、なんだか見たこともない野菜がたくさんはいつてるわ」

「私の村に伝わるシチューで、ヨシエナヴェって言うんです」

へえヨシエナヴェ：何か引っ掛かるなあ。

昔どこかで聞いたような：どことなく懐かしい味がするし。

サイトも首を傾げている。

シエスタはここぞとばかりにサイトにアプローチを始め、目聡く見つけたルイズ嬢がシエスタを牽制するのは放つという。

いや、冒険中毎日そうだし。

食事の後、キュルケは地図を広げた。

しかしこうもはずれが続くとは…。

「キュルケ、そろそろ学院に帰った方が良いんじゃないか？」

「イオの言うとおりで、時間の無駄だよ」

俺そこまで言っていないからなギーシュ？

「後一件だけ！ これで最後にするわ」

そういつてキュルケは焦ったように地図を掴み取る。

「これ！ ここへ行ったら学院に帰るわ、それでいいでしょう？」

「何というお宝だね？」

「りゅーのはごろもって書いてあるな」

地図を覗き込んで紅蓮さんが言った。

その直後、ルイズ嬢とサイトの取り合いをしていたシエスタがずっこけた。

「うわっ、シエスタ!？」

「あ、ありがとうございますサイトさん……。あの、ミス・ツエルプストー、今『竜の羽衣』って……」

「あら、あなた知ってるの？ タルブの村の近くなんだけど」

シエスタは一度息を大きく吐くと、はっきりと言った。

「わたしの故郷です」

まったり宝探し（後書き）

キルステインガー…

木の神獣ミスボルムの必殺技。無数の巨大な茨が襲いかかる。茨自体に凶悪な毒が含まれているので危険。

ミスボルムといえばカボチャ。どうでもいいけどパンプキンボム投げつけるのやめてくださいorz

異世界の宝（前書き）

ようやくここまでできた。

本人も忘れがちですがイオも転生者。

異世界の宝

翌朝。俺達はシルフィに乗ってシエスタの故郷へ向かっていた。といつても俺と紅蓮さんと竜帝は相変わらずちびっ子だ。

テレポートで行っても良かったけど：タルブの村の正確な位置なんて知らんし無理。ラ・ロシエールの向こうの草原の村だけじゃちょっと。

そもそも俺等ラ・ロシエールが判らんし。

今回はちゃんと許可取ってるよ！ 初日の失敗は繰り返したくないからな！

：正直竜帝が本来の姿ならみんな余裕で乗れるのに。

「言っておくが、我は背に人間などを乗せる気は全くないぞ」

「判ってるよ！ というかまた心読むな！」

「でも、何で戻れないんでしょうか？」

それが謎なんだよ紅蓮さん。

そんな事を喋っていると、頭上、つまりシエスタ達は『竜の羽衣』の話を始めていた。

「どうして『竜の羽衣』って呼ばれているの？」

「それを纏った者は空を飛べるそうです」

言いにくそうにシエスタは答えた。

風系のマジックアイテムかなんかかと思ったけど違うのか？

「でも、そんな大した物じゃありません。インチキなんです」

「どうして？」

「持ち主は私のひいおじいちゃんだったんですが：ひいおじいちゃん、それで東から飛んできたって言ってたけどみんな信じてなくて」

私も信じてません、とシエスタは続けた。

「本当ならすごいじゃないの」

「でも、誰も飛んではるところを見たことがないんです。誰かが『竜の羽衣』で飛んで見ろって言ったときもひいおじいちゃん飛べなくて」

「成る程、それで名ばかりの秘宝か」

納得。

でもそれは本当に名ばかりなのかな？ 固定化の魔法まで掛けて貰って、寺院まで建てるほどだ。
何かあるに違いない。

：上でキュルケ達がインチキなら売り飛ばせば良いとか言ってるけど、無視だ無視。

＊

俺とサイトは目を丸くしていた。

俺たちがいるここは、タルブの村の寺院。『竜の羽衣』を包むように草原の一角に建てられたそこは、今までに見たどんな寺院とも異なる風貌をしていた。

丸木を組み合わせた門に、石の代わりに板と漆喰で作られた壁。木の柱。白い紙と、縄で作られた紐飾り。

——懐かしい。

どうして…こんなの初めて見るはずなのに。

板敷きの床の上に鎮座しているくすんだ緑の『飛行機』もまた、何となく懐かしさを漂わせている。

…もしかしたら、転生前の記憶の残滓かもしれない。

もうほとんど覚えてないけど…本当に懐かしい。

サイトも何か感銘を受けたようで、じっと『竜の羽衣』を見つめている。

メイジ組は珍しいものを見る目で見てるけど、欠伸をしたり、疑念の視線からこれの価値に気づいてないな。

「これは…小型の飛行空母ですか？　でも小さすぎるし…」

「否、どう見ても一人乗りが前提とされている。旗となるべき空母でなく…さしずめ自由に動く戦闘のための飛行機械」

流石竜帝、一目でそこまで見抜くとは。

これは状態もいいし、燃料があれば飛ぶな。

まさか異世界でこんな進んだ飛行機を見れるとは思わなんだ。

「こんなものが飛ぶ訳ないだろう？ 翼は固定されてるし、羽ばたけないじゃないか」

「私もギーシュに賛成。正直、飛べるなんて思えないわ」

「飛べるよ」

はっきりとサイトが声を出した。

あんまりにもはっきり言うもんだから、みんな驚いたように視線をサイトに向ける。

「なあ、シエスタ。その髪と目の色、ひいおじいちゃん似だって言われるだろ？」

「えっ、どうして判ったんですか？」

サイトはやっぱり、と飛行機に目を向けると他にひいおじいちゃんの形見はあるかと尋ねた。

あれ、もしかして…。

「同じ世界の出身？」

「…の可能性が高いな」

どうやらお墓を見せてくれるらしい。

竜帝と顔を見合わせ、俺達はサイト達の後へついて行った。

シエスタのひいおじいちゃんのお墓は村の共同墓地の一面にあった。他の白い石墓とは明らかに作りが違ふ黒い石のお墓だ。

「ひいおじいちゃんが、亡くなる前に自分で作ったんですって。異国の文字みたいで誰も読めないんですけど」

「海軍少尉佐々木武雄、異界ニ眠ル」

すらすらとサイトが口にしたのは、この文字の読みだろう。

シエスタは驚いたようにサイトを見つめている。

「けどこれで確定した。シエスタのひいおじいちゃんはサイトと同じ世界の出身だ。」

東から飛んできたって言ってたな…東にサイトと故郷を結ぶ手があるかもしれない。

最近忘れてたけど、サイトは異世界出身だ。家族も心配してるだろうし、早めに手がかりを見つけてあげないと。

シエスタの厚意で俺達はシエスタの家に一泊した。幸いにも俺がハーフェルフだということはなんとかばれなかった。シエスタの弟にフード引っ張られたけど。

それで、何もしないのも悪いからということで紅蓮さんをひつつかまえて医者をすることにしました。

「先生：問答無用でこき使わないで下さい：」

「昔を思い出すだろ？」

「あまり思い出したくないです」

そう言いつつしっかり薬草を擦り潰してる紅蓮さんは律儀だと思う。何だかんだでアルテナには長くいたからな。その頃魔法が使えなくてへばかった紅蓮さんをアンジェラ王女と『特別授業』に放り込んだのは良い思い出。

ホセじいさんも賛成してたし問題はなかったよ？

：つと話がずれた。

「本当にありがとうございます。村のみんなを無料で診察してくださるなんて：」

「いえいえ、一宿一飯の恩返しですよ」

そう言って村長さんに腰痛に効く薬を渡す。

あ、そうそう！ 俺が医者やってることで病人の治療したらブドウの酒貰ったよ！

え、聖職者が酒飲んでいいのかって：気にすんな！ 汝飲むことはあっても飲まれることなかれ、だ。

まあ治療の他に汚物処理をした方がいいとか、この薬草は乾燥させてお茶にすると飲みやすいとか教えたりしたけど。

あ、余談だけど治療中のタバサの顔が怖かった。

なんか、獲物を見る目で見られてた気がするんだけど気のせい？

：それはともかく、帰ったらブドウ酒で竜帝と紅蓮さんと一杯やる予定。楽しみだ！

因みに、流石にブドウ酒を大量に貰いすぎたので俺達は一足早くレポートで学院に帰ることにした。

サイト達は『竜の羽衣』を持ち帰るから竜籠を待つんだって。

竜籠というのは、竜を使った宅配みたいな物らしい。

見てみたい気もするけど、竜を使うのは兵士だって話だしややこしそうだからさっさと帰るに限る。

最初は俺達が頼まれたんだけど、さすがに俺達のレポートでもあんな巨大な物は転移できないし。

どうでもいいけど金どうする気だろ？ 貴族だしどうともなるのかな。

「じゃあ、先に帰ってるぜー！」

「おう、また後で！」

サイト達とひとまずの別れをした後、レポートで学院に戻る。瞬き一回の間で広い草原から見慣れた森へ。

タルブの村のブドウ酒をたっぷり堪能しながらサイト達を待つこと数時間。

その間にギトー先生とミス・ロングビルと何故か学院長が現れ、ち

よつとした飲み会を楽しんでしまった。

数時間後、案の定、サイト達は運賃を払えずに困っていたらしい。それをコルベール先生が立て替えてくれたとかなんとか。

らしい、というのは飲んでた全員が落ちちゃったからだ。

…つか、途中で記憶がないんだが何が起こったんだろう？ みんな顔真っ赤で服が乱れ気味な上、竜帝まで眠ってるし。

学院長が来たときに場所変えて客室で飲んでて本当によかった。

しかしおかしいな、せめてサイト達が来るまでは酔わないように時々プイプイ草の葉含飲んでたんだが…。

本当に何が起こったんだろう？

異世界の宝（後書き）

パイパイ草…

状態異常回復アイテム。作者の個人的主観では苦そう。

飲み会の時に何が起こったのかはご想像にお任せします。

タバサの秘密（前書き）

タバサメインの話です。

：あれ、ルイズどこいった（爆）

タバサの秘密

宝探しから帰ってきて一週間経った。

『竜の羽衣』：もとい、正式名零戦はヴェストリの広場に鎮座したままだが、サイトの話によるともうすぐ飛ぶらしい。

何でもコルベール先生が燃料造りをしてくれているのだとか。

コルベール先生に感謝。また後で差し入れを持って行こう。

ここ一週間、特に変わったことはなく、極めて平和な日々だった。

：俺の頭一つ分したで袖を引っ張っている、青い女の子を除けばな。

「：タバサ。一週間も張り付いてるけど何か用？」

「観察してる」

一週間ずっとこの調子だ。

別に邪険にしてるわけじゃないが、どうにも調子が狂う。

それに、学院にきて最初の頃、それはもう熱心に追いかけられたせいで微妙に顔が引きつってしまっ

つといけない、話がずれた。

「前もそうだったけど、何で俺に付き纏うんだ？ 薬がほしいのか？」

「：」

俺の問いにタバサは答えない。

氷みたいな青い瞳をちらちらと向けながら、何かを考えてるようだった。

うーん…。

「言いにくい？」

尋ねると今度はこくり、と頷いた。

どうするかな…今は竜帝と紅蓮さんアルビオンだし、サイトもコルベール先生のところだ。

こういう時に限って相談できる人がいないとか！

キュルケなら難なく聞き出しちゃうんだろうが、生憎俺にそんな芸当はできないし。

「せめて、病状を教えてくださいませんか？」

取りあえず家族の病気を尋ねることにする。

後回しとも言う！

タバサはかなり長い沈黙の後、真っ直ぐ俺の目を見た。

「心の病」

「…ふむ？」

これはまた、かなり難易度の高い病状である。

ただ、タバサが薬を欲しているってことはストレスからくるものじ

やないな？

恐らく呪いや毒に関する部類だろう。そうでなければ葉なんぞ根本的な解決にならんし。

「一応確認するけど、ストレスか何かで心の病にかかった訳じゃないのか？」

「違う。母様は毒で心を狂わされた」

毒で、か。

何かいやな予感がするんだが、実際の症状を診ないとどうしようもないなあ…。

この青い少女は今にも泣きそうな目をしてるし、どうにかしてあげたいって気持ちも勿論ある。

「判った、診てみるよ。」

けど、実際に会わないとどうしようもないからお母さんに会わせて欲しいんだけど…」

そう問うと、タバサはずいぶん迷ってるようだった。

え、これも駄目っぽい？

かなり長い沈黙の後、タバサはこくりと頷いた。

「連れて行く前に説明をする」

そう言ってタバサは俺を引っ張って、女子寮の彼女の部屋までつれてきた。意外に力強いタバサ…！

しかし、タバサの部屋って殺風景だな。本棚と机とベッドしかないとは…。

同じ十五歳でもシャルロットの部屋とは大違いだ。シャルの部屋はそこそこぬいぐるみとかが置いてあったなあ。

そんな俺の視線に気づかず、タバサは小さく呪文を唱えると周囲から音が消えた。

成る程、サイレントの魔法って奴か。

「まず、これから話すことは他言無用。破った場合は貴方だろうと始末する」

話さないよ。

竜帝には心を読まれるかもしれないが、それはまあ不可抗力だし許して欲しい。

そのことを口に出して伝えたと、タバサはこくりと頷き、とつとつと語り始めた。

「∴私の本名はシャルロット・エレヌ・オルレアン」

「——っ!？」

驚いた！ タバサの本名もシャルロットなのか！

思わず口を押さえて絶叫を抑えたけど、タバサは気にせず話を続ける。

「私の父様は王弟オルレアン公で、母様はオルレアン公夫人」

「オルレアンはよく判らんが…つまるところタバサは王女様なのか！？」

「昔の話。今は王族じゃない」

そうやって彼女は目を伏せた。

…目の奥に、憎しみの炎が見えたのはきつと気のせいじゃないだろう。

それに、もう王族でないという事は…。

「肅正…されたのか？」

俺の言葉にタバサは青い瞳を鋭く尖らせ俺を睨んだ。

「そう。父様は兄王ジョゼフに暗殺され、母様は食事会の時毒を盛られた。

私自身も王族の権利を剥奪された」

そう言うタバサはぎり、と唇を噛んだ。

いつも無表情なだけに、初めて見た憎悪の表情に気圧されて思わず息をのんでしまう。

「…事情は判った。けど、そんな状態じゃ君のお母さんは治せない」

「どうして!？」

「タバサ。君は復讐を望んでるだろう？」

問いかけに、タバサははっきりと頷いた。

…だからなんだよ。

「お母さんという枷がなくなったら、君は絶対復讐に行くだろう」

「ジョゼフは父様の仇。復讐してどこが悪いの」

大分頭に血が上ってるな…。

まあ気持ちは判らないでもない。身内が身内を殺そうとしてた、という状況を味わったからだろうけど。

だけどその後は？

復讐したらどうするんだ？

「なあ、タバサ。君はジョゼフ王を殺して復讐の本懐を遂げたいの？ それともお母さんを元に戻して親子二人で穏やかに暮らせないのか？」

「！」

虚を突かれたようにタバサは固まった。

卑怯な言い方だよな…やっぱ俺は最低な奴だ。

別に、タバサがキュルケの親友でルイズ嬢達の友人だけだからじゃ

ない。

完全な我が儘だけど…妹と同じ名をもつこの子には幸せになって貰いたいから。

「元聖職者としては修羅になんか堕ちて欲しくない。君が復讐を諦めるなら、どんな手を使ったってお母さんを治すよ」

「…ふざけないで」

雪風のような、冷たい声が響いた。

「母様は確かに治って欲しい。だけど、ジョゼフへの憎しみは止まらない！

次代の王に父様が指名されなかったのは悔しかったけど我慢できた。けどジョゼフはそれだけじゃ飽きたらずに父様を、母様を奪った！！

私は、四年前のように穏やかに暮らしていたかった…！　すべてを奪ったジョゼフが憎くてたまらないの！」

「……」

これが、タバサの本心だろう。

なんとまあ齡十五の女の子には荷が重すぎる話だ。

だけど…。

「タバサの決意は判った。条件付きでお母さんを治そう」

「条件は？」

「ジョゼフを殺さないこと」

バツ！とタバサの身長ほどの杖が俺に向けられた。

今にも魔法が放たれそうな気配だが、あわてず騒がず言う。

「別に復讐するな、とは言っていないよ。復讐の方法を変えろって言うてるんだ」

「さっきの話を聞いていた？」

「聞いてた。要はジワジワ苦しめて復讐しなさいってこと。

一息で殺したらこっちは苦しい思いして生きてるのに、あっちは一瞬の苦しみで死んじゃうだろ？ そんなのずるいって」

きよとん、と毒気を抜かれたタバサが杖を下ろした。

…え、何その顔。

「…とても神官とは思えない発言」

「そりゃ元だし。なあ、タバサはジョゼフに一瞬の苦しみを与えた
い？ それとも長きにわたる苦しみを与えたい？」

そう問うてやると、タバサは顔をくしゃくしゃに歪めて震えた。
今にも泣きそうだ。

「…ずるい」

「泣いてもいいよ？ お兄さんの胸をどーんと借りなさい！」

「本当に…ずるい、最低」

そう言いつつ俺の胸借りてるのは誰でしょうか。

しっかりしがみついてきたタバサ：いや、『シャルロット』の頭を撫でてやる。

嗚咽なんて聞こえない振りをしておく。

この子は、涙なんて知られたくないだろうから。

昔、妹にこうしてやったことを思い出しながら、俺はずっとシャルロットの青い頭を撫で続けた。

タバサの秘密（後書き）

イオは重度のシスコンです。

タバサもああアドバイスすればきっと大丈夫でしょう。

：個人的にはジョゼフが苦しむというのがあまり想像できないですが。

あ、珍しく竜帝の出番なしだった。

闇の襲来（前書き）

ようやく…ようやく物語が動きます。

闇の襲来

アルビオンのニューカッスル城。

そこへ唐突に訪れウェールズ皇太子とお茶を飲んでいた竜帝は、ピクリと視線を外に向けた。

「竜帝様？　どうかしましたか？」

「リュウテイ殿？」

「——濃厚な闇の気配だ。この感じ…以前感じた覚えがある」

それを聞いた紅蓮の魔導師は一瞬で思考を切り替え、視線を鋭くする。

「殿下、軍を召集した方がいい。竜帝様の感じたことに間違いはない」

「いや、待ってくれ。一体何が来るというのだ？　…まさかレコン・キスタの」

本の一月前の戦争を思い出し、ウェールズ皇太子は顔を青くする。だが竜帝は険しい顔のまま首を横に振った。

「あんな人間の寄せ集まりではない、もっと巨大な魔のチカラだ。恐らく魔界の眷属…」

「！！」

「：判った、非常事態宣言を出す！」

そう言ってウェールズ皇太子は近くにいた部下に声を掛けると、航空戦力に警戒を促す胸を伝え自身は父王陛下に報告するべく駆け出した。

ただ事ではない雰囲気を感じた周囲の文官達はそれぞれのやるべきことのため一斉にテラスを去る。

紅蓮の魔導師はそれを厳しい目つきで見ていた。

僕の心情を察し、竜帝は紅蓮の魔導師に声を掛ける。

「：紅蓮の魔導師、お前はここに残れ。余計なことを考える足手纏いは要らん」

「っ竜帝様：ありがとうございます！」

紅蓮の魔導師はそう言うと、ウェールズ皇太子の後を追ってテレポートを発動した。

テラスに一人残された竜帝は、ふっと微笑すると空の彼方へ目を向ける。

「デーモン共か：暇つぶしになればよいがな」

黄金の双眸には、見えるはずのない黒い影――ファ・ディールにおける妖魔、デーモンの姿がはつきりと捉えられていた。

＊

——タバサを慰め続けて何時間経っただろう。

すっかり泣き腫らした愛らしい顔は、涙でぐちゃぐちゃだった。

ハンカチで丁寧に拭いてやると、タバサは恥ずかしげに顔を赤らめた。

「遠慮しない、お兄ちゃんが出来たとでも思ってくれ」

「…お兄ちゃん？」

ちよつと舌つ足らずな言い方でなんか可愛い…っていかんいかん！

十五も年下の女の子に何ときめいてるんだ俺！？

…やべ、ちよつと暴走気味だ。びーくーる、びーくーる。冷静になれ。

よし落ち着いた。取り合えずシャルロットは可愛い。シャルもタバサも両方な！

「何してるの？」

「沸騰してた頭を冷却してた。んじゃ早速タバサのお母さん診に行くか！」

「…ありがとう」

そう言ってタバサはぎこちなくだが微笑んだ。

そして部屋から一步出ると、つんぎくような悲鳴が聞こえてきた。

「大変だ！ タルブの村の方に化け物が現れたらしい！！」

タルブ！？

「今までに見たこともない化け物だって！ 赤い身体に紫の蝙蝠みたいな羽、角もあるそうよ！」

「確認は取れてないけど他の国にも出現したらしい。学院も危ないかもしれない！」

次々に耳を流れる情報に、思わず目を見開いた。

噂の化け物に該当するモノの正体もさることながら、タルブの村が危ない！

「私も行く」

俺の心情を察したのか、タバサが腕にしがみついた。

「貴方に死んで貰っては困る。母様を治して、私の復讐を手伝って貰うから」

…あれ、何時の間に手伝うことに？

「今決めた」

無表情ながら声に悪戯っぽい調子を含ませ、タバサは言った。
この数時間でずいぶん変わったように見える。

「…判ったけど、自分の身ぐらい自分で守ってくれよ！」

そう言ってテレポートを発動するべく詠唱を始める。

外で轟音がすることから、サイト達も出撃するみたいだ。

考えることは同じってか！

「テレポートっ！」

一瞬で景色が女子寮から草原へと移り変わる。

そこはまさに地獄だった。

爽やかな風が流れる緑の平野は死臭が香る焼け焦げた平原へ。

所々には異形の影があり、上空で戦う騎士もいるにはいるが少なく、人々はそれらから逃げ惑っている。

…許せん。

「聖なる輝きよ、今こそ魔を穿て。セイントビーム！！」

威嚇がてらに広範囲バージョンのセイントビームを放つ！

降り注ぐ幾条もの光の柱が異形——デーモン共を直撃し、視線を俺に向けさせる。

…当初の予想通り、これは俺達の世界のモンスターだ。そう簡単に

は死なないらしい。

レッサーデーモンとグレートデーモンが交じってるな…これじゃ闇属性は使えないか！

セイントセイバーを俺とタバサの武器に掛け、ベルティナモールを油断なく構え、タバサに目配せする。

「イル・ウォータル…」

俺の意図を理解してくれたらしく、タバサの詠唱が始まる。

俺も同時に詠唱を始め、タバサより早く呪文を完成させ、解き放つ！

「汚れなき光弾よ、連なり合わさり敵を滅せよ！　ホーリーボール
！」

俺達を中心に展開された数十もの白弾は、デーモンに触れると一気に膨張し爆発する。

デーモン共はそれで俺を完全な驚異と認め、村人を放って俺の方へと一斉に飛びかかってくる。

「アイスストーム」

そこに、完成したタバサの呪文が雪嵐となってデーモン共を翻弄する。

だが、何匹かは嵐の包囲網を抜け此方へやってくる！

そうは問屋が下ろさないっつの！

「セイントビーム！」

今度は光の柱ではなく、自分達を中心とした青白い光線を円に沿って放つ！

何匹かはそれでチャームにでも掛かったのか、同士討ちを始めた。た。

「すごい…！」

「タバサ、今のうちにこれ食べて。さっきの魔法で大分精神力使ったろ」

そう言って魔法のクルミを渡しておく。

タバサは半信半疑のようだったが、クルミを食べて淡い緑の光に包まれると驚いたように目を見開いた。

「精神力が回復した」

「そういう効果なんだ…っと来たぞ！」

かなり近づいてきた一体をベルティナモールで殴り倒す。

げー、予想より数が多いすぎ！ 百や二百はいるんじゃないか！？

タバサも氷の槍で近づいてきた一体を確実にしとめたが、まだまだ連中は空にいる。

指定なしでエインシャント…それも魔力弾じゃなくて本物の隕石を

落とす奴をやれば一瞬で終わるが、詠唱長いし却下！
何より被害が激しい！

かといって通常のエインシヤントもそれなりに長い上、魔力を大量に消費するし：ここまでするとボディチェンジで弱体化も難しい。

さっきからチマチマホーリーボールやってるけど：くそー、防衛戦じゃなくて殲滅戦ならエインシヤントが容赦なく使えるのに！

半ば恨みを込めてベルティナモールで二匹同時に頭蓋骨を砕く！
幸いにしてデーモンはこっちで死んだら強制送還されるだけなので特に問題はない。

タバサも時々杖で応戦してるが、俺より向かってくる量が圧倒的に少ないので大丈夫だろう。

こうして考えてる間にもう一発ホーリーボールを発動し、三匹ぐらい倒す。

すると、上空から凄まじい機械音が響いた！

「：遅いぞサイト！！」

サイトが乗る零戦は、轟音をたてながらも機関から発射したミサイルか何かでデーモン共を蹂躪していく。

：こっちが一体倒すのに苦労してるのをあつと言う間に十数体か！
恐ろしい威力だな！

何より、それを使いこなしてるサイトが恐ろしいが…これで空中からの脅威は去ったも同然、一気に畳みかける！」

「タバサ、さっきの雪嵐だ！ 今度はこれ杖に使って！」

「…」

タバサは何も言わずにこくりと頷くと、黙って俺が渡したアイテム——サバギンのウロコを杖にこすりつけた。

サバギンのウロコは瞬く間に光の粒子に変わり、マインドアップの効果タバサにもたらず。

タバサは驚きに目を見張ったが、すぐに呪文を完成させた。

「アイスストーム」

先ほどと同じように雪嵐が周囲に吹き荒れる。ただし、その威力と範囲はざっと二倍だ！

冷気はタバサの制御によって上空へ逃げず地に留まり、デーモン共を氷結させていく。

「トドメっ！ ホーリーボール！！」

数十に展開された光の連弾が、デーモン共の氷像を打ち砕く！これで地上のデーモンは片づいたなつと。

「さて上は…ってなんだあれ！？」

「太陽…？」

そう、それは例えるならまさしく太陽だった。
旋回する零戦の上空に存在するもう一つの太陽は、その巨大な質量
を持ってデーモンを一気に全滅させてしまった。

「あれも…ひこうきのチカラ？」

隣で呆然とタバサが呟く。

いや、彼女だって違うと判っているはずだ。これは零戦の起こした
ことじゃないぐらい。

俺の知る限りこんなことができるのは竜帝と……。

「まさか、ルイズ嬢…？」

思わず漏れたつぶやきは、隣のタバサには聞こえなかったようだった。

闇の襲来（後書き）

もう少し戦闘シーンをうまく描写したいです…。
やっぱり描写は難しいですね。

レッサーデーモン&グレートデーモン..
その名の通り悪魔。レッサーが下級でグレートが上級。
闇属性を無効化、吸収する。弱点は光。

魔法のクルミ..
MPを20回復する。聖剣3のMPの最大値は99だった気がする
ので結構な回復量を誇る。

サバギンのウロコ..
使用者にマインドアップ（精神・知性向上）の効果をもたらす。

戦いの後

デーモン達を一頻り掃討し終わると、サイトが駆る零戦が着陸姿勢に入った。

それと同時にちらほらと見物人か、竜に乗ってた騎士さんやら村人達やらが現れる。

中にはこの間治療した村長さんの姿もあってほっとした。

良かった、怪我人は少なそうだ。

けど、何でデーモンが…まさか、俺達以外にもファ・ディールから来てる奴がいるのか？

そんなことを考えてるとくいくい、とタバサが袖を引っ張る。

「耳」

「あ！」

忘れてた！

慌ててフードを被ると、竜騎士の一人がちょうどこちらに気づいたところだった。

セーフ！

騎士さんは竜から降りると、つかつかと俺達の方へやってくる。

そして、おもむろに杖を突きつけた！

…ってこれは、もしや。

「エルフがこの地に何の用だ!!」

「――っ！」

全然セーフじゃない！

思わず出かかった悲鳴を何とか押しとどめる。

周囲からエルフ!? という叫び声と、時々悲鳴が聞こえる。俺は悪いことなんてしてねーぞこら！

しょうがない！

「…合図するまで振りしてて」

「！」

タバサにだけ聞こえる声量で呟く。

タバサは一瞬驚いた目を向けると、こくりと頷き杖を構える――ふりをした。

騎士はタバサが味方に回ったのを確認して何か言ってるけど、まあスルーだスルー。

遠くの方でサイトが何か叫んでるけど、ルイズ嬢をお姫様だっこしててこっちにこれないらしい。

何か都合が良いけど、良かったなこっち来れなくて。

被害に遭わないぞ。

「答えろ砂漠の悪魔め！　あの化け物を召喚して操ってたのは貴様だな！？」

あー煩い。

いつの間にかそこらにいた騎士全員に取り囲まれてた。

六人…ずいぶん少ないな、やっぱさっきの戦いで減ったんかね？

「無視するな！」

喚くな煩い。

騎士ってこういうもんだっけ？　さっさと口塞いじやおう！
わざとらしく袖で口を塞ぐ動作をして、呪文を解放する。

「草花よ、眠りを誘え。スリープフラワー」

眠りの花粉が地面から舞い上がる！

咄嗟にタバサが口を押さえたのが見えたが、後は間に合わなかったようだな。

眠りの花粉を嗅いだ騎士達はあつと言う間に昏倒し地に倒れる。

その際、フードも舞い上がって一際大きな悲鳴が上がる。

「きゃああああー！！」

「やっぱりエルフだ、化け物だあ！」

「耳長お化けえ!!」

「最後待てこら!？」

誰がお化けじゃあ!

思わず突っ込んだ声に反応して、悲鳴上げていた中の一人――シエスタの弟がぱちくりと目を瞬かせた。

「え…その声、イオ兄ちゃん？」

恐怖と不安がない混ざったような声だ。

…わかつちやいたけど凹むなーこの反応。前はあんなにじゃれついてきたのに…。

はあ、とため息を一つ吐くと、タバサに目配せしてサイトのところまで行く。

ルイズ嬢をお姫様だっこしていたサイトは、ぎつと俺を睨んでいた。

「…何ばれてるんだよ馬鹿やろう」

「不可抗力! 俺は悪くない。それよりルイズ嬢、どうしたんだ?」

「ああ、何か精神力が切れたらしくって…」

「じゃあ起きたらこのクルミ食べさせて上げな。精神力が回復するから」

そう言って魔法のクルミを袋に入れて渡す。

さも当たり前のように会話するサイトと俺を見て、村人達の視線がより怯えたものになって：というか絶句してる。

うーん、俺が無害なハーフェルフですといって信じてもらえる雰囲気ではなさそうだ。

つか、このままだとサイトも気まずいか。

何気なくサイトの隣を確保していたシエスタに目を向ける。

「シエスタ、怪我してる人が居たらこれを飲ませてやってくれ」

ほいっとはちみつドリンク二、三個を渡しとく。

「こ、これってサイトさんを治した秘薬じゃないですか！」

「俺のせいで騒がせちゃったからそれぐらいはな」

見たところ重傷と言える人は少ないし、大丈夫だろ。

どうやら俺達は戦闘が始まって間もない頃にきたっぽいから死者もいなさそうだ。

シエスタの後ろでぶるぶる震えている少年の頭を、くしゃっと撫でてやる。

「びっくりさせて悪かったな。帰るよ、タバサ」

「…」

タバサは神妙に頷いた。

そして何故か俺の頭を撫でる。

思わぬ事態に呆然としてしまう。

「…えと、これは？」

「泣きそうだから」

泣くって…俺が？

タバサは何も言わずに俺の頭を撫で続ける。小さな手が行き来する度に、自分の金髪が顔にかかってくすぐりたい。

テレポートの呪文を唱えることも忘れて撫でられるままになってると、村人達の視線が俺達に向いてることに気づいた。

「知らなかった…イオさんとミス・タバサはそういう関係だったんですね」

「俺も初めて知ったぜ…つかイオって三十路だよな。つまりロリコ」

ガッゴオオオオン！！！！

サイトの頭に全力で振るったベルティナモールは、今までで一番良い音を響かせた。

サイトが吹っ飛んだ拍子に空へ投げられたルイズ嬢を柔らかく受け止める。

サイトの頭がトマト的なことになってるが、死んじゃあいないだろ。シエスタが必死に葉飲ませてるし。

ただし一言言おう。

「俺はロリコンじゃねえ」

あえて言うならシスコンだ！

……。

…威張れることじゃないな。

あまりの事態に呆然としているタバサと村人達に目を向ける。

…どうしよう、すごい気まずい。

何もできないまま無言でいると、村長さんが一步前に踏み出した。

そして誰かが何か言う前に深々と頭を垂れた。俺に。

「前回の治療に続いて、今回の村の危機に尽力して下さい、感謝します」

「…エルフが怖くないんですか？」

「ええ、恐ろしいですよ。けれどイオさん…貴方は違う。貴方は噂や伝承で伝わるエルフのように残虐ではない。

この村を癒やし、救ってくれた。

何より、その少女やあちらのシエスタ、それにあの少年がそれを証明してくれている」

そういつて村長さんは穏やかに微笑んだ。

「みんな、ここにはエルフなんて来てないよ。ここにいるのは前に行らしたお医者様じゃ」

そうはっきり言いきった村長さんの言葉に、人々は顔を見合わせ――苦笑した。

「そうですね、確かにエルフは居ませんね」

「おや、騎士様達は化け物にやられてしまったようだ、手当しなくては」

「…っ！ 有り難う御座います！」

やべ、涙出てきた。タバサに言われたとおりだ。

俺、泣きそうだったんだなあ…。

カッコ悪いな…けど、止まんないや。

「泣かない」

「…ちよつと前とは逆になっちゃったなあ」

「お互い様」

タバサは魔法で宙に浮くと、ハンカチを取り出して涙を拭ってくれた。

恥ずかし、本気で前と立場が逆転してら。

いつの間にか復活したサイトがやってくると、文句を言われてまたからかわれた。

ちよっと腹が立ったからルイズ嬢の面倒しっかり見ろよ、と釘刺しといた。

慌てたサイトに舌をつきだして、テレポートを発動する。

その前に村のみんなに手を振って、な。

…またみんなで行けるといいな。

戦いの後（後書き）

ハルケギニアのエルフの問題は根強い…。

砂漠の悪魔との呼び声高きエルフですが、私は結構好きです。

しかし聖剣3のエルフは臆病で閉鎖的ですが、ハルケギニアのエルフは高慢で閉鎖的ですよね。

ブリミルが原因で人間嫌いなんでしょうが、もう少し歩み寄れないものか…。

因みに今回タルブの村では受容か拒絶で2ルートあったんですけど受容にしてみました。

基本的にハッピーエンドが好きなので…。

余談ですが本編で語られたとおりイオの髪は金髪で、襟足がちょっと長い髪型です。

…キャラ設定作ろうかなあ。

親子（前書き）

ほんとはこれが前回のタイトルだったんですけど、長くなったので分割しました。

相変わらずタイトル考えるのが苦手です。

親子

テレポートで学院へ戻ると、とんだ騒ぎだった。

やれ姫様が出撃したとか、太陽が魔物を焼き尽くしたとか、空から光の柱が落ちてきたとか…うん、後半二つに見に覚えがある。ぎる。

ま、まあエインシャント使っていないし、被害そこまで酷くないしな！
問題ない！

というか姫様自ら出撃とは…多分無事だと思うけど、大丈夫なんだろうか？

しかし、タルブの村の人たちには判ってもらえたけど、あの竜騎士達が追ってきたらやだなあ。

禁術だけど記憶操作でもしとけばよかった…。

…俺こんなに黒かったかな？

ま、いいや！

タバサの方に向き直る。

「今日こんな騒ぎになっちゃったけど…お母さんのところいくか？」

「行く」

きっぱりと頷いてから、タバサはピュイ、と口笛を吹いた。

数秒後に大きな羽音が聞こえる。シルフィードを呼んだのか。

まあ確かにタバサの家なんて知らないからレポートのしようがないもんな。

そう考えていると、タバサが袖を引っ張り鞆を指した。
ん？

「小さくなって」

「…一応聞くけど、何で？」

「監視」

…ああ、家の方は見張られてるのか。
それなら確かにボディチェンジでちびっ子になった方が行きやすいけど…。

「…フードじゃだめ？」

「だめ」

きっぱり言い切られて悲しくなる。

渋々と自分にボディチェンジの魔法を掛け、ちびっ子になる。

正直あまり好きじゃない。

人間の掌に乗るサイズだもんで踏まれやすいし上向けないし…色々見えるから。

幸いにもチェンジした直後、タバサが拾ってくれてその心配はなか

ったが、複雑な心境である。

「掴まってて」

鞆に放り込まれると、口が閉じられ視界が一気に暗くなった。…何に掴まれど、本か？

取り合えず本にしがみつき、タバサの行動を待つ。

シルフィに乗ったらしく軽い衝撃が来るが、まあどうてことない。

「オルレアンへ」

オルレアン…タバサの家の地名だな。

確かラグドリアン湖のガリア側だっけ？

帰りにでもウンディーネに会いたいな…タバサのお母さんを診たら寄って貰うか。

どうやらシルフィが動き出したらしく、鞆に圧力がかかる。

だけどタバサがしっかり抑えてるみたいで、大した問題じゃない。

やっぱりこの子は優しい子なんだな。

「きゅいきゅい！ お姉様、今日は実家に行くのね？」

不意に、女の子の声が響いた。

…え、どちらさん！？

珍しく、焦ったようなタバサの声音が聞こえる。

「…忘れてた」

「きゅい！？ お姉様、シルフィを忘れるなんて酷いのね！」

「え、シルフィ！？」

あ、鞆の中から叫んじまった。

シルフィはとても驚いたらしく、一度宙に投げ出される感覚が身体を襲った。

うおっふ！ け、結構洒落にならん……つかもしかしてタバサもこれ味わってるのか？ 動じてないから全然判らん。

「今の声はイオなのね！ どこに居るの？」

鞆の口が開かれて、外の光が差し込む。

うお、眩しい……どころじゃなく手が伸びてきてるってまさか。

予想通りひよいと掴まれてシルフィの眼前に差し出された！

風圧物凄く痛いんですがタバサさん！？

飛んでるシルフィとバッチリ目が合ってしまったので気まずくて仕方ない。

ここは一発、明るい挨拶でもするか！？

「よう！」

「……きゅい！いいいい！？」

しまった裏目に出た！

タバサによって瞬時に鞆に戻されると同時に、凄まじい揺れが身体を襲うって落下してるだろ絶対！

「問題ない」

「問題あるぞ！？」

おーちーるー！

と心の中で叫んでいると、柔らかな声が聞こえた。

「風よ。空に漂う空気よ。柔らかい塊となりて、彼女を捕らえよ」

直後、柔らかなクッションに受け止められたかのように落下が止まった。

：タバサ達の使う系統魔法じゃない？

先住の魔法とやらか。

「きゅいきゅい！ もう、お姉様ったら自分で飛ぶぐらいしてほしいのね！」

呪文を唱えた女の子――シルフィが怒った調子でタバサに言う。

：顔は見えないけど、たぶん動じてないなこりゃ。

シルフィに拾われ、再び空へ戻るとタバサがシルフィのことを教えてくれた。

何でも伝説と呼ばれる存在で、ばれると面倒だったから隠してたらしい。

そのことを突っ込むと、シルフィはちよつと怒った調子でこう言った。

「伝説なんて人間が勝手に言ってるだけなのね。私からしたら、あのおじさまの方がすごいよね!」

「おじさま?」

「ほら! イオといつも一緒にいる…」

「リュウテイ?」

「そうなのね!」

タバサの答えに、シルフィは満足げに言った。

…もしかして、シルフィは竜帝の正体判ってたりする? ?

「勿論なのね。と、というか人間が気づかないのが不思議なのね」

「リュウテイも韻竜なの?」

「…まあ間違いじゃない」

喋れるし強いし。

けど韻竜よりずっと強大で邪悪な存在ですとは言えない…。
本来の姿なんてちっこい山ぐらいあるし。

「着いた」

…っと、そうこうしてる間に到着したらしい。

シルフィから降りたらしく、とん、と地面を叩いた音が聞こえた。

「お帰りなさいませ、タバサお嬢様」

「ペルスラン」

声からして老年の男性がタバサを迎えたようだ。

タバサの家の執事だろう。

改めて、タバサが貴族であることを思い知る。

ペルスランさんとはそれきり特に会話はなく、タバサが歩く音だけが反響している。

それは暫く歩いた後によりやく止まった。
到着したらしい。

タバサに鞆から出されると、一つの扉の前にいたことが伺える。

「戻って」

「ほいほい」

ボディチェンジを解除し、元の大きさへと戻る。

戻ったことを確認すると、タバサは扉をノックし、入室する。

「母様、お医者様を連れてきました」

「！」

入った部屋はひどい有様だった。

元は品のいい調度品だったろうものは、傷つき中には壊れているものさえある。

床もぼろぼろで、所々にひっかいた後や、血がこぼれたような黒いシミまであった。

何より目に入るのは――ぼろぼろの人形を守るように立つ、やつれたドレス姿の青い髪の女性だった。

「あなた達は誰？　また私のシャルロットを狙ってきたの！？」

「…タバサ、あの人形」

「母様は、心を病んでからずっとあれを私だと思ってる」

やっぱりそういうわけか。

けど、心を病んでる割には話が通じそうだ。多分、人形に触らなければどうにもならないだろう。

「奥様、私は医者です。奥様の調子が思わしくないということで、診察に参りました」

一応そう言ってみるが、依然として興奮状態なのでタバサに一言断ってスリープフラワーを使って眠らせる。

倉庫から医療器具を引っ張り出し、お母さんの調子をはかるが…身体には問題ない。

やっぱ魔法関係か。

「毒を飲まされたって言ってたな。何の毒か判る？」

「調べた限りでは、エルフの毒薬」

へえエルフ：エルフかい！？

成る程、エルフが作ったならその落とし前は半分はエルフの俺がきっちりつけてやらねば。

例え異世界の同族だとしても、人一人の心を奪うなんて許せることじゃない。

掌にマナを集中させて体内の魔力を探る。

異世界といえども、エルフが作ったなら反応が出るはず……！

「！」

見つけた、頭の方：たぶん脳のあたりにおかしなマナの塊がある。

アンティマジック、ティンクルレインで浄化：は余計なマナの負担がかかって悪化するかもしれないな。

ゆっくり、自然に体内の魔法効果を消した方がいい。

「…治りそう？」

「うん、この症状なら体内の魔法効果を取り除けばいい。確実に治るよ」

断言すると、タバサはその場でへたり込んでしまった。

あわてて振り返ると、小さな身体が震えて泣いているのがわかった。

「……良かった…た…かあさま…」

「よしよし、辛かったな」

今日はお互いよく泣く日だなあ…。もう日は暮れて外真っ暗だけど。タバサを慰めつつ、倉庫から星屑のハーブを煎じた薬を取り出す。

「これを少しずつ飲ませてあげれば大丈夫。このハーブには、魔法的な効果を打ち消す作用があるんだ」

「うん…ありがとう」

薬をタバサに渡し、お母さんに飲ませるよう言う。

タバサは早速実行し、お母さんにゆっくりと飲ませた。

効果は早速出た。

副次現象としてティンクルレインとよく似た光の雨がお母さんへ降り注ぐ。

タバサには見えないだろうけど、俺の目にはお母さんを縛り付けていたマナが解けていく様子がハッキリと見えた。

ついでにスリープフラワーの効果も解けたのだろう。

タバサのお母さんはゆっくりと目を開いた。

ぼんやりとした眼差しでタバサを見つめている。

「シャルロット…？」

「かあさま…」

「…シャルロット！ 私のシャルロット！」

「かあさま…！」

さっきのように狂気に染まった目ではなく、ハッキリと光を宿した目をしてお母さんはタバサ…いや、シャルロットを抱きしめた。

感動の親子の再会に、何も言うまい。

ただ、月明かりが二人の髪を照らしてとても綺麗だった、とだけ言っところ。

親子（後書き）

星屑のハーブ…

全魔法効果を解除、初期化する。

この小説ではプイプイ草との差別化として秘薬効果だけ打ち消せます。

ただの毒ならプイプイ草 or ティンクルレインじゃないと解毒できません。

類似魔法として最初らへんに出たアンティマジックがあります。

一件落着、後に災難（前書き）

タバサフラグが建築されつつありますが、ヒロインは未定です。
後半ちよつと注意？

一件落着、後に災難

「む、埃がついた」

服に付いた埃を払いながら、竜帝は独りごちた。

ここはロマリアとガリアの国境、その遙か上空であった。

デーモンを見つけた竜帝は、アルビオンからさっさと飛び立つと丁度ガリアとロマリアへ行く途中のデーモンを発見、『プリズナー』で一掃したのだ。

当然ながら親切心など欠片もない、「そこにゴミがあったから」というレベルなので先に向かったデーモンには興味すら湧かなかった。

黄金の双眸には最早何も映っていなかったが、怒りの炎だけが爛々と輝いていた。

「やれやれ、下等な配下を使って遊戯とはな。あの小童が」

誰もいない上空で呟くと、竜帝はふと置いてきた下僕のことを思い出した。

（…あやつは覚えていないと言っていたが）

竜帝の脳裏に、自分を相棒と言い切った、イオの姿が過ぎった。

今でもただの下僕として見ている元配下。

素で従順なもう一人の下僕と比べ、どうにも扱いにくい…というより扱いやすいはやすいが、調子を狂わせられる下僕だ。

常々くるくると表情を動かす下僕で、鬱陶しいと思わないこともなかったが：こちらへ来てからの日々は新鮮で、正直に言うところ、竜帝は気に入っていた。

気に食わないが『次』と言って引っ張ってきたあの下僕に感謝すらしていないこともない。

だが、それだけに：表にこそ全く出さないが、竜帝はイオの記憶が欠如していることに落胆していた。

蘇るのは竜神官として自分のために動いていた頃の記憶だ。

別に、イオに忠誠心を期待しているわけではない。そんなものは術でどうとでもなるから。

ただ、あの頃に行っていた行動を、今のイオが見てどういう反応をするのかが知りたかった。

特に、遙か彼方で見てるだろう小童にした事を。

(：まあ詮無きことよ)

失われた記憶は、竜帝の力をもってしても取り返すのは難しい。

竜帝はイオについて考えることをやめると、刹那の間にアルビオンへ転移した。

*

「どうも、有り難う御座いました」

無事に回復したタバサのお母さん：オルレアン夫人は優雅に礼をした。

いえいえ、神官として、医者としてやるべきことをやっただけですけど、一つだけ言うなら…。

「この毒薬を作った人は外道です。絶対、性格悪い」

断言してやると、タバサはうんうんと頷きオルレアン夫人も苦々しげに顔を歪めた。

あ、いけないつい本音が。

こほん、と体裁を取り繕うため咳払いする。

「次に同じ症状に陥ったら、助かる見込みはないでしょう。暫くは治ってない振りをお勧めします」

「判りました」

オルレアン夫人はそう言うと、不安げなタバサをそっと抱きしめた。出来れば雲隠れとか出来ればいいんだが：無い物ねだりはしようがないな。

しかしあの毒薬を作ったエルフは何考えてるんだ。

どう考えてもヒト：もとい、心あるモノに対する悪意しかないぞ。

オルレアン夫人は随分長い間この毒に苦しめられてたみたいだし、次飲んだら最悪廃人になりかねない。

タバサにも気をつけて貰わないと。

そんなことを考えてると、きゅっと何かに抱きしめられた。

タバサだ。

「本当に…本当に有り難う」

俯いて顔が見えないけど、泣いてるみたいだった。

何も言わずに微笑みだけ浮かべてそっと青い頭を撫でる。

「…さあシャルロット、学院へお戻りなさい。ここに長い間いてはいけないことぐらい、判っているでしょう？」

「…はい」

タバサはそう言うと言つ赤になった目をこすって泣きながら笑った。こらこら、女の子が目をこするもんじゃないぞ。

ハンカチで涙を拭いてやると、オルレアン夫人は微笑ましそうにくすくすと笑った。

「シャルロットはお兄様が出来たみたいね。ええと…」

「イオです」

「イオさんね？ これからも娘を宜しく願います」

その言葉に、肯定の意を込めて頷く。

うちの主人ともども、しっかり守らせて貰いますよ。

俺ができる最上級の礼をして、俺達はオルレアン邸から学院へ帰った。

：しかし、何か忘れているような？
うーん、思い出せない。

結局悶々としたままその日は眠りに就いてしまった。

「イオー、起きろー！」

「…んー？」

何かサイトの声がする…。
けど今超眠い、寝かせてくれ…。

「なにいつてるんだよ、早起き魔の癖に…！」

サイトがそう言うのと、それきり物音がしなくなった。

ようやく寝れる…。

「うおりゃ！」

バサツと言う音と共に猛烈な寒気を身体が襲った！
寒っ！？ 布団が引きはがされた！？

まあもうすぐ初夏なので言うほど寒くはないが、引きはがされた衝撃で舞った風で眠気が醒めてしまった。

人が寝不足の時にこいつは…!

怒りを込めて思いっきり睨みつけてやると、サイトは悪戯が成功したような笑みを浮かべた。

うあ腹立つっ!!

「あっはっはっは、怒るなよ、いつもイオがしてることじゃん」

「…サイト、俺が何時に寝たか知ってるか？」

我ながら吃驚するぐらい低い声が出た。

どうやら、俺は自分が思っているよりずっと腹が立っているらしい。

サイトの顔が殺気を感じとったのか、青く染まっていく。

もう一度繰り返す。

「何時寝たか、知ってるか？」

「…知りませんっ!!」

「答えは日が昇った頃だよ馬鹿やろおおおお!!」

現在、太陽は東の空を半分上った程度。
つまり、睡眠時間約二時間半。

ぶつり、とどっかの血管が切れた音がした。

「ムーンセイバー」

倉庫から引き出したベルティナモールに強化魔法を掛ける。

サイトは瞬間的に逃げたが問題ない。

（相当）イっちゃってる目でサイトの後ろ姿を眺めて軽く準備運動をし――疾走する！

見る間にサイトとの距離が縮んでいく！

「ぎゃーっ！？ 速度、速度有り得ねえええ！」

「あははは！！ 中ボス舐めんな！」

まともな思考能力は遙か彼方においてきた俺はひたすらサイトを追いかける。

だが火竜山脈で鍛えた足は伊達ではない。

サイトは追いつかれないギリギリまでスピードをあげ、何とかベルティナモールの攻撃をかわしている！

九割方空振りだが、時々装飾品に当たりそうになっではメイドさんたちが必死の形相で被害を無くしている。うん、スミマセン！

逃走劇は女子寮の中まで進展する。

サイトはどうやらルイズ嬢の部屋へ向かってるらしいが、その前に仕留める！

だが、その時。とある一室にギーシュが入室したのが見えた。
なにを思ったのかサイトは進路をその部屋へ向け、半ば蹴破る形で
飛び込んだ！

「ギーシュ！ 助けてくれ！！」

「な、何事だい！？」

「逃がすかつ！」

サイトに続いて部屋に進入した俺は、ベルティナモールをしっかりと
構えて微笑んだ。

「これで袋の鼠だなサイト」

「ちよつと！ 何よ何よ、何なのよー！！」

あ、ここモンモランシーの部屋か。
ギーシュの背後からひょっこり現れた金髪縦ロールの女の子に思い
つきり睨まれるがスルーだ。

つか、喉乾いたな。グラスに注いであるワインを見やり、モンモラ
ンシーに向き合う。

「すまん、ちよつと貰う」

「あ…そ、そっちはだめえええ！！」

モンモランシーに止められたけど時すでに遅し、飲んじやった。

あ、美味しい…。

ちよっと思惑能力が戻ってきたので、お札を言おうとモンモランシ
ーに向き直ろうと振り向く。

その時。

「戻った…何の騒ぎだこれは」

何故か、竜帝とバツチリ目があってしまった。

唐突すぎる展開に目を白黒させるが、レポートか、と納得してしま
う。

うん、思考は完全に戻っていなかった。

しかしそんなことよりもサイトを始末しなければ、と思い直す。

その瞬間、目眩が起きた。

（え——な、に？）

考える暇もなく、揺らぐ意識のままに竜帝に倒れ込む。

なんか、すごい眠、気が……—。

原因を考える暇もなく、意識は暗転した。

一件落着、後に災難（後書き）

ムーンセイバー…

武器にHP吸収効果を付与する月属性の魔法。

すごい捏造の今回。

小童の正体が分かった方が居たら天才。

とりあえずアルビオンが現存してる分、既に原作から完全乖離とい
っていいぐらい乖離してますが、

前々回のデーモン襲撃でアンリエッタは地味に即位しています。

宮廷サイドもやりたい：けどイオの立場上あんまり映せない＆私の
文才が追いつかないorz

アンリエッタ割と好きなんですけどね。

惚れ薬イベントいらなくね？とは思いましたが、水の精霊様に会
いたいがために実行。

イオが被害者にならないと成立しないと言う罫。

次回は第三者視点。薔薇にはなりません！ 多分！

昔話を始めましょう（前書き）

簡単な回想へのお話。

イオの扱いが普段と変わらないのは気のせいじゃないです。

昔話を始めましょう

ガシャン！と派手な音をしてイオの手に使っていたグラスが滑り落ち、割れてしまう。

だがイオは依然として竜帝に倒れ込んだままだ。

不審に思ったギーシュは思い切って声をかけてみる。

「だ、大丈夫なのかね？」

「……ぐー」

返答は寝息だった。

どうやらワインを飲んで落ちたらしい。

気張っていたギーシュは盛大に拍子抜けすると、鍊金を使って散らばったガラスの破片を彼の得意な青銅へ変化させ、収束させる。モンモランシーへの配慮だ。

その一方で、竜帝は面倒そうに自身に倒れ込んだイオを見た。

「帰ってきて早々何の騒ぎだ」

呆れたような声音で呟くが、誰にも答える術はなかった。

否、正確にはただ一人だけは、答えられなかったと言うべきか。

モンモランシーだ。

(ど…どうしよう…飲んじやった上に、目も合わせてしまったわ)

実は、イオの飲んだワインにはモンモランシーの作った秘薬が入っていたのだ。

それかなり厄介なモノが。

ガタガタと震えるモンモランシーだったが、それに気づいたギーシュが心配そうに彼女を見つめた。

「どうしたんだい、モンモランシー？ 君の愛らしい顔が、不安に揺れているのは忍びない。どうかいつもの笑顔をを見せてもらえないか？」

「ギーシュ…」

モンモランシーは感極まった表情でギーシュを見つめた。

（私が愚かだったわ…ギーシュはいつも私を気遣ってくれるのに、それを信用できないなんて！）

ワインに混入した秘薬のことを考え、モンモランシーはよよっと涙した。

ギーシュの浮気癖が許せなくて作った秘薬だったが、そんなものに頼るなんて何と浅ましいことだろうか。

そう考え直したモンモランシーは正直に話す決意をすると、震える口を開いた。

「ちょっと聞いてくれる？」

数分後。

ワインに混入した秘薬——惚れ薬のことを正直に話したモンモランシーは青い顔で竜帝を見つめていた。

暫く黙っていた竜帝が口を開く。

「：貴様の説明では、この愚か者が我に惚れ薬の効果で恋愛感情を抱いたようだが」

かなり嫌そうに竜帝は言った。

モンモランシーはビクツと震えつつも頷いた。

「：精霊の涙を使ってるから、エルフだろうと効果にかかってるはずよ」

「えええ、竜帝大好きなイオなんて想像できねえ！」

先程まで命を狙われていたことをすっかりと忘れ、サイトは寝ているイオをつついた。

竜帝はちょうど良いとばかりにサイトにイオを押し付ける。

「うわつとと：いきなり押しつけるなよ！」

「では頼んだ、と言っておこう」

しれっとした表情で竜帝は言った。

サイトは不満気ながらも、逆らうとどうなるかよく知っていたので渋々従う。

「小娘。当然解除薬はあるのだろうか？」

竜帝の言葉に、モンモランシーは明後日の方向へ顔を向けた。

沈黙が周囲を支配する。

「…モンモン、お前」

「その呼び方やめてよね！ …解除薬は、ない、わ」

材料が足りないもの、とモンモランシーは言った。

曰く、惚れ薬に使った材料で最後だったとか。

その名も『精霊の涙』。文字通り、水の精霊の力が色濃く含まれる特別なモノなのだ。

「けど、私のお小遣いは薬の材料揃えるのですっからかんだから、もう買えないわ」

「うーん…友の危機には力を貸してあげたいけど、グラモン家も貧乏でね」

貴族二人は早々に匙を投げた。

その瞬間、竜帝はサイトから引ったくるようにイオの首根っこを掴み、上下に振った。

「貴様星屑のハーブの一つや二つ持っているだろうさっさと起きろ」

「ちょ！ 睡眠不足のイオは起こさない方がいい！！ 俺もそれで追いかけてたんだよ！」

「ふん、配下風情が主に適う訳がないだろう。ほら起きろ」

「…うー」

とどめとばかりにべしべしと頬を叩かれて、ようやくイオは目を覚ました。

青い目はいかにも眠そうに半開きで、鬱陶しげに周囲を見る。

「…眠いんですけど」

「あら、あんまり効いてないのかしら？」

普段通りに見えるイオに、モンモランシーは首を傾げた。
だが、次の瞬間その顔が凍り付く。

何故なら、竜帝を見た瞬間、イオが子供のように目をきらきらさせて抱きついたからだ。

「竜帝サマ、好きです！」

「鬱陶しい」

当の本人は本気で鬱陶しげに、全力でイオに回し蹴りを繰り出した。
辛うじて留め具がくっついていたモンモランシーの部屋の扉が粉碎され、イオの姿が遙か彼方へと消えていく。

しかし数秒後、傷一つない姿でイオは転移してきた。

「酷い！ 竜帝サマの為ならその辺からゾンビ喚んだり城の一つや

二つ落としてもいいのに！」

「お前本当に神官なんだよな!？」

ものの数秒で回復、レポートしてきた上、半泣きで過激な発言をかますイオにサイトが突っ込む。

サイトを見たイオは、居たの? とばかりの視線をサイトに向けた。

「神官つーても元だし。昔よくやってたような気もするから問題ない!」

「…都市を殲滅したのは紅蓮の魔導師だろうが。確かにゾンビ作れと命じた記憶はあるが今はどうでも良い。

自分の異常をとつとと治せ」

「異常？」

本気で訳が分からないと首を傾げるイオに、竜帝はこめかみを押さえる。

「いいから星屑のハーブ辺りを寄越せ」

「あ、星屑のハーブは現在品切れ」

竜帝は問答無用でイオを雪だるまにして黙らせた。

部屋の中に雪だるまというのもシュールだが、復活の気配はない。

竜帝は二人の会話についていけなかった様子のモンモランシーに目を向けた。

「…どうやら貴様の作った惚れ薬は、我が昔仕込んだ術と類似するようだな」

「…えっと、ミスタ・リュウテイ？ 信じたくはないのですがそういうご趣味が」

言い終わる前にギーシュも雪だるまにされる。

それを見て、あやうく自分も声に出しかけたサイトは、口を出さなかった自分を内心褒め讃えた。

（ナイス判断、俺！）

そんなサイトの内心を知ってか知らずか一瞬だけ彼に視線を向けた竜帝は、はあ、とため息を一つついた。

「この惚れ薬は強力だな、それこそ洗脳の類の域にはいるほどに。本当に、昔を思い出すな忌々しい。

…そういえば黒髪、以前我等の事情を話すと約束していたな」

「あ、ああ！」

それは以前、火竜山脈で交わした約束だった。

——尤も、宝探しやら戦いやらで忙しかったサイトはすっかり忘れていたわけであったが。

「面倒だが、桃色の小娘の部屋へ行くぞ。この雪だるまが溶けるまで昔話をしてやる」

あの小娘なら金はあるだろうしな、と付け加えて竜帝はぱちん、と指を鳴らした。

昔話をはじめましょう（後書き）

メリークリスマス！！

家族で簡単なお祝いでしたよケーキ美味しいです。

しかし最近ルイズ出ないなあ…次回で出ますが。文才下さいサンタさん。

昔の彼ら（前書き）

正体バラし編。あっさりといきます。

：どうでも良いんですが、ゼロ魔の前、聖剣編読みたい方っているんですよーか？

昔の彼ら

部屋の主、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールは目の前の光景に頭を押さえた。

一昨日発現した自分の系統について、あれこれ考えていたところに唐突に三人の人間が現れたのだから無理もない。

その内二人は己の使い魔であつたのでそれだけであれば別に驚かなかつただろう。

驚いたのは、三人目が見慣れたハーフエルフではなく、モンモランシーであつたからだ。

「…で、どういう訳なのかしらサイト」

困ったことがある場合、ルイズは基本的にサイトに尋ねる。

他二人は面倒くさいという理由で逃げる事がほとんどだからだ。

それはさておき、尋ねられたサイトは困ったように頭を掻いた。

「何というか、実は…」

＊

「ウチの使い魔に何してんのよモンモランシー!!」

「私のせいじゃないわよ! 貴女の使い魔の自業自得よ!!」

「それは…そうだけど」

事のあらましを把握したルイズは、惚れ薬を作ったモンモランシーを責め立てる。

しかしモンモランシーの言うとおり、惚れ薬を飲んだのはイオの自業自得であるため言い返すことができない。

女の言い争いを黙って見守っていたサイトと竜帝は、やれやれと顔を見合わせた。

「そんなわけで、ルイズ、金ある？」

「…一応五百エキュールあるけど、足りるの？」

曲がりなりにも公爵家の三女。お小遣いは結構ある。

ルイズの言葉に、モンモランシーは目を輝かせた。

「流石公爵家の三女ね！ それだけあれば在庫さえあれば手に入るわ」

「さっさと材料買ってきなさいよ」

ルイズは疲れたようにモンモランシーを部屋から出すと、ベッドに腰掛けて肘をついた。

鳶色の瞳が、竜帝の黄金の瞳を見据える。

「…で、漸く本題かしら」

「まあな」

ルイズが彼女にしてはぞんざいにモンモランシーを部屋から追い出した理由はここにあった。

一応、己の使い魔達が異世界出身であることは自分しか知らない故に、友人——といえるのか微妙なモンモランシーには聞かれなかったのだ。

秘密にしてる割には、彼らを放任し過ぎている気もするがそこはそれ。

強大な力を持つ使い魔達を御しきれ自信が、ルイズにはあまりなかった所為でもある。

今の所、アルビオン関係者以外には知られていないのは幸運だろう。尤もルイズは知らないが。

「それにしても、何で今話そうと思ったの？ イオが正氣に戻ったときでも良いじゃない」

ルイズの尤もな問いに、竜帝は視線を虚空に向けて呟いた。

「…アレと紅蓮の魔導師がいない方が都合がいい」

「珍しいな。イオはともかく、紅蓮さんも聞いちゃいけないのか？」

「まあ、奴等にとっての黒歴史を語るようなものだからな。反応が楽しみではあるが」

ぽつりとこぼれた最後が本音だろう。

竜帝は掌に魔力を浮かべると、口元をつり上げた。

「さて、刮目せよ」

竜帝がそう言うと、掌に漂っていた魔力の塊から、強烈な光が溢れ出した！

「きゃっ！」

「うわっ！」

光の奔流に目を閉じた二人だったが、数秒後、目を開き絶句する。

「な…」

「ここどこだよ!？」

一瞬で景色が切り替わった。

広々とした豪華なルイズの部屋から、どこか知らない暗く、薄気味悪い洞窟へと。

おまけに竜帝の姿も見えず、二人はあたふたと周囲を見回した。

『——貴様等が見ているのは私の記憶だ』

どこからともなく、竜帝の声が二人の頭に響き渡る。

「記憶？」

『時間的には一年と半年ほど前か。そら、左に目を向けて見ろ』

言われるままに二人は左へと顔を向けた。
すると、そこを基点にして唐突に薄暗い洞窟に光が灯りだす。

『…全く、竜帝様も人が悪い。今や私の力は貴方を越えているのは
明白でしょうに』

真っ赤なマントを身に纏った金髪の青年が言った。紅蓮の魔導師だ。
ペラペラと自分自慢をする生意気そうな表情から、とても今の落ち
着いた表情を浮かべる紅蓮の魔導師を連想することはできそうにな
い。

「…紅蓮さんって昔あんなだったんだな」

「学院にいる、一人や二人どころじゃない大量にいる連中を思い出
すわね」

こそこそと昔の紅蓮の魔導師についての感想を言い合う二人だった
が、紅蓮の魔導師の左隣にもう一人居るのに気がついた。

紅蓮の魔導師も少し小柄なその人物もまた金髪で、顔の半分を覆い
隠すような仮面をしているのが特徴的だ。

「…あれ、イオかな？」

「耳長いし、きっとそうね」

『…』

記憶のイオは全く喋らず、延々と自分自慢をしている紅蓮の魔導師

に近づくと――投げた。
紅蓮の魔導師を、だ。

「「ええええええ！？」」

息ぴったりで悲鳴を上げるルイズとサイトだったが、記憶のイオは辛うじて浮遊術を発動させた紅蓮の魔導師に魔法による追撃をした。今度は紅蓮の魔導師も遅れを取ることなく、同種の魔法で相殺する。

『…く、不意打ちとはやりますね。敬虔な聖者だった貴方からは想像もできませんでしたよ』

『生前と一緒にされてもなあ…ほら、今闇の呪法で現界してる身だし。ただ、調子に乗った餓鬼にお仕置きするのは何時でも同じだよな！』

イオがそう言うや否や、二人は大規模な魔法合戦を始めてしまった。昔のイオはあんまり変わらないらしい。

火竜山脈でよく見た光景を思い出し、呆然とするサイトだったが、隕石やら炎弾やらがルイズに襲いかかるのを見て顔色を変える。

ルイズに反応できる距離ではなかった。

サイトは反射的にルイズを押し倒し、回避する。

「ルイズ、大丈夫か！？」

「え、ええ…ありがと」

『折角回避したところ悪いが、あくまでも記憶。実体ではないぞ』

竜帝の言葉にルイズを庇うように覆い被さったサイトは、炎弾が身体をすり抜けたのを見て納得する。

「ちょ、ちよつと…いい何時までおお押し倒してんのよ!!」

「あ。ご、ごめんっ!？」

慌てて飛び退くサイトだったが、その間にもイオと紅蓮の魔導師の戦いはエスカレートしていった。

が、じゃれ合ってるルイズとサイトは気づいてないようだ。

『…恋人騒ぎはやめんか、見ていて鬱陶しい』

「「恋人じゃないっ!」

息ぴったりで何を言うのやら、と竜帝が思っていると、落ち着いたのか二人は再び戦いに目を向けた。

現在、紅蓮の魔導師の魔法をイオが片っ端から弾いて接近戦を繰り広げているが——一見するとただのフルボッコであった。

「一方的な戦いね…紅蓮の魔導師って弱いのか?」

「いや、つい最近似たような光景見たけど…紅蓮さんも相当だぜ? お前達メイジ風に言うならスクウェアぐらいじゃないか?」

「スクウェア!？」

判りやすい例にルイズが小さく悲鳴を上げた。

その瞬間、凄まじい轟音とともに紅蓮の魔導師が空を舞う。

『そんな、馬鹿なっ——！？』

『反省しろ！』

洞窟の一部が吹き飛び、漸く二人の戦いは幕を閉じた。

岩肌は抉れ、所々は真っ赤に爛れており、またあるところは空間ごと切り取られたかのような綺麗な半円を描いている。

桁外れの力の応酬とそれが齎した惨状に、ルイズとサイトは絶句してしまう。

「こ…こんなの、人間ができる事じゃないわ」

まるでエルフが本気を出したみたい、とルイズは続ける。

暫く呆然としていたサイトだったが、はっと我に返り、叫んだ。

「…って結局正体なんて語ってないじゃん！」

サイトの突っ込みは尤もであった。

しかし竜帝の声はどこまでも冷静に響く。

『下等な存在の分際で我に語らせる気か、自分で理解しろ。』

…しかし気づかんのか？ 以前から所々でイオが零していたと思うが』

「え…。…あ、あれ冗談じゃないのか！？」

思い当たる節があったのだろう。サイトは震える声で虚空に呟いた。

視界の端に蠢く、巨大な影を見ないようにして。

『ラスボスやら中ボスやらは間違いではない。

我等は正真正銘、世界を滅ぼし、世界を支配する、^〴筈”だったモノ――』

ルイズは影を見つけて悲鳴を飲み込んだ。

優に百メイルはあるだろう巨大な影。ルイズが知る限りのどんな生き物も超える大きさだ。

背後から竜帝の声が響いた。

『――ヒュージドラゴンであり竜を統べる帝”竜帝”と、配下の”紅蓮の魔導師”、”竜神官”だ』

振り返った二人が見たのは――黄金の双眸と身体を持つ、巨大なドラゴンの姿だった。

昔の彼ら（後書き）

展開が強引なことに定評があるろろまでです。

竜帝が何故このタイミングで正体バラしたかという点、配下の黒歴史を広めるチャンスだったから。

（特に紅蓮さんはこれを知られたくない）
本人たちがいたら全力で邪魔されるので。

竜帝のキャラが壊れすぎですね分かります。

そして今回出てきた記憶を見せる魔法はオリジナルですすいません。
一応フェアリーが神獣復活を主人公たちに見せるシーンを参考にしています。

あと記憶がないイオにこれ使って思い出させりゃよくね？と思われるますが、竜帝は全部を全部見ていたわけじゃないので無理なんです。
報告とかでは知ってるけど現物を見た訳じゃないというあれです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4663y/>

食われた俺のゼロ魔戦記

2011年12月25日18時45分発行